

まつばら 松原遺跡

長野南農業協同組合集出荷場施設建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991・3

長野市教育委員会

序

文化の向上発展は、本質的には常に前進し琢磨し想像するなかにごそ育てられるものと考えます。先人の残した埋蔵文化財は長い歴史の過程のなかで様々な生活ドラマを描き、常に新しい開花を繰り返しながら時代の流れとともに真の文化的価値観が今日まで伝承されてきたものと確信いたすものであります。

このたび発掘調査いたしました松原遺跡は、長野市松代町東寺尾地籍に位置し、千曲川の自然堤防上にあります。南には数多く歴史の舞台となった松代、北には500余基を数え、積石塚で有名な大室古墳群が位置しております。また背後には中世山城の寺尾城跡、金井山城跡があり、歴史的にも恵まれた環境にあるところであります。

松原遺跡は昭和53年に『更級埴科地方誌』にて紹介される他は本格的な調査を受けないまま現在に至りました。近年、中央自動車道長野線や上信越自動車道の建設北上に伴い、(財)長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施されております。また高速道関連の開発事業も活発化し、激増するものと思われま。今回は長野南農業協同組合の新施設建設工事に起因するおよそ2000㎡の調査でありましたが、遺跡の規模・内容ともに善光寺平最大級の集落跡であることが確認されました。

ここに、長野市の埋蔵文化財第40集を刊行いたしました。広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、長野南農業協同組合の皆様、工事請負者(株)北信土建の皆様、調査に携わっていただいた作業員の皆様等関係者各位には本報告書の上梓をもって感謝の意を表します。

平成3年3月

長野市教育委員会
教育長 奥村秀雄

例言・凡例

1、本書は、長野県長野市松代町東寺尾地籍に所在する松原遺跡の、「長野南農業協同組合集出荷場施設建設事業」にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は次のとおりである。

- (1) 検出した遺構・遺物の概要は、それぞれIII章・IV章において記述した。
- (2) 実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。なお磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。
- (3) 遺構の測量は平面直角座標系第VIII系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、コーディックシステムを援用するため俯写真測図研究所に委託した。現場にて1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では1：80の縮尺に統一して掲載している。ただし遺物出土状況実測図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- (4) 住居跡等の実測図において、焼土・炭化物等の区別は下記のとおり網掛によって表記した。さらに弥生時代の住居跡に関しては、下記のとおり石器類の出土位置を示した。

焼土・焼土痕……  炭化物……  打製・磨製石鏃……▲ その他の石器・石製品……●

(5) 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器…1：4、石器・石製品1：1、金属器…1：3、に統一してある。ただし遺物の種類によってはこの限りでないため、縮尺を明示してある。

(6) 土器の実測図において、土器の種類はその断面の網掛により、黒色処理・朱墨痕、赤色塗彩等は網掛・2色刷り等によって表記した。

須恵器……  灰釉陶器……  土師器・弥生土器……白抜き 黒色処理…… 

3、調査及び整理は矢口・青木の指導に基づき飯島が総括し、記録は各調査員が分担した。整理における調査員の分担は下記の通りである。

- ・遺構図整理 寺島・飯島
- ・遺物整理 小松・大室・今井
- ・遺物実測 中殿・矢口(栄)・小林・寺島・飯島
- ・浄書 寺島・飯島
- ・写真 飯島
- ・執筆 矢口(1章1節)・中殿(IV章1節a)・寺島(III章3節a～d、IV章2節ab)・飯島

4、本書のII章「松原遺跡周辺の環境」として、和田 博氏(長野市立博物館専門員)にご執筆いただいた。また出土した石器類に関して、整理・実測・浄書・原稿執筆を久保勝正氏(斎宮歴史博物館主事)にお願いし、IV章2節c「石器・石製品」として玉稿を賜った。記して感謝申し上げたい。

5、調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会(長野市埋蔵文化財センター)が保管している。なお、出土遺物の注記記号は『MMTN』と表記してある。

目 次

序 文	
例言・凡例	
I 調査の経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	2
3 調査の体制	4
II 松原遺跡周辺の環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	9
III 遺 構	10
1 基本層序	10
2 奈良・平安時代の遺構	15
a 住居跡	15
b 掘立柱建物跡	33
3 弥生時代中期の遺構	37
a 住居跡	37
b 土 坑	49
c 環状溝跡	49
d 河川跡	50
e 性格不明遺構	50
IV 遺 物	52
1 奈良・平安時代の土器	52
a 土 器	52
b その他の遺物	64
2 弥生時代中期の遺物	65
a 土 器	65
b 土製品	66
c 石器・石製品	82
d 石製品（管玉・石戈）	95
V 結 語	97

図 版 目 次

第1図 松原遺跡周辺地形図	6
第2図 松原遺跡周辺字図	7
第3図 松原遺跡周辺遺跡分布図	8
第4図 基本層序柱状図	10
第5図 第1次面〔平安時代遺構面〕 遺構分布図	11~12
第6図 第2次面〔奈良・平安時代遺構面〕 遺構分布図	13~14
第7図 1次面1号住居跡実測図	15
第8図 1次面2号住居跡実測図	15
第9図 1次面3号住居跡実測図	16
第10図 1次面4号住居跡実測図	16
第11図 1次面5号住居跡実測図	17
第12図 1次面6号住居跡実測図	17
第13図 1次面7号住居跡実測図	18
第14図 1次面8号住居跡実測図	18
第15図 1次面9号住居跡実測図	19
第16図 1次面10号住居跡実測図	19
第17図 1次面11号住居跡実測図	20
第18図 1次面12号住居跡実測図	20
第19図 1次面13号住居跡実測図	21
第20図 1次面14号住居跡実測図	21
第21図 1次面15号住居跡実測図	22
第22図 1次面16号住居跡実測図	22
第23図 1次面17号住居跡実測図	23
第24図 1次面17号住居跡カマド付近 遺物出土状況実測図	23
第25図 1次面18号住居跡実測図	24
第26図 1次面19号住居跡実測図	24
第27図 1次面20号住居跡実測図	25

第28図	2次面21号住居跡実測図	25	第66図	3次面11号住居跡実測図	45
第29図	2次面22号住居跡実測図	26	第67図	3次面23号住居跡実測図	45
第30図	2次面24号住居跡実測図	26	第68図	3次面26号住居跡実測図	45
第31図	2次面25号住居跡実測図	27	第69図	3次面16号住居跡実測図	46
第32図	2次面26号住居跡実測図	27	第70図	3次面20号住居跡実測図	46
第33図	2次面27号住居跡実測図	28	第71図	3次面18号住居跡実測図	47
第34図	2次面27号住居跡カマド付近 遺物出土状況実測図	28	第72図	3次面22号住居跡実測図	47
第35図	2次面28号住居跡実測図	29	第73図	3次面24号住居跡実測図	48
第36図	2次面29号住居跡実測図	29	第74図	3次面25号住居跡実測図	48
第37図	2次面30号住居跡実測図	30	第75図	3次面1号土坑実測図	49
第38図	2次面31号住居跡実測図	30	第76図	3次面28号土坑実測図	49
第39図	2次面32号住居跡実測図	31	第77図	3次面河川跡土層断面図	50
第40図	2次面33号住居跡実測図	31	第78図	3次面1号性格不明遺構実測図	50
第41図	2次面34号住居跡実測図	32	第79図	3次面1号性格不明遺構微細実測図	51
第42図	2次面35号住居跡実測図	32	第80図	3次面2号性格不明遺構実測図	51
第43図	2次面1号掘立柱建物跡実測図	33	第81図	1次面住居跡出土土器実測図(1)	55
第44図	2次面3号掘立柱建物跡実測図	33	第82図	1次面住居跡出土土器実測図(2)	56
第45図	2次面4号掘立柱建物跡実測図	33	第83図	1次面住居跡出土土器実測図(3)	57
第46図	2次面2号掘立柱建物跡実測図	34	第84図	1次面住居跡出土土器実測図(4)	58
第47図	2次面5号掘立柱建物跡実測図	34	第85図	1次面住居跡出土土器実測図(5)	59
第48図	第3次面〔弥生時代中期遺構面〕 遺構分布図	35~36	第86図	2次面住居跡出土土器実測図(6)	60
第49図	3次面1号住居跡実測図	37	第87図	2次面住居跡出土土器実測図(7)	61
第50図	3次面15号住居跡実測図	37	第88図	2次面住居跡出土土器実測図(8)	62
第51図	3次面2号住居跡実測図	38	第89図	2次面住居跡出土土器実測図(9)	63
第52図	3次面6号住居跡実測図	38	第90図	1・2次面出土遺物実測図	64
第53図	3次面3号住居跡実測図	39	第91図	3次面住居跡出土土器実測図(1)	67
第54図	3次面4号住居跡実測図	39	第92図	3次面住居跡出土土器実測図(2)	68
第55図	3次面13号住居跡実測図	39	第93図	3次面住居跡出土土器実測図(3)	69
第56図	3次面5号住居跡実測図	40	第94図	3次面住居跡出土土器実測図(4)	70
第57図	3次面12号住居跡実測図	40	第95図	3次面住居跡出土土器実測図(5)	71
第58図	3次面7号住居跡実測図	41	第96図	3次面住居跡出土土器実測図(6)	72
第59図	3次面21号住居跡実測図	41	第97図	3次面住居跡出土土器実測図(7)	73
第60図	3次面8号住居跡実測図	42	第98図	3次面住居跡出土土器実測図(8)	74
第61図	3次面19号住居跡実測図	42	第99図	3次面住居跡出土土器実測図(9)	75
第62図	3次面9号住居跡実測図	43	第100図	3次面住居跡出土土器実測図(10)	76
第63図	3次面14号住居跡実測図	43	第101図	3次面住居跡出土土器実測図(11)	77
第64図	3次面10号住居跡実測図	44	第102図	3次面住居跡出土土器実測図(12)	78
第65図	3次面17号住居跡実測図	44	第103図	3次面住居跡出土土器実測図(13)	79
			第104図	3次面住居跡出土土器実測図(14)	80
			第105図	3次面出土土器実測図	81

第106図	3次面出土ミニチュア土器・有孔円板・ 円板状土製品実測図	81	第110図	3次面出土石器・石製品実測図(4)	91
第107図	3次面出土石器実測図(1)	88	第111図	3次面出土石器・石製品実測図(5)	92
第108図	3次面出土石器実測図(2)	89	第112図	3次面出土石器実測図(6)	93
第109図	3次面出土石器実測図(3)	90	第113図	3次面出土石器実測図(7)	94
			第114図	3次面出土石製品実測図(管玉・石戈)	95

表 目 次

第1表	1・2次面出土土器器種構成表	54	第3表	有樋式石戈・長野県出土石戈集成表	96
第2表	3次面出土石器・石製品器種構成表	87			

写 真 目 次

写真1	調査地遠景（東側の山から）	1	写真6	3次面住居跡掘下げ作業	2
写真2	重機による表土剥ぎ作業	1	写真7	遺構精査と実測作業	3
写真3	遺構面検出作業	2	写真8	現場での遺物洗浄作業	3
写真4	1次面遺構掘下げ作業	2	写真9	発掘調査参加者	3
写真5	2次面遺構掘下げ作業	2	写真10	松原遺跡周辺航空写真	5

写真図版目次

第1写真図版	調査区遠景 第1次面〔平安時代遺構面〕全景 第1次面全景	第4写真図版	1次面15号住居跡全景 1次面16号住居跡全景 1次面17号住居跡全景 1次面17号住居跡カマド付近遺物 出土状況 1次面17号住居跡カマド近景 1次面18号住居跡全景 1次面19号住居跡全景 1次面20号住居跡全景
第2写真図版	1次面1号住居跡全景 1次面1号住居跡カマド近景 1次面2号住居跡全景 1次面2号住居跡カマド近景 1次面3号住居跡全景 1次面4号住居跡全景 1次面5号住居跡全景 1次面6号住居跡全景	第5写真図版	第2次面〔奈良・平安時代遺構面〕 全景 2次面21号住居跡全景 2次面22号住居跡全景 2次面24号住居跡全景 2次面25号住居跡全景
第3写真図版	1次面7号住居跡全景 1次面8号住居跡全景 1次面9号住居跡全景 1次面10号住居跡全景 1次面11号住居跡全景 1次面12号住居跡全景 1次面13号住居跡全景 1次面14号住居跡全景	第6写真図版	2次面26号住居跡全景 2次面27号住居跡全景 2次面27号住居跡カマド付近遺物 出土状況

	2次面27号住居跡カマド近景		3次面26号住居跡全景
	2次面28号住居跡全景	第12写真図版	3次面1号土坑全景
	2次面30号住居跡全景		3次面環状溝跡群
	2次面31号住居跡全景		3次面1号性格不明遺構全景
	2次面32号住居跡全景		3次面1号性格不明遺構近景
第7写真図版	9・11・17・28・32号住居跡 切合い状況		3次面2号性格不明遺構全景
	2次面33号住居跡全景		3次面2号性格不明遺構近景
	2次面34号住居跡全景	第13写真図版	1次面1号住居跡出土土器集合写真
	2次面1号掘立柱建物跡全景		1次面3号住居跡出土土器集合写真
	2次面2号掘立柱建物跡全景		1次面4号住居跡出土土器集合写真
	2次面3号掘立柱建物跡全景		1次面5号住居跡出土土器集合写真
	2次面4号掘立柱建物跡全景	第14写真図版	1次面6号住居跡出土土器集合写真
	2次面5号掘立柱建物跡全景		1次面7号住居跡出土土器集合写真
第8写真図版	第3次面〔弥生時代中期遺構面〕全景		1次面8号住居跡出土土器集合写真
	第3次面調査区北側全景		1次面9号住居跡出土土器集合写真
	第3次面全景	第15写真図版	1次面10号住居跡出土土器集合写真
第9写真図版	3次面1号住居跡全景		1次面11号住居跡出土土器集合写真
	3次面2号住居跡全景		1次面12号住居跡出土土器集合写真
	3次面3号住居跡全景		1次面13号住居跡出土土器集合写真
	3次面5号住居跡全景		1次面15号住居跡出土土器集合写真
	3次面6号住居跡全景	第16写真図版	1次面17号住居跡出土土器集合写真
	3次面7号住居跡全景		1次面18号住居跡出土土器集合写真
	3次面8号住居跡全景		1次面19号住居跡出土土器集合写真
	3次面9号住居跡全景		1次面20号住居跡出土土器集合写真
第10写真図版	3次面10号住居跡全景	第17写真図版	2次面21号住居跡出土土器集合写真
	3次面12号住居跡全景		2次面24号住居跡出土土器集合写真
	3次面13号住居跡全景		2次面25号住居跡出土土器集合写真
	3次面14号住居跡全景		2次面26号住居跡出土土器集合写真
	3次面15号住居跡全景	第18写真図版	2次面27号住居跡出土土器集合写真
	3次面16号住居跡全景		2次面28号住居跡出土土器集合写真
	3次面17号住居跡全景		2次面29号住居跡出土土器集合写真
	3次面18号住居跡全景		2次面30号住居跡出土土器集合写真
第11写真図版	3次面19号住居跡全景	第19写真図版	2次面31号住居跡出土土器集合写真
	3次面20号住居跡全景		2次面32号住居跡出土土器写真
	3次面21号住居跡全景		2次面33号住居跡出土土器集合写真
	3次面22号住居跡全景		2次面34号住居跡出土土器集合写真
	3次面24号住居跡全景	第20写真図版	2次面35号住居跡出土土器集合写真
	3次面25号住居跡全景		3次面1号住居跡出土土器写真
	3次面25号住居跡床面遺物出土状況		3次面3号住居跡出土土器集合写真
			3次面2号住居跡出土土器集合写真

	3次面5号住居跡出土土器集合写真
	3次面6号住居跡出土土器集合写真
第21写真図版	3次面7号住居跡出土土器集合写真
	3次面8号住居跡出土土器集合写真
	3次面10号住居跡出土土器写真
	3次面11号住居跡出土土器写真
	3次面12号住居跡出土土器集合写真
第22写真図版	3次面13号住居跡出土土器写真
	3次面17号住居跡出土土器写真
	3次面15号住居跡出土土器集合写真
	3次面16号住居跡出土土器集合写真
	3次面18号住居跡出土土器集合写真
第23写真図版	3次面19号住居跡出土土器集合写真
	3次面20号住居跡出土土器集合写真
	3次面21号住居跡出土土器集合写真
	3次面25号住居跡出土土器集合写真
第24写真図版	3次面26号住居跡出土土器集合写真
	3次面28号土坑出土土器写真
	3次面河川跡出土土器写真
	3次面1号性格不明遺構出土土器写真
	3次面出土ミニチュア土器写真
	3次面出土有孔円板・円板状土製品写真
第25写真図版	3次面出土石器写真(1) 打製石鏃
	3次面出土石器写真(2) 打製石鏃
第26写真図版	3次面出土石器写真(3) 打製石鏃
	3次面出土石器写真(4) 石 錐
第27写真図版	3次面出土石器写真(5) 楔形石器・スクレイパー
	3次面出土石器写真(6) 部分磨製石器
第28写真図版	3次面出土石器写真(7) 石 核
	3次面出土石器写真(8) 二次加工痕有剝片
第29写真図版	3次面出土石器写真(9) 使用痕有剝片
	3次面出土石器写真(10) 磨製石鏃
第30写真図版	3次面出土石器写真(11) 石包丁
	3次面出土石器写真(12) 磨製石斧
第31写真図版	3次面出土石製品写真(1)
	3次面出土石製品写真(2) 管 玉
第32写真図版	3次面出土石製品写真(3) 石 戈

I 調査の経過

1 調査の事務経過

松原遺跡は従来より松代自然堤防上に展開する弥生時代中期から平安時代に亘る複合遺跡として周知されてきた。特に(財)長野県埋蔵文化財センターが平成元年より発掘調査を実施している上信越自動車道建設地では、弥生時代中期の大遺構群が発見され、更に縄文時代早期にまで遡る遺物・遺構が検出されている。ことほどさように今まで予知されなかった新所見が次々に明るみ出てきて、遺跡の学問的評価が急上昇している。そんな折り、上信越自動車道建設隣接地に国庫補助による集出荷場建設事業が長野南農業協同組合より急浮上してきた。以下書類に残された日付を追って事務経過を記する。

- 平成元年12月13日付 長野南農業協同組合組合長理事田口忠幸より「埋蔵文化財発掘調査依頼書」の提出がある。「発掘調査依頼月日 平成2年3月1日」とあったが、事業量・調査期間・調査費等を勘案したところ年度内事業は不可能であると結論し、更に、新年度初頭からの着手にも他の開発事業との関係から困難が予想されるため、関係機関と発掘調査事業量の変更協議を進める。
- 平成2年3月1日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出する。
- 3月30日付 文化財保護法第57条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の届出について」を提出があり、4月2日付で長野県教育委員会教育長あて進達する。
- 4月2日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。
- 4月5日 「松原遺跡（農協集出荷施設）の発掘調査について」実施協議書決済なる。
- 4月5日～7月31日 発掘調査を実施する。
- 4月10日付 (有)写真測図研究所と「松原遺跡遺構測量業務委託契約書」を締結する。
- 7月30日付 長野南農業協同組合理事長と「弥生時代河川跡の保護について」協議書を取交わす。
- 8月8日付 「発掘調査終了届」・「埋蔵文化財拾得届」・「保管届」を関係機関へ提出する。
- 8月23日付 「埋蔵文化財認定について（通知）」がある。
- 平成3年3月31日 発掘調査報告書『長野市の埋蔵文化財第40集 松原遺跡』を刊行する。



写真1 調査地遠景（東側の山から）



写真2 重機による表土剥ぎ作業

2 調査日誌

- 平成2年4月5日 重機による表土剥ぎを開始。
- 4月6日 引き続き、重機による表土剥ぎ。
- 4月7日 平安面〔第1次検出面〕を確定させる。
- 4月9日 機材搬入、テント設営。遺構検出作業を開始。
- 4月10日 重機による表土剥ぎ及び、遺構検出作業を継続。
- 4月12日 遺構検出作業継続。(以後27日まで遺構の検出作業が続く) SB1・2・4完掘、写真撮影。SB5～9検出。本日で第1次検出面の表土除去を完了する。
- 4月13日～19日 SB5～17検出。
- 4月20日 コーディックシステム測量用測点を設定。
- 4月21日 コーディックシステムによる測量。
- 4月24日 SB15～20検出、掘下げ。平面図結線を行う。
- 4月25日 遺跡遠景写真撮影、2回目のコーディックシステムによる測量。
- 4月26日 平面図結線。遺跡全景の写真撮影。
- 5月1日 コーディックシステム測量3回目。
- 5月2日 第1次面の調査を終了する。
- 5月7日 重機による第2次面の検出を開始。
- 5月8日～10日 SB21～25検出。重機稼動終了。
- 5月11日 コーディックシステム測量4回目。
- 5月12日 平面図結線。
- 5月13～14日 コーディックシステム測量5回目。
- 5月17日 長野市立博物館主催の考古学講座による見学会、25名が現場見学に訪れる。
- 5月18日 平面図結線。
- 5月21日～23日 SB26～35検出。
- 5月24日 遺跡全景の写真撮影。
- 5月25日 コーディックシステム測量6回目。
- 5月26日 平面図結線。
- 5月28日 第2次面の調査を終了する。
- 5月29日 重機による第3次面〔弥生中期面〕の検出を開始。

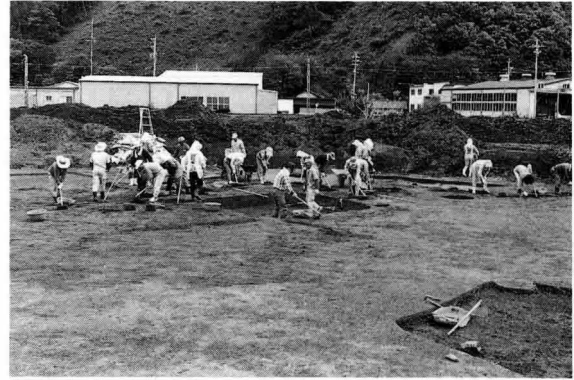


写真3 遺構面検出作業



写真4 1次面遺構掘下げ作業



写真5 2次面遺構掘下げ作業



写真6 3次面住居跡掘下げ作業

5月30日～6月4日 SB1～8検出。第3次面、調査区北半分の検出、重機稼動終了。

6月5日 廃土搬出作業開始。

6月7日 SB9～15検出。廃土搬出作業終了。

6月11日 コーディックシステム測量7回目。

6月12日 平面図結線。河川跡（調査区北隅）検出。

6月13日 河川跡断面図実測。

6月14日～19日 SB16～18検出。

6月20日～25日 重機による第3次面、調査区南半分の検出。

6月27日～29日 SB19～24、河川跡（調査区南一带）検出。

7月2日・4日 コーディックシステム測量8回目。

7月5日 平面図結線。

7月6日 空中写真撮影及び、遺跡の全景写真撮影。

7月10日 SB25・26検出。

7月12日～16日 1号性格不明遺構検出。

7月17日 SB25の床面より石戈出土。9回目のコーディネートシステム測量。

7月18日 平面図結線。河川跡の掘下げ開始。長野市広報課『広報ながの』石戈の取材に訪れる。

7月20日～23日 1号性格不明遺構平面実測。

7月24日 2号性格不明遺構検出。

7月25日～27日 2号性格不明遺構平面実測。

7月30日 プレハブ、テントの撤去作業。

7月31日 河川跡断面図実測。機材の撤去。本日をもって現場における全ての調査および作業を完了する。



写真7 遺構精査と実測作業



写真8 現場での遺物洗浄作業



写真9 発掘調査参加者

3 調査の体制

本調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	奥村 秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター	所 長	水沢 国男
庶務係		主 幹 兼 所長補佐	小山 正
		職 員	青木 厚子
調査係		調査係長	矢口 忠良
		主 事	青木 和明（調査主任）
		主 事	千野 浩
		主 事	飯島 哲也（調査主任）
		専 門 員	中殿 章子（調査員）
		専 門 員	横山かよ子
		専門主事	小松 安和
		専門主事	中沢 克三
		専門主事	大室 昂（調査員）
		職 員	今井 悦子
執筆参加者	和田 博（長野市立博物館専門員） 久保 勝正（三重県立斎宮歴史博物館主事）		
調査員	矢口 栄子・小林 伸子・寺島 孝典		
調査参加者	青木つや子・青木幸子・上田清・上田富子・片桐みつ子・北沢秀子・小林利男・小林直美・ 酒井国衛・地代所洋子・島田みつえ・島津一栄・島津恵子・清水春子・杉田せつ子・鈴木美智子・ 関崎文子・多城恵子・立田淳子・塚田道三・常田千代江・中沢順子・中沢正明・西川一郎・ 橋爪孝次・深沢要作・松田とく江・丸山トキ子・宮崎さちき・宮下豊・村松正子・柳沢秀幸・ 山口敏子・山下雄三・吉田孝・吉野なを枝		
整理参加者	池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・徳成奈於子		
遺構測量委託	有限会社 写真測図研究所 代表取締役 杉本 幸治（長野市鶴賀678）		

発掘調査期間中、事業主体者である長野南農業協同組合におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき絶大なご協力を賜った。また調査の実施にあたっては、工事請負者である(株)北信土建の方々や、隣地である高速道路用地内を調査中であつた(株)長野県埋蔵文化財センターの原明芳氏・青木一男氏をはじめ調査研究員諸氏より松原遺跡の調査所見を適切にご教示いただき、調査を円滑に進めることができた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

他にも下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

赤沢徳明・大竹憲昭・唐沢茂・川越邦江・北村博義・鐵英記・黒沢浩・新谷和孝・田中邦雄・鶴田典昭・中沢道彦・平松良雄・古川登・前島卓・町田勝則・宮下健司・山口明（敬称略）

II 松原遺跡周辺の環境

和田 博（長野市立博物館専門員）

1 地理的環境

岩鼻の狭隘を破り坂城広谷を北流した千曲川は、更埴市で長野盆地に流入し流路を東北に転じ、やがて立が花を盆地からの流出口とし、島崎藤村も舟下りした先行性峡谷を飯山盆地へ向う。

一方、中新世中期以降の比較的新しく脆弱な堆積が主体である西部山地を集水貫流した犀川は、犀口を谷口として東南流する幾条もの支流を分岐し、おびただしい流土を盆地に搬入埋立て、裾花・浅川等と相俟って広い沖積盆を構成して千曲川を盆地東端の河東山地裾に押しやっている。

そのため、千曲川の盆地流入・流出両地点間の直距離約25kmに対して高度差は僅か20mに過ぎず、流路攻撃面には河食崖をつくり堆積面には自然堤防を形成し、その名のとおり山脚を縫って蛇行し、緩やかな水脈を引いて「中麻奈尔」の万葉古歌を想起させてたゆとう。その情景を相馬御風は次のように詠じている。

ゆく水のすえ遠々しみすずかる信濃たかはら（高原）秋深みかも

松代附近の河東山地はフォッサマグナ活動で生成された火成岩類はじめ、時期の異なる火山岩類が清野層（別所同位層）の泥岩類中に岩脈となり、それを脊梁とした山稜が数条半島状に盆地へ突出し、山稜間は湾入部とな



写真10 松原遺跡周辺航空写真 (Scale=1:5,000)



第1図 松原遺跡周辺地形図 (Scale= 1 : 5,000)

り出入の多い複雑な山麓線の組み合わせは、リアス式海岸線に似通う。

1742年（寛保2）戊の満水で松代城内も浸水した苦い経験から、1752（宝暦2）に城郭から約1km遠避け蛇行を少くして開削した現流路に比し、旧流路は城下を洗い象山離山・愛宕山（寺尾城山先端）によって松代盆地から分離された清野や松原湾入部は崖錐も侵食され、その左岸には自然堤防を発達させている。

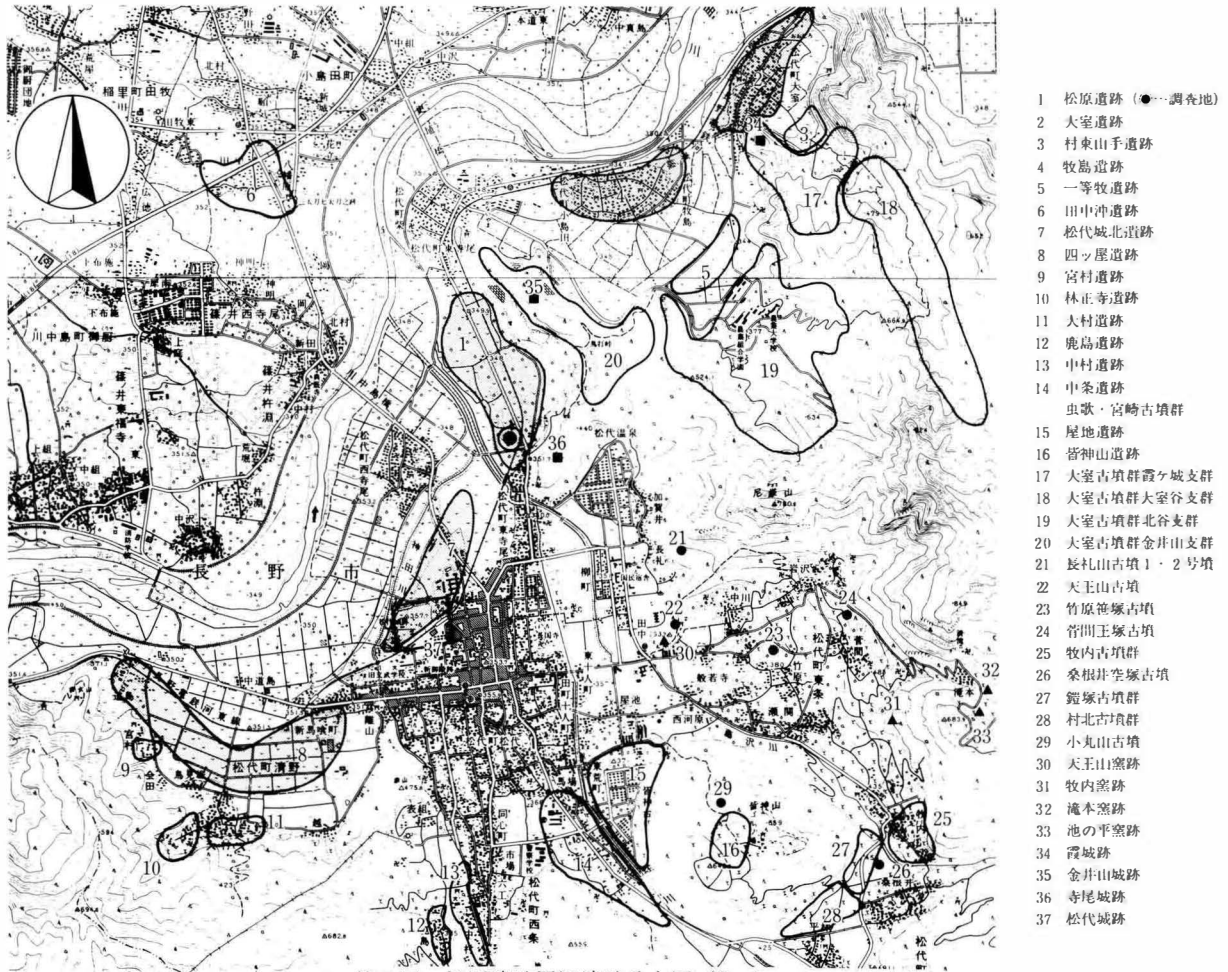
湾入部への蛇行は、流下速度の旺盛な犀川支流の影響が大きく、小森へ流入する古犀川・1561年（永祿4）9月10日の払暁戦で上杉武田両勢が流れをはさんで戦闘態勢を兩岸にとったとみられる杵淵附近流下の支流や小島田・真島界の支流等がそれぞれ清野・松原・牧島への流入堆積を助長している。

旧流路は自然堤防の堆積によって後背湿地となり、清野・大室では水田や一部に蓮田が経営され、牧島では近年に至って畑への転換が多くなっている。しかし松原では地表がやや低いのみで北端に化石湖金井池を残す。

この地域では牧島・柳島・猫島・道島等島のつく地名が多く、そこには四ツ屋遺跡をはじめ、古来からの人々の生活の息吹きを明らかにし、道島・西寺尾・柴・釜屋・牧島・大室等の集落が現在成立している。

本調査地点はそんな松原自然堤防の一角に所在する。元来は寺尾自然堤防とも呼ばれて松代小学校や城跡附近から松原へかけての連続堆積面であるが、藤沢川を合流した蛭川が本遺跡南近隣で浸食崖をともなって解析してはいたものの、両河川はこの上流で天井川となり、中流一帯に湿地を展開する。温泉団地が造成されてからもしばしば浸水に悩まされて以来、揚水機場のほか川筋も改修され以前の数倍も深く掘削された。

松原自然堤防上は桑園や長芋栽培が行われ、近年リンゴや巨峰の果樹園も増加している。両端の柴や東寺尾からの住宅地進出はほとんど見られないが、高速道及びIC設置は今後急速な変貌をもたらすと予想される。



第3図 松原遺跡周辺遺跡分布図 (Scale=1:50,000)

2 歴史的環境

松代地域には注目に値する遺跡遺構が多い。地蔵峠や稲葉・笹付の旧石器をはじめ、縄文期には山麓から山腹へかけ、所によっては山頂にも及び、弥生時代後期に至ると遺跡は面的な拡大を示す。

古墳時代には前代の遺跡をさらに踏襲拡大し、松代盆地を一望に見下ろせる舞鶴山1・2号墳を盟主的存在としてこの地域周辺に多くの古墳が構築され、後期には皆神山周辺に群集化する。

そのような中で四ツ屋遺跡の弥生～中世、城北遺跡の平安期、松原からの弥生中期末土器の収集等から清野自然堤防同様、寺尾松原自然堤防は弥生時代から平安時代に及ぶ相当濃密な集落存在が予見されていた。

大室谷や牧島北谷その他を中心に谷間や尾根を埋めて500基もの古墳群が指摘されるにもかかわらず、金井山山稜の数基以外松原地籍とその周辺には後期古墳や関連する遺跡遺構は従来報告されていなかった。この事実は松代盆地に比定される英多郷と牧島をも含む大室牧との空白地域を形成し、当時人々の生活空間を容認しない地形環境であったかとも考えられていた。が、今次調査は予見が正しかったことを裏づけた。

中世以降は話題にこと欠かない。真田信之が1657年（明暦3）に致仕、城下北約3kmの柴村（現大鋒寺地籍）に隠棲し、時に92才。当時松原は見事な松並木道であったと伝える。そのころの本街道は松原を見下ろす鳥打峠越えて現在の主要地方道中野更埴線が1922年（大正9）開通するまで本通り、近世には北国往還脇街道であった。この道筋は近世初頭の開通で、それ以前は標高515mの可候峠、鎌倉・南北朝時代はさらに上方標高約1055mの清滝越えであった。1336年（建武3）清滝城攻防の史実にも裏書きされるし、1561年（永禄4）上杉輝虎（謙信）が手兵を率いて可候峠を越えたとの俗説さえ往時の通路への記憶として許容されたのであろう。

その永禄4年武田晴信（信玄）が海津入城と八幡原への転進の2回ともに通過した広瀬の渡もこの隣接地とされ、山本勘助遺体が流れついた伝承のある洞合橋を現本流の対岸にした勘助塚地籍も西北地続きにある。近世になって同墓碑はさらに北の西阿弥陀地籍に移されている。いずれにせよ、松原を含むこの附近も激戦場の一角と見られよう。

近世初頭、加賀前田候が出府の際に峠上から松^{まつしろ}城城を見下ろして、寺と見違えたとの悔蔑に立腹した藩主松平忠輝が可候峠を廃止した、との挿話を松代町史は伝える。茶地藏地籍を登る泣坂や加賀井に下る九十九折の急坂、これが峠名のもとでありこの峠路が大きな障害で、北国街道が善光寺経由の平坦路に変更された要因に加えられたのは推測に容易である。

鳥打峠は街道開設以前、寺尾城主の獵場であった。その寺尾氏が1550年（天文19）村上氏に攻撃され、信之の祖父真田幸隆が救援に来ている。金井山城については寡聞にして伝承さえ耳にしない。が両拠点の居館や根小屋とそれらに伴う墓域が松原やそれに接する金井山山麓に今次高速道関連調査で検出された。

鳥打峠路中腹の扇平地籍に処刑場があり、今も多くの供養碑が残されている。近世初代松代藩主に入封した森忠政は、1582年（天正10）織田信長の北信制圧を強行して、地域の反抗を受けた長兄森長可の報復に往時の主謀者300余人を山で断罪したと伝えられ、以後二斗八騒動その他の罪人（？）も同様であったという。

なお、北平閉鎖曲線高地で低墳丘墓・金井山山麓の中世墓域地下から後期古墳が確認されたことも附記しておきたい。

参考資料

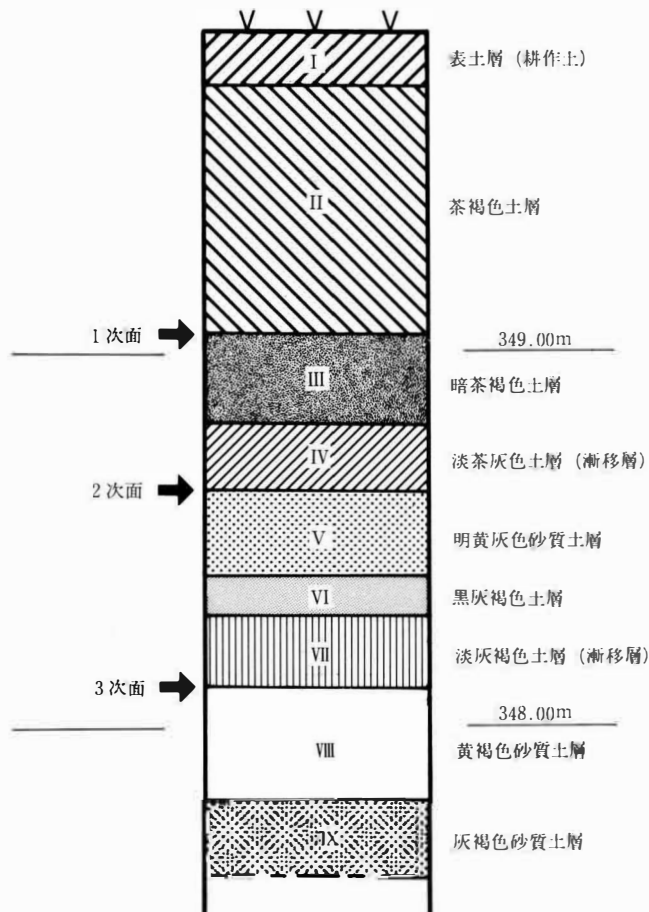
『長野市防災基本図・表層地質図』 『長野地域の地質』 『長野市字界図』 『更級埴科地方誌1・2巻』 『松代町史下巻』 『日本地名大辞典第20巻』 『信濃史料第11巻』 他 『長野県通史』 『長野市の埋蔵文化財第32集中条遺跡』 『長野市の埋蔵文化財第36集屋地遺跡』

III 遺 構

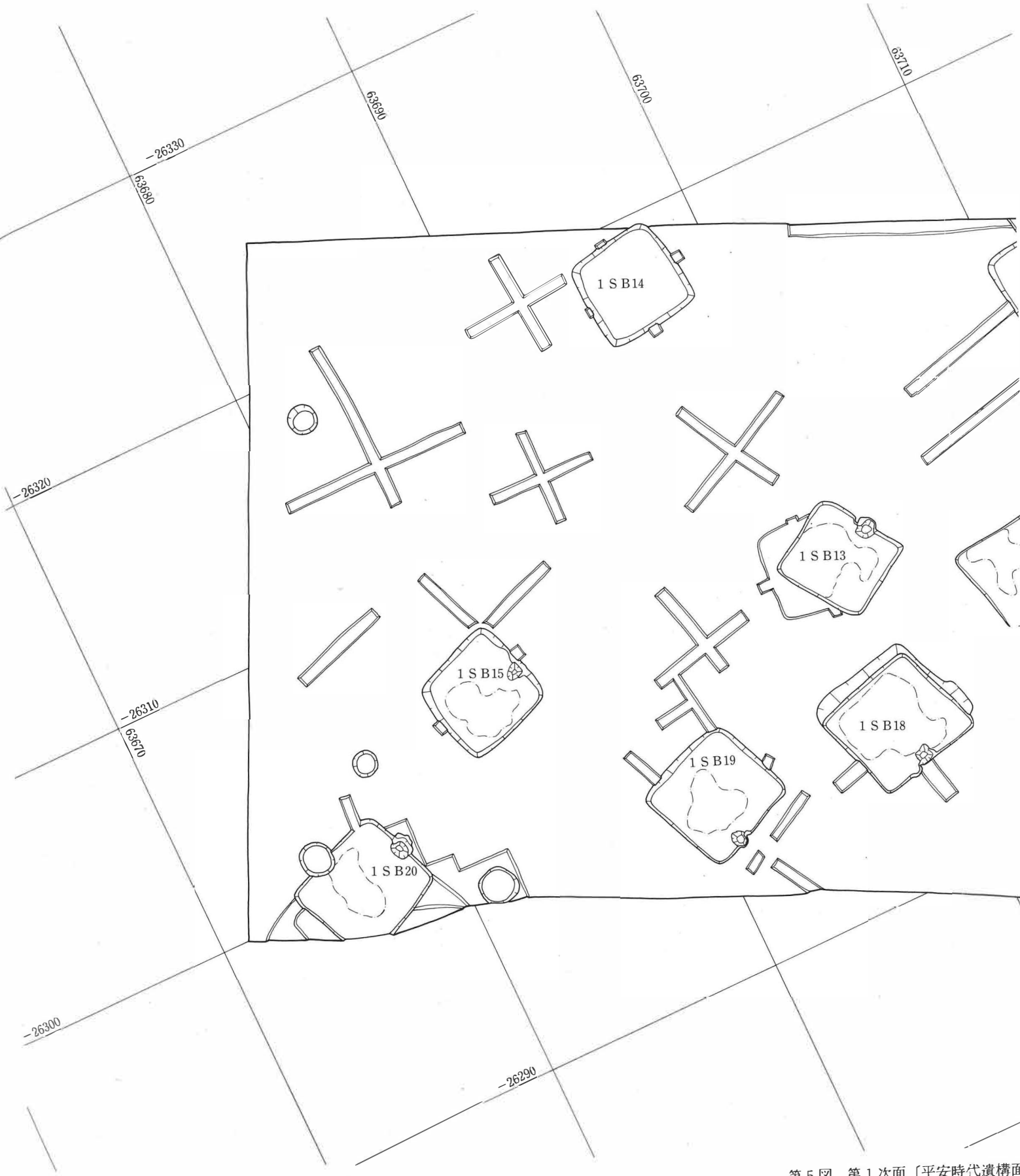
発掘調査の範囲は長野南農業協同組合の集出荷場施設（総合センター）建設予定地であり、調査面積は2100㎡である。予定地の調査前状況は、千曲川によって形成された肥沃な沖積地に長いも・ぶどう・玉ねぎ等を栽培する畑作地であった。この東寺尾地籍一帯に展開する松原遺跡の中にあつて、標高350m以上の微高地帯に属している。前章で述べているとおり千曲川の自然堤防跡と考えられ、良好な集落遺構の検出が予測できた。このことは、平成元年度より隣接する上信越自動車道建設用地を発掘している（財）長野県埋蔵文化財センターの調査成果からも容易に推測し得た。

1 基本層序 [第4図]

松代町東寺尾一帯は基本的に、長いものに栽培に適した千曲川沖積による砂質土層である。調査区内の基本的な土壌堆積は9層に分層される。I層は表土層で、畑地耕作土である。地表下約1mより確認される暗茶灰褐色土層は、平安時代中期頃の地山層であり、この層の上面にて1次面を検出した。この下層に漸移層を持ちながらV層として明黄灰色砂質土層が堆積しており、その上面が2次面である。奈良時代末期から平安時代の初頭と考えられる。VI層の黒灰褐色土層は、弥生時代後期から古墳時代の包含層として考えられるが、遺物の含有量が極めて少なく、また遺構の検出を見なかったことから断定できない。さらにVII層の漸移層を挟みながら、VIII層の黄褐色砂質土層が堆積している。3次面とした弥生時代中期遺構面のベースとなる土層で、若干の粘性をもち土中の鉄分を棒状に結実させ含有している。この下層は粘性をもった砂質土層である。



第4図 基本土層柱状図 (Scale=1:20)



第5図 第1次面〔平安時代遺構面〕



第6図 第2次面〔奈良・平安時代遺構面〕

2 奈良・平安時代の遺構

a 住居跡

Ⅰ次面Ⅰ号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.28m×横3.32m
主軸方位	東、N-73°-E
検出面からの壁高	48cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	2基有、柱穴とは異なる。
カマドの遺存状態	煙道、支脚石、掘込みが残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第81図・1～4
カマド出土土器番号	第81図・1、3、4
その他の遺物	刀子 [第90図・12]
その他特記事項	

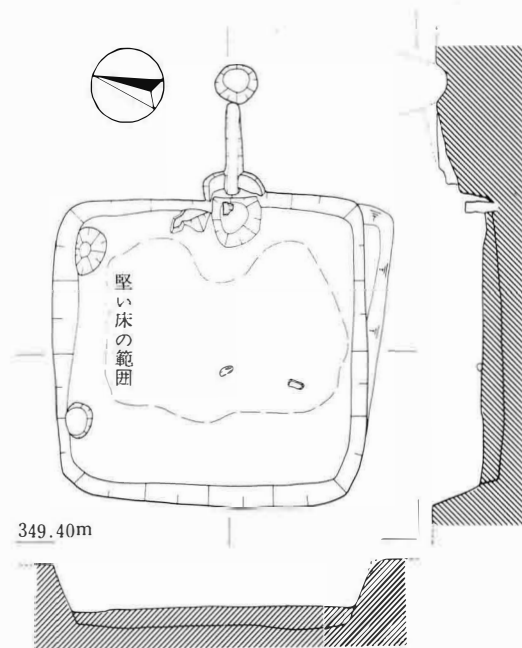
支脚石が立ったままの状態で見出された。

煙道の先にある土坑は、炭溜りと考えられる。

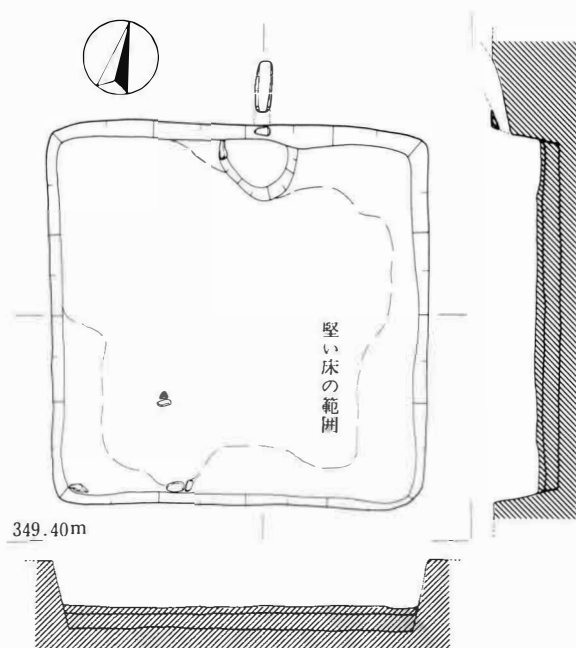
Ⅰ次面Ⅱ号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.0m×横3.96m
主軸方位	北、N-15°-W
検出面からの壁高	44cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	煙道、掘込みが残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第81図・5～8
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	鍬先形鉄製品 [第90図・13]
その他特記事項	

カマド本体左袖部の芯材として扁平な石を立て使用している。



第7図 Ⅰ次面Ⅰ号住居跡実測図

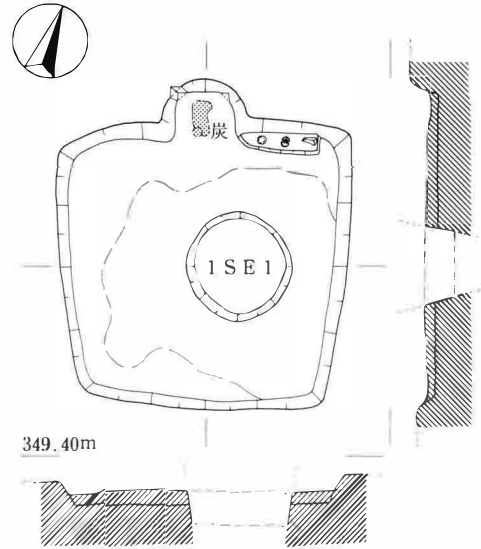


第8図 Ⅰ次面Ⅱ号住居跡実測図

1次面 3号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.08m×横3.04m
主軸方位	北、N-20°-W
検出面からの壁高	16cm
他遺構との切合い	1 SE 1 に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	炭、焼土痕残る。
カマドの構築材	不明だが、粘土のみか？
出土土器番号	第81図・9～15
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

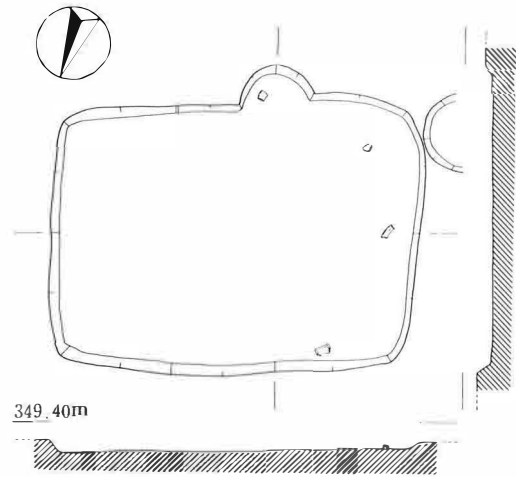
カマドの右側に土師器杯 [第81図・9、12] が置かれている。



第9図 1次面 3号住居跡実測図

1次面 4号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸2.84m×横3.92m
主軸方位	南、S-18°-E
検出面からの壁高	8cm
他遺構との切合い	2号掘立柱建物跡の真上に位置しているが、切合っていない。
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	痕跡のみ
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第81図・16～20
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

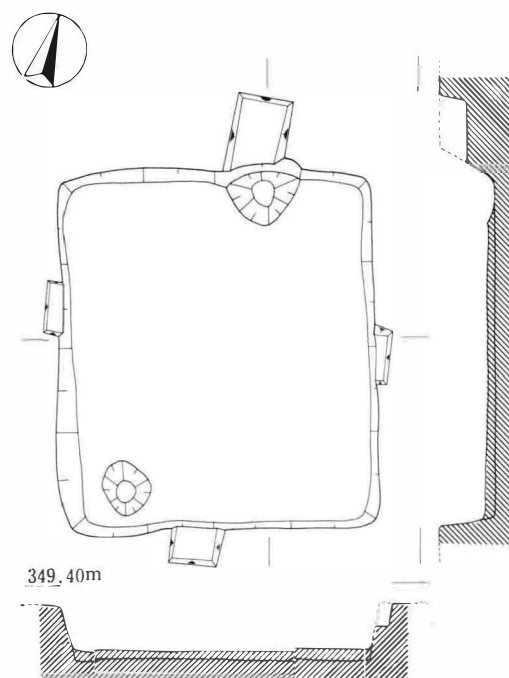


第10図 1次面 4号住居跡実測図

1次面5号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸3.84m×横3.32m
主軸方位	北、N-16°-W
検出面からの壁高	48cm
他遺構との切合い	1号掘立柱建物跡を切っている。
堅い床の有無	無
土坑の有無	深さ12cmの楕円状土坑
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	須恵器甕破片、粘土
出土土器番号	第81図・21～25
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

カマド本体右袖部の芯材として須恵器甕体部破片を利用している。



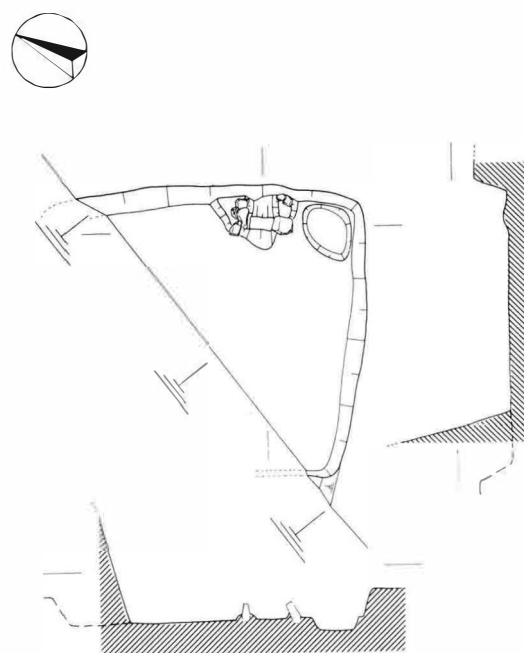
第11図 1次面5号住居跡実測図

1次面6号住居跡

平面形	(正方形)
法量	主軸(3.08m)
主軸方位	東、N-63°-E
検出面からの壁高	32cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	無
土坑の有無	深さ14cmで土器を多く含む。
カマドの遺存状態	掘込み、両袖部残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第82図・26～32
カマド出土土器番号	第82図・28～31
その他の遺物	無
その他特記事項	

カマド右横の土坑は、須恵器横瓶〔第82図・27〕等多数の土器が出土しており、カマドに伴う付属施設と考えられる。

両袖の芯材に石材を使用している状況が明瞭である。



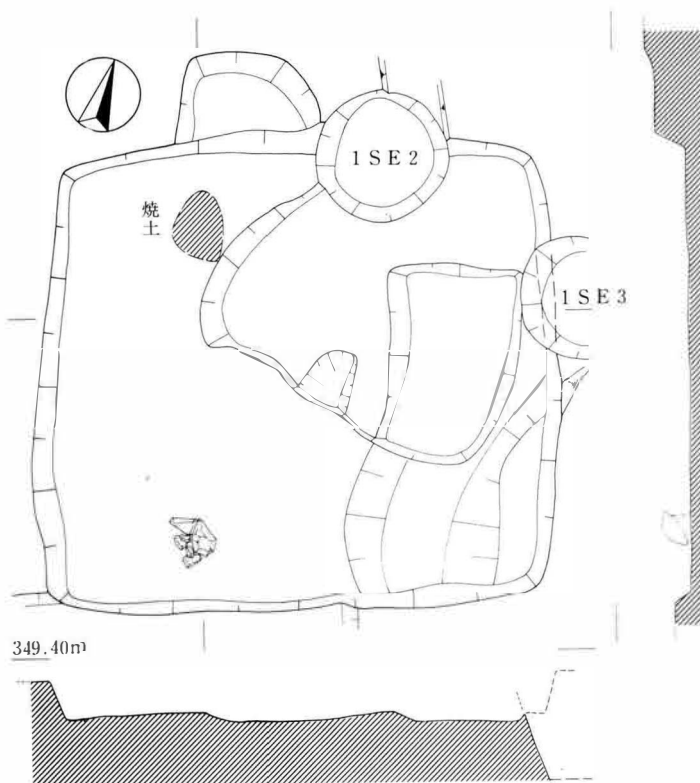
第12図 1次面6号住居跡実測図

1次面7号住居跡

平面形 (正方形)
 法 量 主軸 5 m × 横 5.4 m
 主軸方位 北、N-19°-W
 平均壁高 32cm
 切合他遺構 1 SB 8 を切り、1 SE 2、1 SE 3 に切られている。
 堅床の有無 無
 土坑の有無 性格不明
 カマド 位置不明
 カマドの構築材 不明
 土器番号 第82図・33~48
 カマド土器番号 無
 その他遺物 砥石 [第90図・7、8]

特記事項

平面形・床面等不明瞭であり、住居跡以外の遺構である可能性を含んでいる。

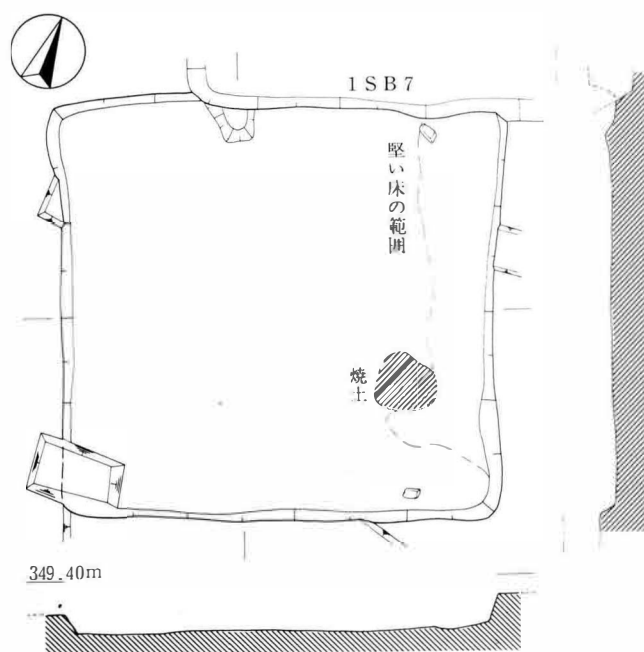


第13図 1次面7号住居跡実測図

1次面8号住居跡

平面形 正方形
 法 量 主軸 4.56 m × 横 4.56 m
 主軸方位 北、N-23°-W
 平均壁高 24cm
 切合他遺構 1 SB 7 に切られている。
 堅床の有無 有
 土坑の有無 無
 カマド 掘込みの痕跡のみ。
 カマドの構築材 不明
 出土土器番号 第82図・49~53
 カマド土器番号 無
 その他遺物 無

特記事項



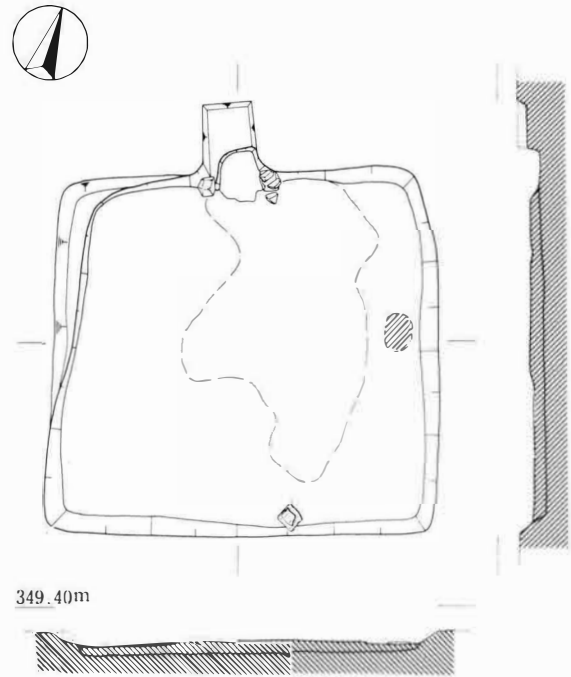
第14図 1次面8号住居跡実測図

1次面9号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.84m×横4.04m
主軸方位	北、N-18°-W
検出面からの壁高	12cm
他遺構との切合い	1 SB11、1 SB17、2 SB32を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第82図・54~60
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	刀子 [第90図・14] 鉄鏃 [第90図・15]

その他特記事項

両袖部の芯材としての石が明瞭に残る。



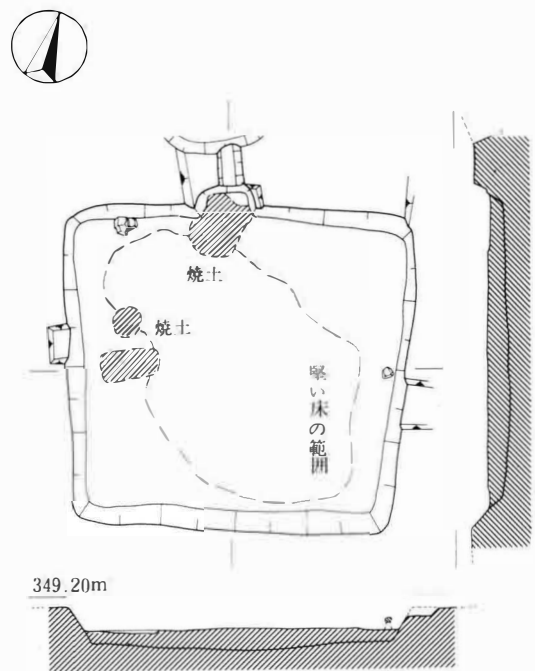
第15図 1次面9号住居跡実測図

1次面10号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.48m×横3.6m
主軸方位	北、N-18°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	煙道、焼土痕が残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第83図・61~70
カマド出土土器番号	第83図・69、70
その他の遺物	無

その他特記事項

焼土が住居内に散在することからカマドは破壊されたと考えられる。



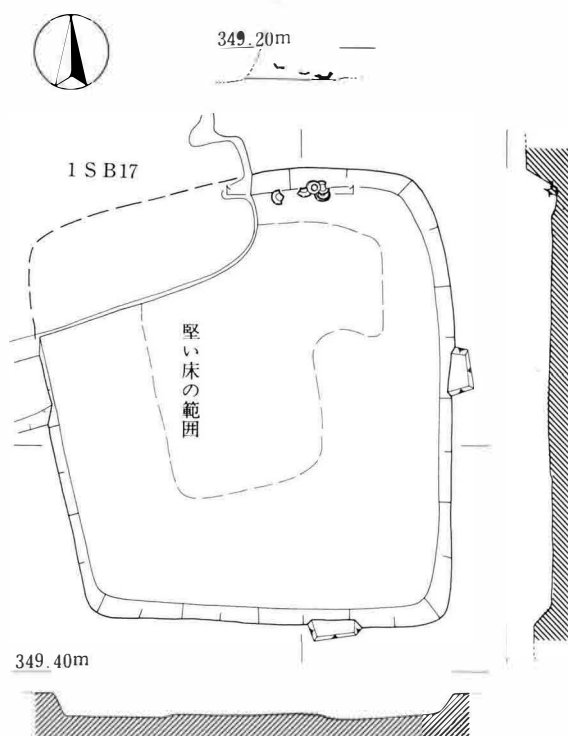
第16図 1次面10号住居跡実測図

1次面11号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸4.72m×横4.2m
主軸方位	北、N-6°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	1 SB 9、1 SB17に切られ、2 SB32を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	SB17に切られ、位置不明
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第83図・71~81
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	鉄製品 [第90図・16]
その他特記事項	

第83図・73、74、76~80の杯はカマド右側に置かれていたものと推測される。

80の土器は底部に「牛」の墨書がある。

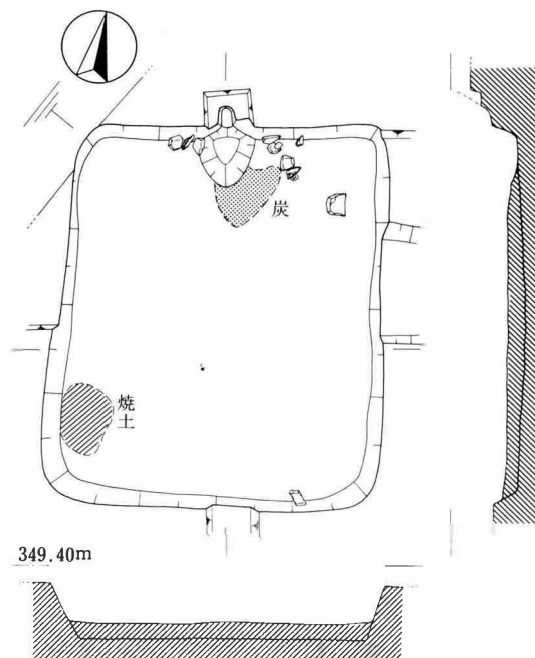


第17図 1次面11号住居跡実測図

1次面12号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸4.0m×横3.56m
主軸方位	北、N-13°-W
検出面からの壁高	40cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	煙道部若干残る。
カマドの構築材	土器片、石、粘土
出土土器番号	第83図・82~91
カマド出土土器番号	第83図・83、86、90
その他の遺物	無
その他特記事項	

カマド袖部の芯材として、土師器甕破片 [第83図・90]、石材を用いている。



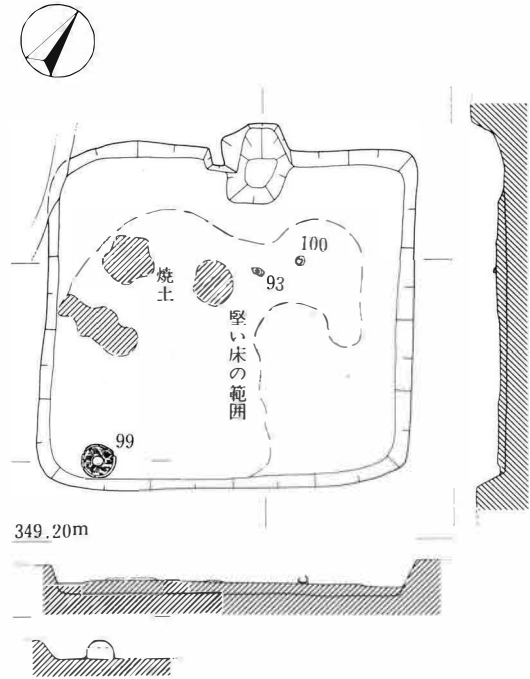
第18図 1次面12号住居跡実測図

Ⅰ次面13号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.64m×横3.84m
主軸方位	北西、N-35°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	2 SB31を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、右袖部、焼土痕が残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第83図・92~100
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

土師器鉢 [第83図・99] が床面に逆さに伏せて置かれている。底部には靫痕、ロクロのゲタ痕を残す。

焼土が住居内床面に散在しているが、焼失住居跡ではない。

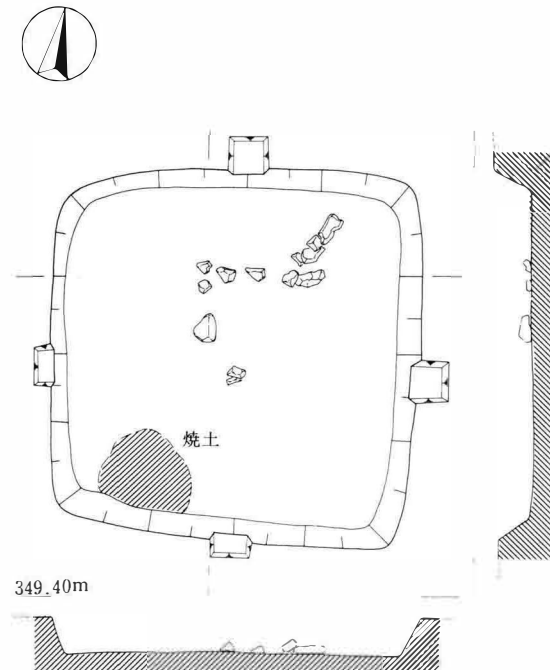


第19図 Ⅰ次面13号住居跡実測図

Ⅰ次面14号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.92m×横3.88m
主軸方位	N-7°-W
検出面からの壁高	36cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	位置不明
カマドの構築材	不明だが、石と粘土か？
出土土器番号	第84図・101~102
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

住居内床面に被熱した石材が散在しており、カマドに使用された可能性が高い。南側に焼土痕があるが、カマドの位置については不明であった。



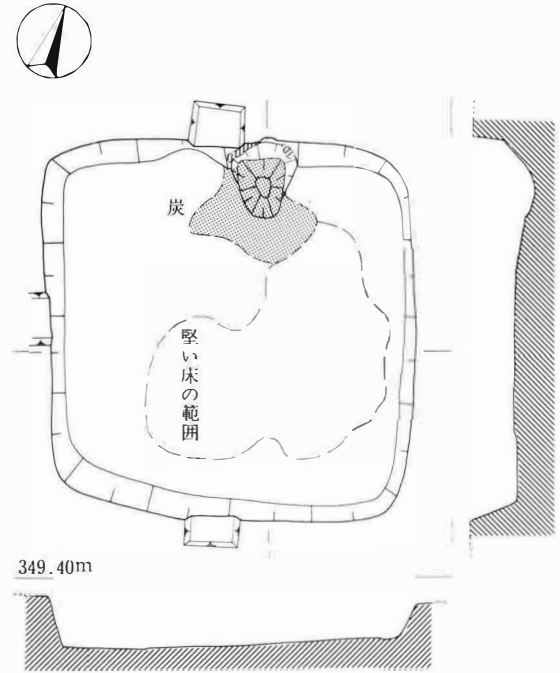
第20図 Ⅰ次面14号住居跡実測図

I 次面15号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.08m×横3.84m
主軸方位	北、N-19°-W
検出面からの壁高	48cm
他遺構との切合い	2 SB33を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕、炭が残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第84図・103~116
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

カマド付近に炭が広がっている。

墨書土器片 [第84図・109] が出土している。

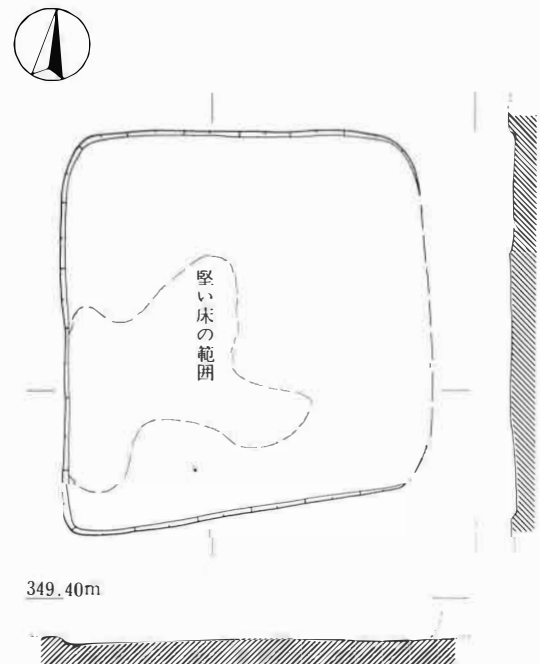


第21図 I 次面15号住居跡実測図

I 次面16号住居跡

平面形	(長方形)
法量	主軸4.12m×(横3.88m)
主軸方位	N-8°-W
検出面からの壁高	5cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	残存せず
カマドの構築材	不明
出土土器番号	無
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

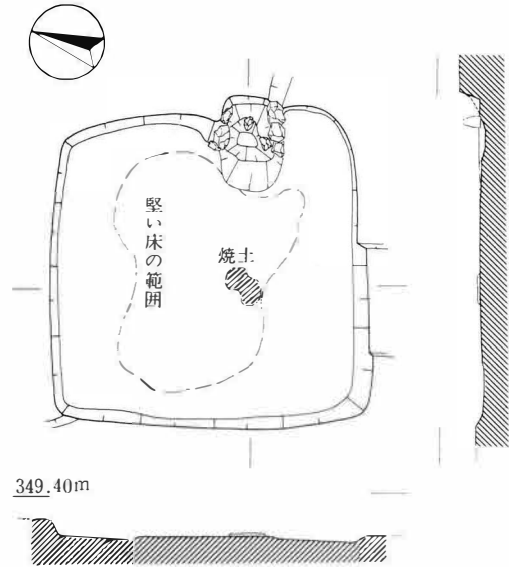
床面の高さが検出面より僅少であったため、検出状況は不良である。



第22図 I 次面16号住居跡実測図

1次面17号住居跡

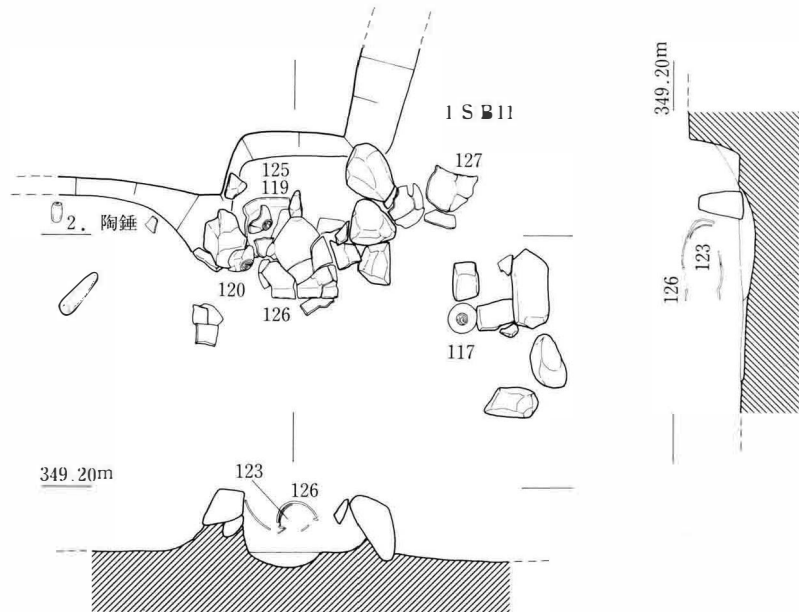
平面形	正方形
法量	主軸3.36m×横3.36m
主軸方位	東、N-71°-E
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	1SB11、2SB32を切り、1SB9に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	支脚石、掘込み、両袖部残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第84図・117～127
カマド出土土器番号	第84図・124、126、127
その他の遺物	陶錘 [第90図・2]



第23図 1次面17号住居跡実測図

その他特記事項

カマドは中央より若干右に寄っているが残存良好で、両袖の芯に石材を並べて構築したことが看取できる。中心には支脚石と思われる立石がある。その支脚石の前方、カマド燃焼部に土師器甕 [第84図・126] が前方に倒れた状態を検出することができた。これは住居廃絶時にカマドに甕が据え置かれたままであったことを示すものと思われる。さらに甕の内部に、土師器杯 [第84図・123] が入っていた。当時のカマド使用に関する良好な一事例となろう。

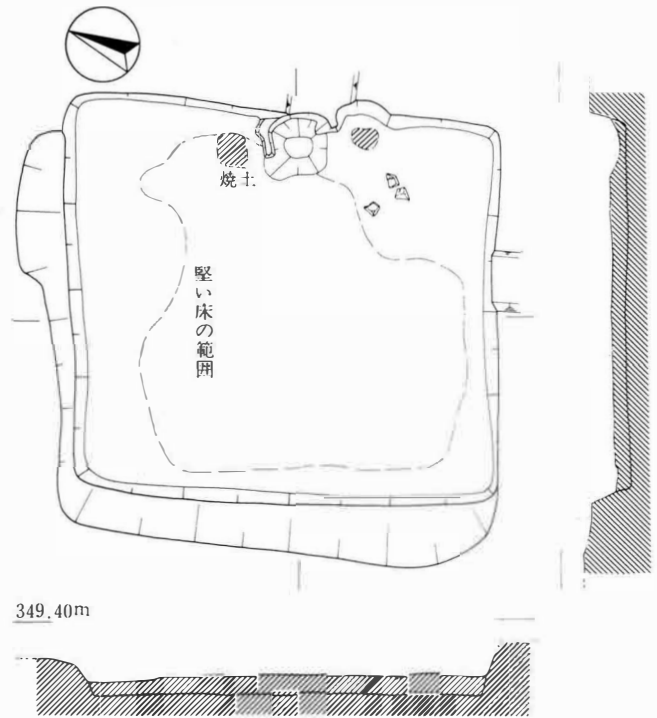


第24図 1次面17号住居跡カマド付近遺物出土状況実測図 (Scale=1:30)

1次面18号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.16m×横4.52m
主軸方位	東、N-67°-E
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、右袖部、焼土痕残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第84図・128～131
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

カマドの左右に焼土痕が残っているが、特に左側のものについては何らかの付属施設の可能性も考えられる。

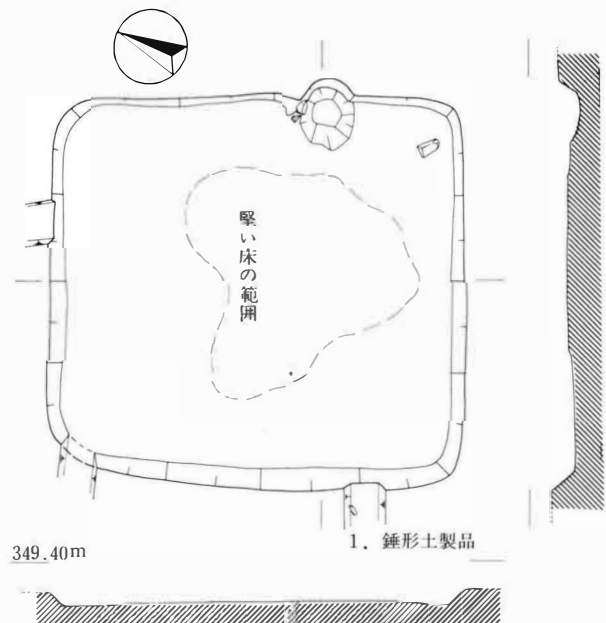


第25図 1次面18号住居跡実測図

1次面19号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.24m×横4.4m
主軸方位	東、N-65°-E
検出面からの壁高	16cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、右袖部残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第85図・132～146
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

住居外であるが、錘形土製品 [第90図・1] が付近より出土している。

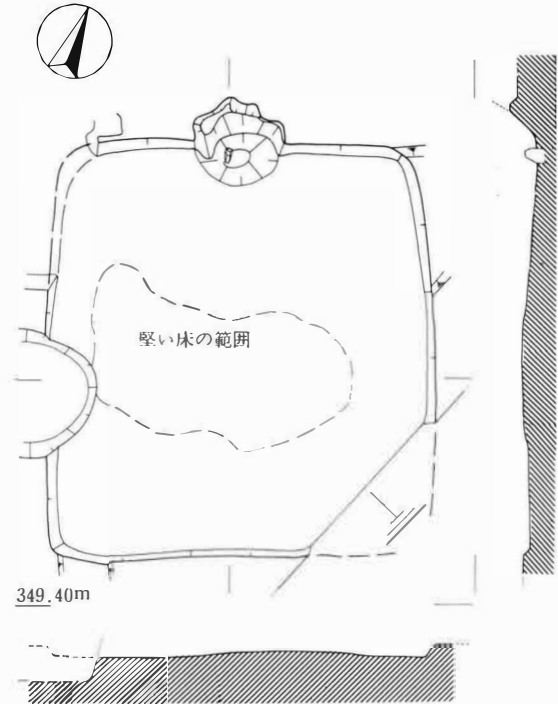


第26図 1次面19号住居跡実測図

1 次面20号住居跡

平面形	長方形
法 量	主軸4.44m×横4.12m
主軸方位	北、N-21°-W
検出面からの壁高	12cm
他遺構との切合い	2 SB34を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	支脚石、掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	不明だが、粘土のみか？
出土土器番号	第85図・147～154
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

支脚石と思われる立石が残っている。



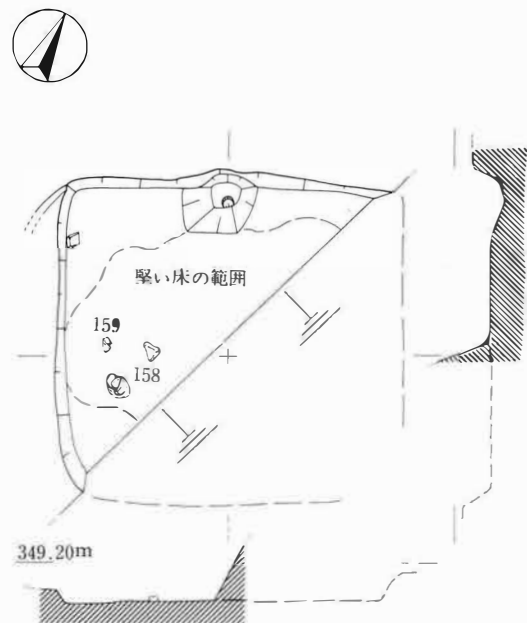
第27図 1 次面20号住居跡実測図

2 次面21号住居跡

平面形	(正方形)
法 量	不明
主軸方位	北、N-26°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	不明だが、粘土のみか？
出土土器番号	第85図・155～159
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	北宋銭 [第90図・9]

その他特記事項

カマド内に支脚石の抜き取り痕と思われる小土坑が明瞭に残る。床面に須恵器壺 [第85図・158] と須恵器甕 [第85図・159] がある。北宋銭は1093年に初鑄された「元祐通宝」である。

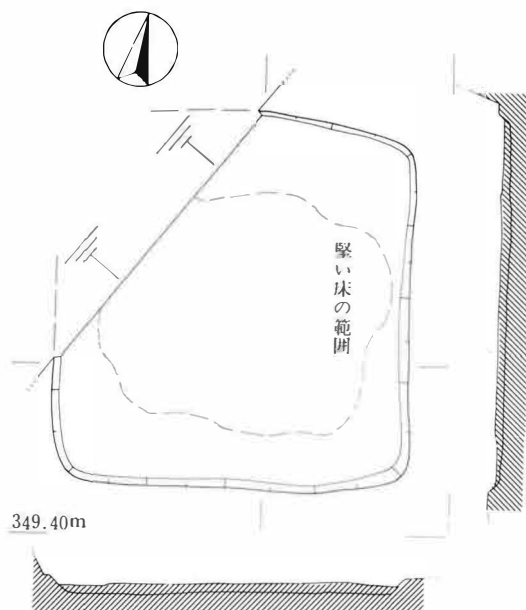


第28図 2 次面21号住居跡実測図

2次面22号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.04m×横3.76m
主軸方位	N-12°-W
検出面からの壁高	5 cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	位置不明
カマドの構築材	不明
出土土器番号	無
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	鉄鏃 [第90図・18]
その他特記事項	

床面が検出面より僅かであったため、検出状況は不良である。

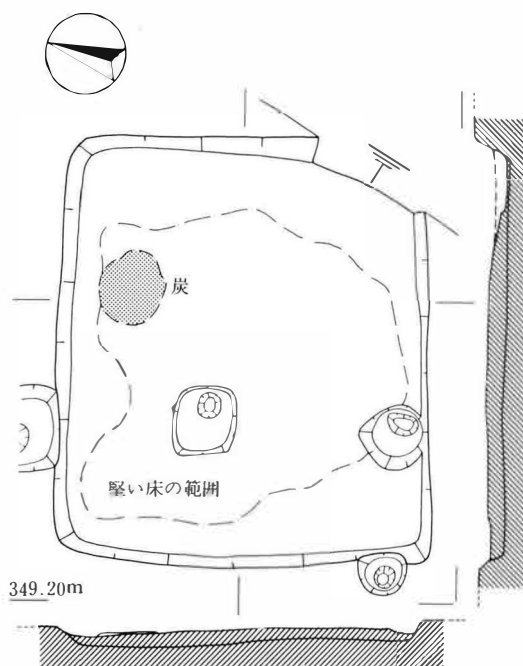


第29図 2次面22号住居跡実測図

2次面24号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸3.92m×横4.56m
主軸方位	N-17°-W
検出面からの壁高	8 cm
他遺構との切合い	2 SD 1 を切り、5号掘立柱建物跡に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	位置不明
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第86図・160~164
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	刀子 [第90図・19]
その他特記事項	

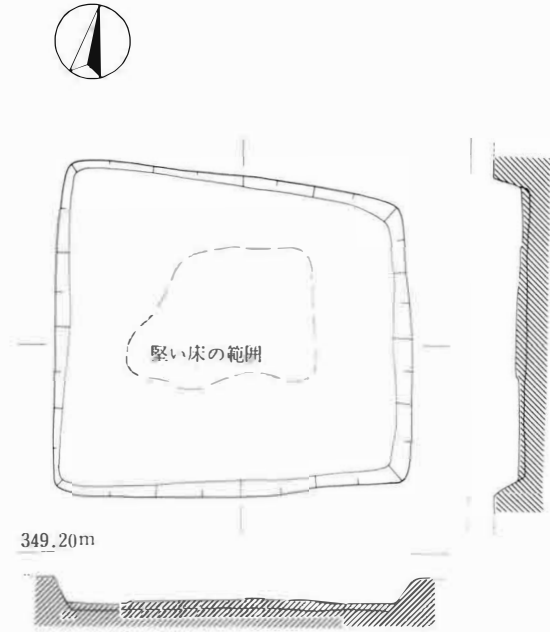
炭は残っているが、カマドらしき施設は検出することはできなかった。



第30図 2次面24号住居跡実測図

2次面25号住居跡

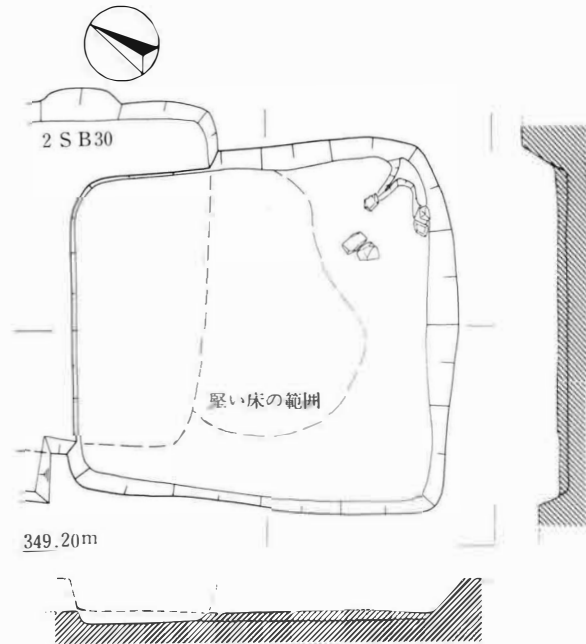
平面形	正方形
法量	主軸3.4m×横3.76m
主軸方位	北、N-12°-W
検出面からの壁高	24cm
他遺構との切合い	2 SB31を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	位置不明
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第86図・165～172
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	



第31図 2次面25号住居跡実測図

2次面26号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸4.0m×横4.08m
主軸方位	東、N-59°-E
検出面からの壁高	36cm
他遺構との切合い	2 SB30に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	袖部、焼土痕残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第86図・173～184
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

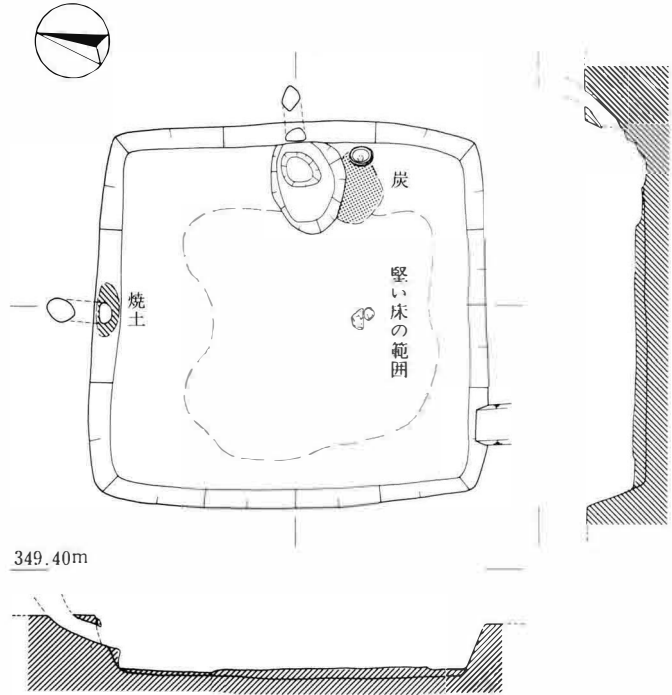


第32図 2次面26号住居跡実測図

カマドは住居の隅に据え付けられている。

2次面27号住居跡

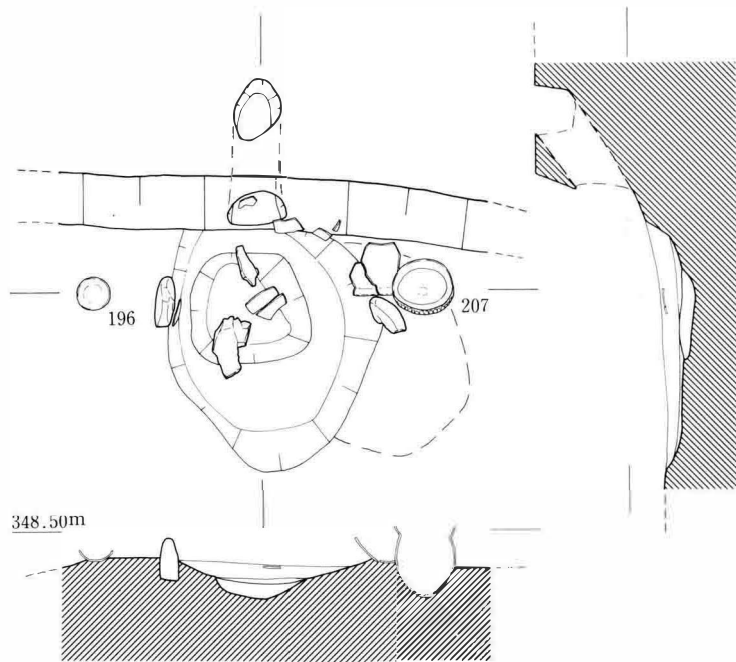
平面形	正方形
法量	主軸4.12m×横4.12m
主軸方位	東、N-76°-E
検出面からの壁高	48cm
他遺構との切合い	2 SB33、2 SB35 を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	良好、煙道残る。
カマドの構築材	石、粘土
出土土器番号	第86図・185～205 第87図・206～210
カマド出土土器番号	第86図・196 第87図・206、207
その他の遺物	土錘 [第90図・3～6]



第33図 2次面27号住居跡実測図

その他特記事項

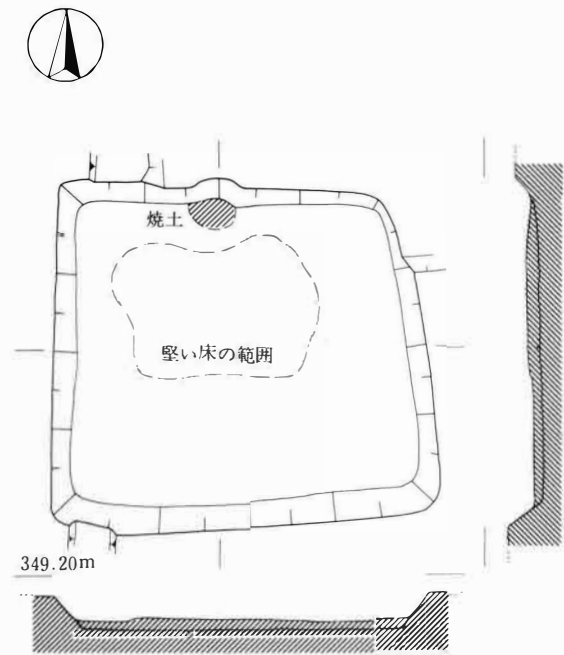
1住居に2基のカマドを持つ特異な例である。北側のカマドは煙道のみで、住居内に燃焼部らしき施設は検出できなかった。東側のカマドは袖部は残っていないものの掘込みがあり、土器が良好な状態で残っていた。特に土師器甕[第87図・207]は、カマドの右横に胴部下半を埋設された状態を確認することができた。なお、土器内より採取した土壌からは何も検出できなかった。掘込み部には袖部に使用したと考えられる石材が立てられた状態で検出された。この他の石材の検出状況から、カマドの構築には石材を芯として使用していることが看取できる。この他住居内の西南隅より小型の土錘4点[第90図・3～6]が出土している。



第34図 2次面27号住居跡カマド付近遺物出土状況実測図
(Scale= 1 : 30)

2次面28号住居跡

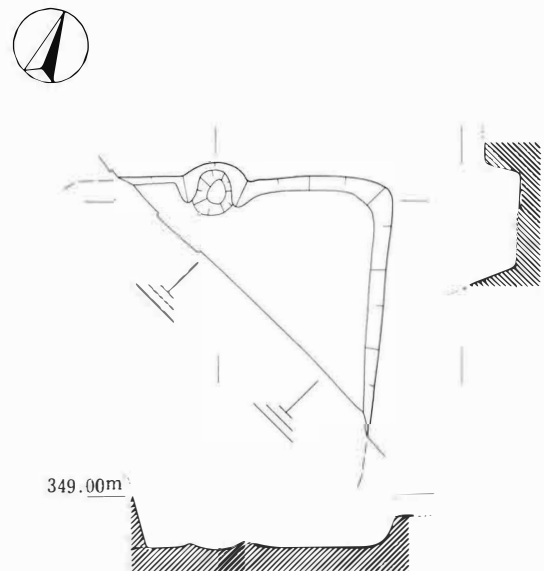
平面形	正方形
法量	主軸3.68m×横3.92m
主軸方位	北、N-3°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	2 SB32を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	焼土痕のみ残る。
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第87図・211~215
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	



第35図 2次面28号住居跡実測図

2次面29号住居跡

平面形	大半が調査区外のため不明
法量	不明
主軸方位	東、N-23°-W
検出面からの壁高	32cm
他遺構との切合い	無
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	粘土
出土土器番号	第87図・216~221
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	



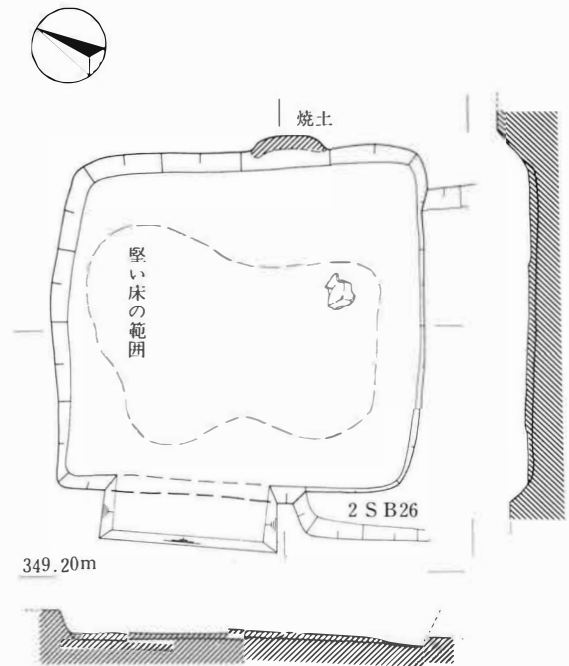
第36図 2次面29号住居跡実測図

粘土のみで構築したと思われる袖部の一部が残存する。

2次面30号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.72m×横3.96m
主軸方位	東、N-60°-E
検出面からの壁高	24cm
他遺構との切合い	2 SB26を切っている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	焼土痕のみ残る。
カマドの構築材	不明だが、粘土のみか？
出土土器番号	第88図・222～225
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

床面に約30cmの石が残存している。

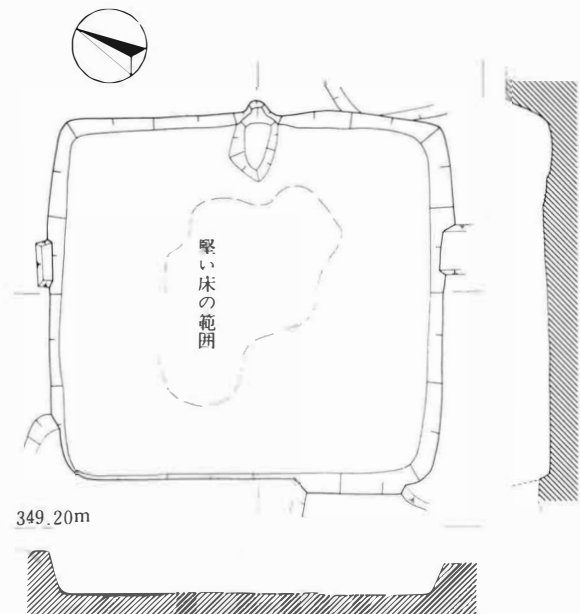


第37図 2次面30号住居跡実測図

2次面31号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.92m×横4.16m
主軸方位	東、N-62°-E
検出面からの壁高	44cm
他遺構との切合い	1 SB13を切り、2 SB25に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	掘込み、焼土痕残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第88図・226～238
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

住居内南側で筒形土製品 [第88図・238] が出土している。

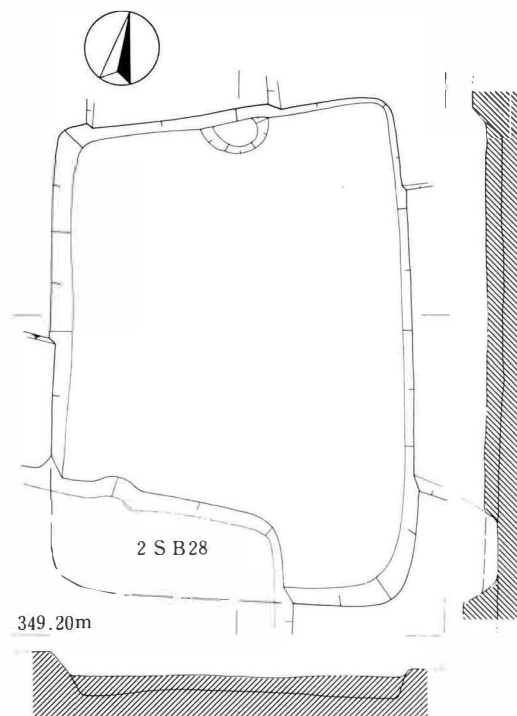


第38図 2次面31号住居跡実測図

2次面32号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸5.24m×横3.84m
主軸方位	北、N-12°-W
検出面からの壁高	20cm
他遺構との切合い	1 SB 9、1 SB11、1 SB17、2 SB28に切られている。
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	痕跡のみ残る。
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第88図・239～240
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

4軒の住居跡に切られており、この面における最古相の住居跡と思われる。

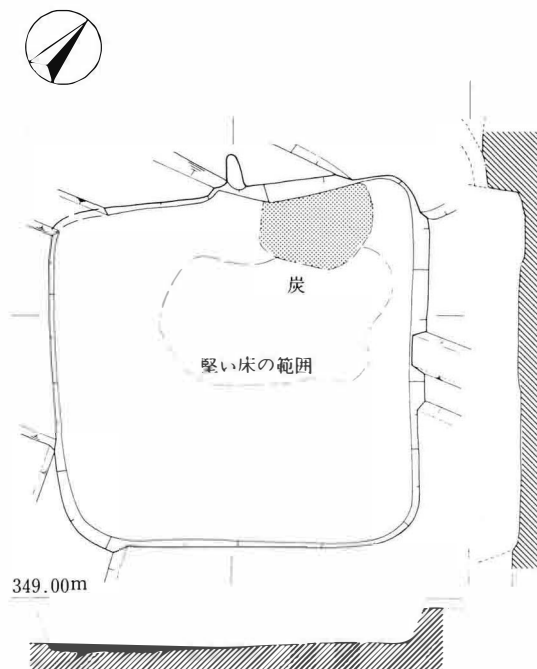


第39図 2次面 32号住居跡実測図

2次面33号住居跡

平面形	正方形
法量	主軸3.76m×横4.0m
主軸方位	北西、N-41°-W
検出面からの壁高	8cm
他遺構との切合い	1 SB15、2 SB27に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	煙道の一部?炭等の痕跡のみが残る。
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第88図・241～254 第89図・255～260
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

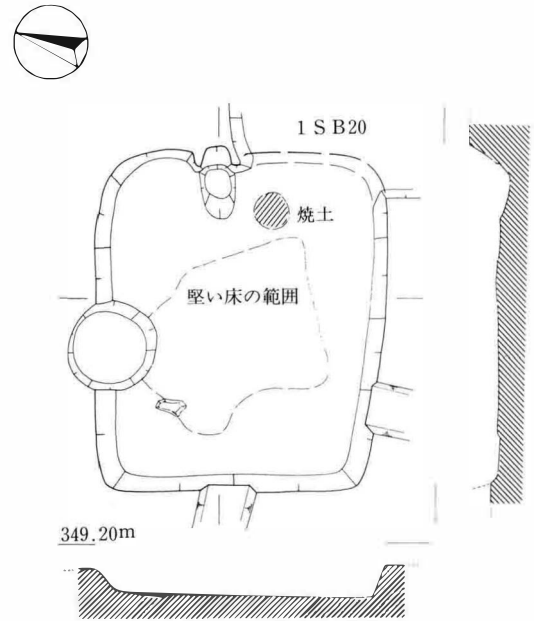
土器の多くは炭の範囲内より出土した。



第40図 2次面33号住居跡実測図

2次面34号住居跡

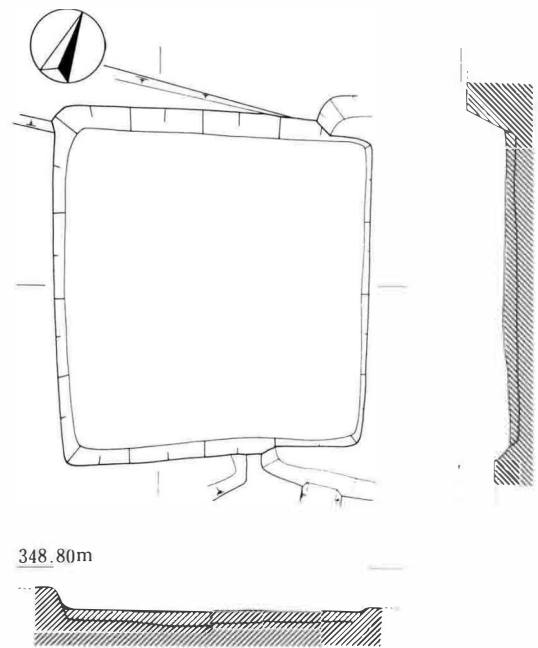
平面形	長方形
法量	主軸3.6m×横3.08m
主軸方位	東、N-74°-E
検出面からの壁高	28cm
他遺構との切合い	1 SB20に切られている。
堅い床の有無	有
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	良好、焼土残る。
カマドの構築材	粘土のみ
出土土器番号	第89図・261～275
カマド出土土器番号	第89図・261～271、273、274
その他の遺物	無
その他特記事項	



第41図 2次面34号住居跡実測図

2次面35号住居跡

平面形	長方形
法量	主軸3.76m×横3.32m
主軸方位	N-24°-W
検出面からの壁高	16cm
他遺構との切合い	2 SB27に切られている。
堅い床の有無	無
土坑の有無	無
カマドの遺存状態	位置不明
カマドの構築材	不明
出土土器番号	第89図・276～280
カマド出土土器番号	無
その他の遺物	無
その他特記事項	

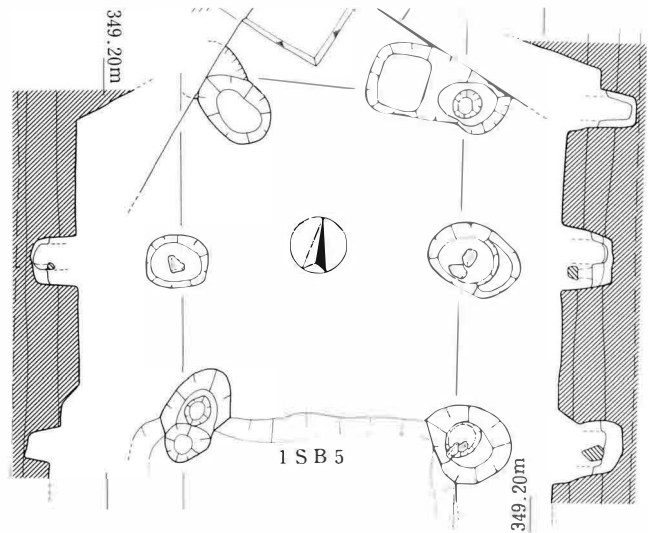


第42図 2次面35号住居跡実測図

b 掘立柱建物跡

2次面1号掘立柱建物跡

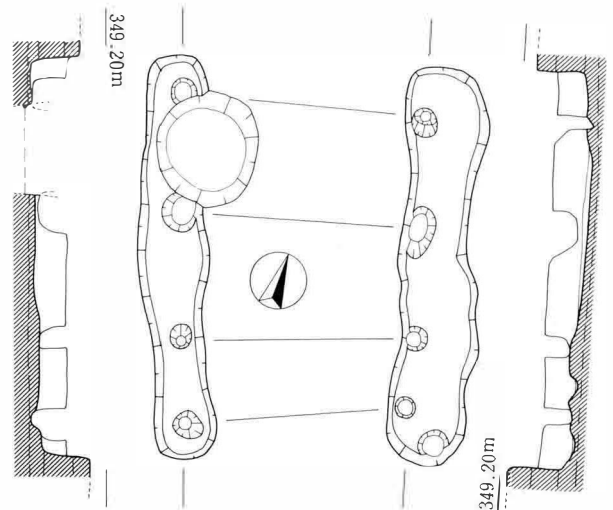
調査区の北西隅にて検出し、1次面5号住居跡に切られている。現存では1間×2間が確認できたが、調査区外に広がる可能性をもつ。柱穴間は約1.7mで、主軸はほぼ北でN-8°-Wの方位を示す。柱抜き時の上坑内の破壊が著しく、柱の大きさ等は推定し得ない。石材を混入する柱穴上坑が3基あるが、これは礎石として使用されたものであろうか。遺物等は出土しなかった。



第43図 2次面1号掘立柱建物跡実測図

2次面3号掘立柱建物跡

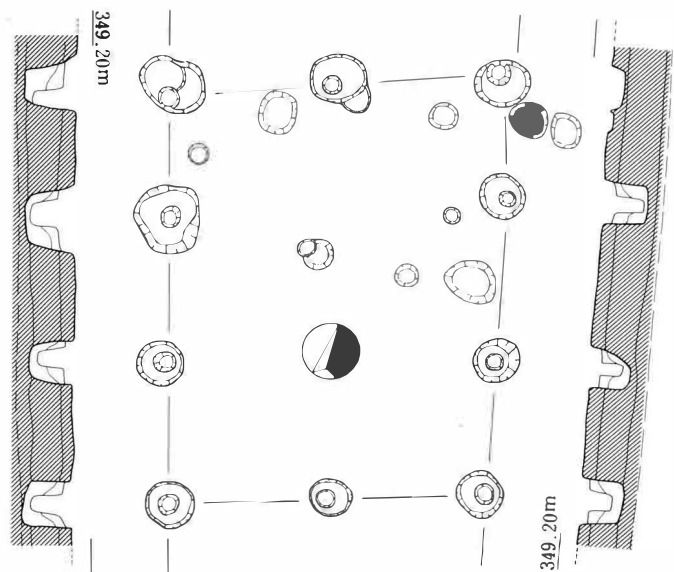
柱穴上坑のみで構成する掘立柱建物跡と異なり、主軸と平行上に柱埋設用の2条の溝を掘っている。柱穴らしき土坑は規模が一定でなく不明瞭であるが、西溝4基、東溝5基を配し、東西柱穴間は約2.5mで、きわめて小規模な建物跡と考えられる。この柱穴上坑の形態は、余分な労力を必要とすると思われるが、詳細は不明である。方位はN-16°-Wを指す。遺物等は認められない。



第44図 2次面3号掘立柱建物跡実測図

2次面4号掘立柱建物跡

土坑間約1.5mの柱穴上坑を長方形に配した2間×3間の建物跡である。柱の抜き取り痕は明瞭に看取でき、柱の太さは約20cmと推定される。主軸はほぼ北で、N-15°-Wの方位を示す。柱列範囲内は9基の小上坑が存在するが、本建物跡との関連を示すものは確認出来なかった。遺物等は認められない。



第45図 2次面4号掘立柱建物跡実測図

2次面2号掘立柱建物跡

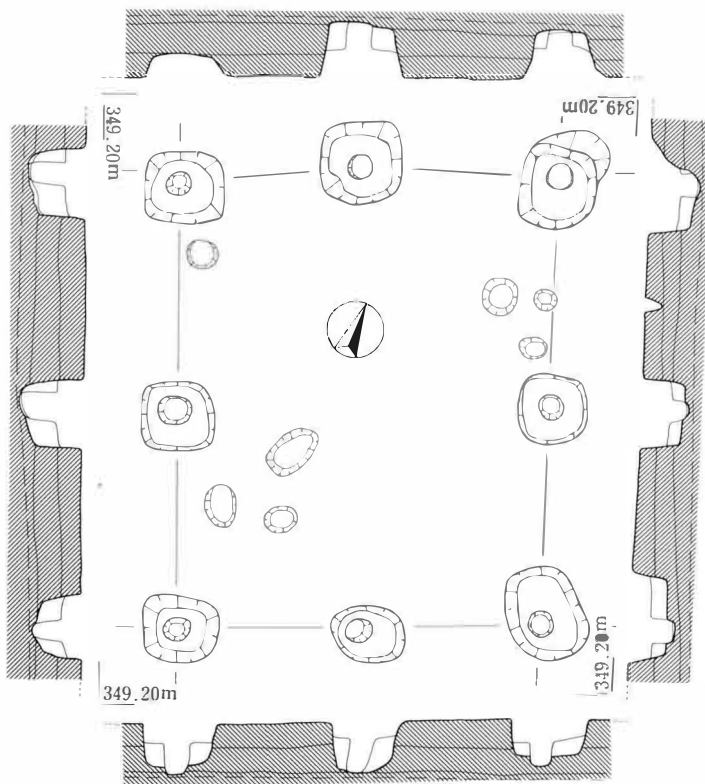
1次面4号住居跡の直下に位置しているが、切り合っていない。方形の柱穴土坑を8基、南北方向に約2.4m東西方向に約1.9mの間隔を保ち、2間×2間の長方形に配している。柱抜き痕から推定するに、柱の太さは約20cmであろう。検出面からの柱穴土坑の深さは約50cmで、どれも同程度である。方位はN-23°-Wを示しており、他の掘立柱建物跡とほぼ同じ方向である。土坑埋土内に若干の土器破片を含むが、明確に遺構と伴うものは出土していない。

2次面5号掘立柱建物跡

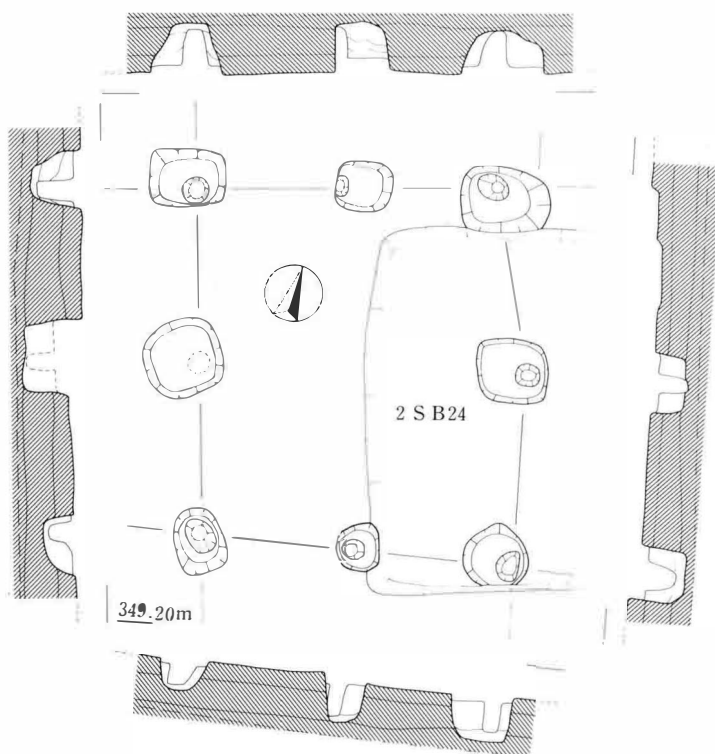
同じ2次面の24号住居跡を切っているため、その竪穴式住居跡より新しい。柱穴土坑の形態は、大小合わせて一定でなく、柱抜き痕も不定である。南北方向に約1.9m東西方向に約1.6mの間隔を保ち、2間×2間の正方形に近い長方形である。方位はN-23°-Wを示している。遺構に伴う遺物等は確認されていない。

この他に掘立柱建物跡と考えられる遺構は、10号住居跡西隣の6号掘立柱建物跡と、18号住居跡に切られ一部の土坑のみの検出となった7号掘立柱建物跡がある。このうち6号掘立柱建物跡は1間×1間の長方形で建物か否か不明であるが、7号掘立柱建物跡は2間×2間の正方形と考えられる。

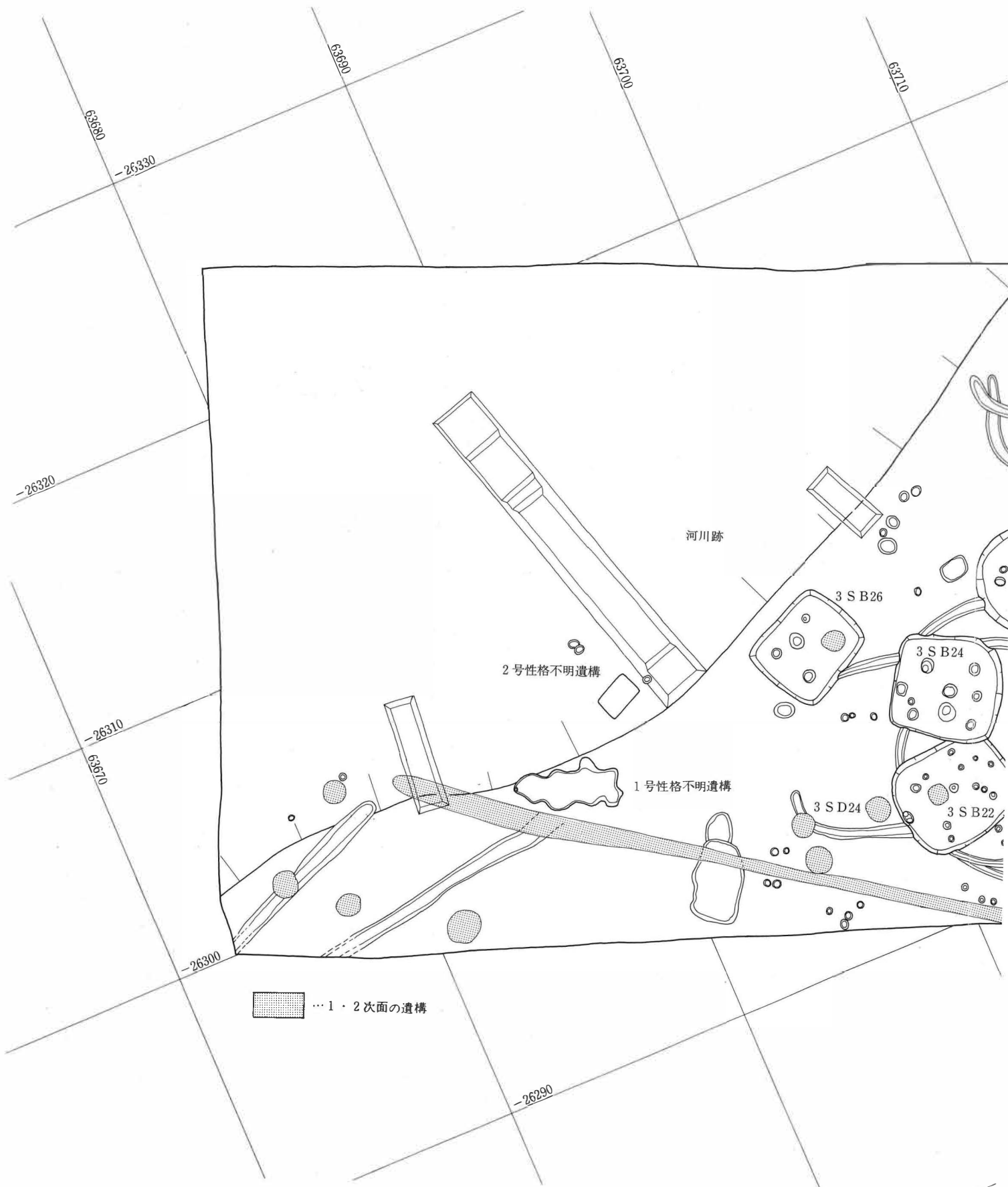
これらは他の住居跡と同様に北に方位を取り、竪穴住居と共に整然と建てられていたものであろう。



第46図 2次面2号掘立柱建物跡実測図



第47図 2次面5号掘立柱建物跡実測図



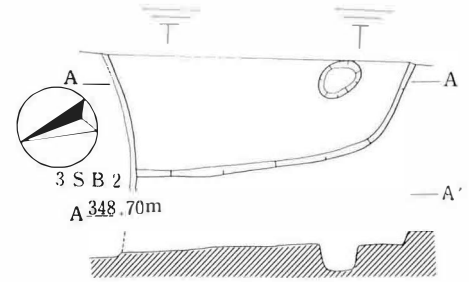
第48図 第3次面〔弥生時代中期遺構面〕

3 弥生時代中期の遺構

a 住居跡

3次面1号住居跡

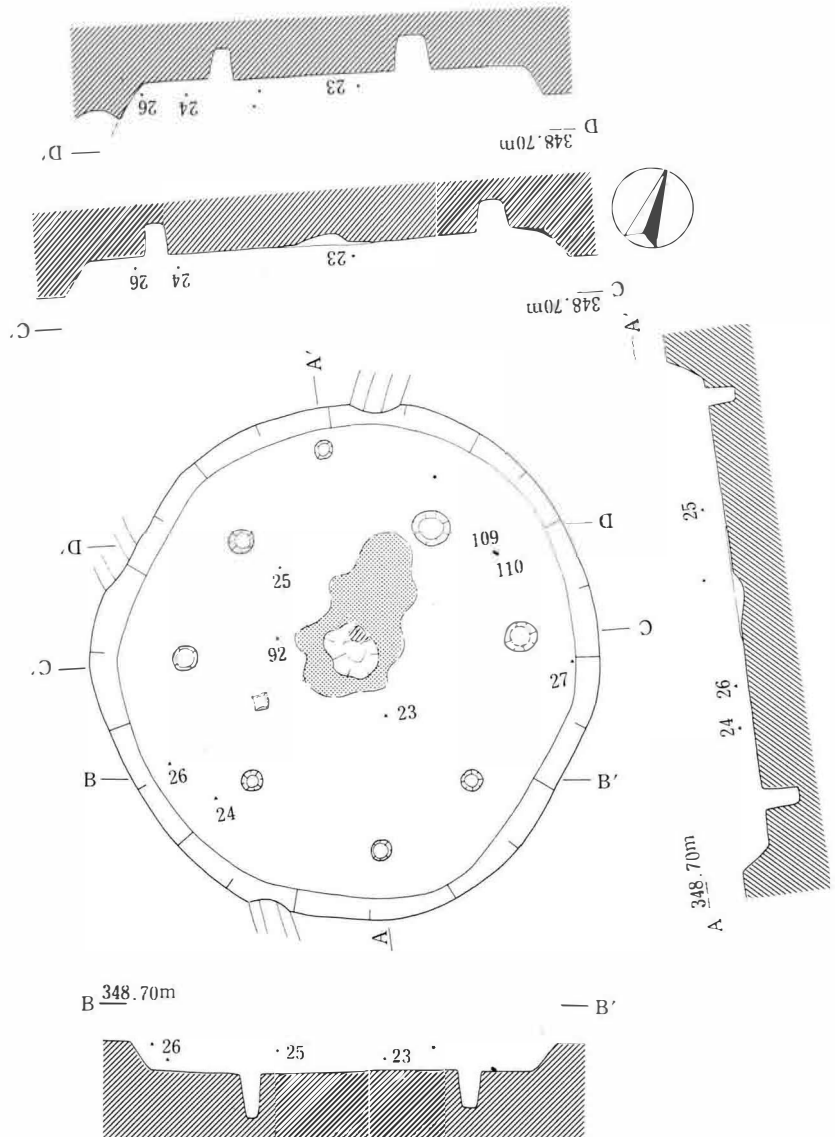
住居の平面形は隅丸方形を呈すると考えられるが、北側は2号住居跡に切れ、東側は調査区域外で検出できなかった。検出面からの床面の深さは16cmで、床面は調査区壁際に若干の堅い床が残り、柱穴は1基のみ検出した。また炉跡は調査区内では検出されなかった。出土した土器 [第91図・1～9] は、全体的に小破片が多い。



第49図 3次面1号住居跡実測図

3次面15号住居跡

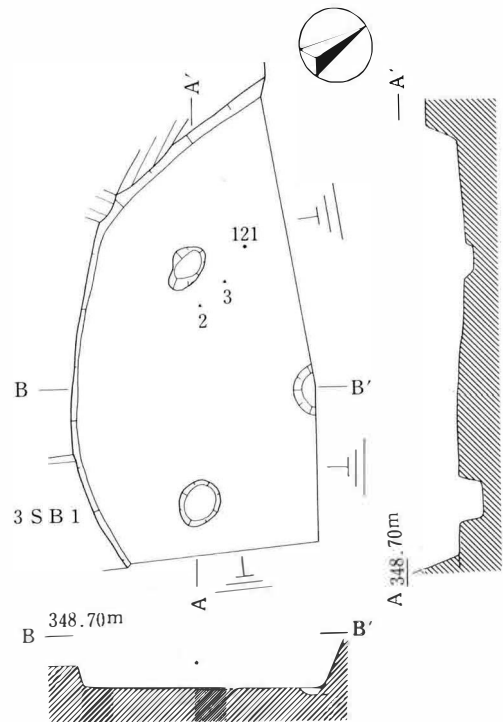
住居の平面形は直径5.50mを測る円形を呈している。南壁は10号住居跡を、西壁は16号住居跡を切るほか、2条の環状溝跡を切っている。主軸方位はN-27°-Wで、検出面からの床面の深さは35cmである。柱穴は8基検出したが、うち2基は住居主軸に伴う支柱穴と考えられるため、主となる柱穴は6基の六角形を呈する。炉跡は住居の中央に位置し、床面より8cmの深さで、立ち上がり部分には若干の焼土を検出した。周辺には炭化物が拡散している。床面は炉跡を中心として堅い床が広範囲に広がっているが、その他は軟弱な床である。土器 [第98図・148～173] の出土量は多くない。石器は覆土内より打製石鏃5点 [第107図・22～25、第108図・26]、偏平片刃石斧 [第113図・114] が、また床面からは打製石鏃 [第108図・27] と、偏平片刃石斧 [第113図・116、117] が重なり合った状態で出土している。



第50図 3次面15号住居跡実測図

3次面2号住居跡

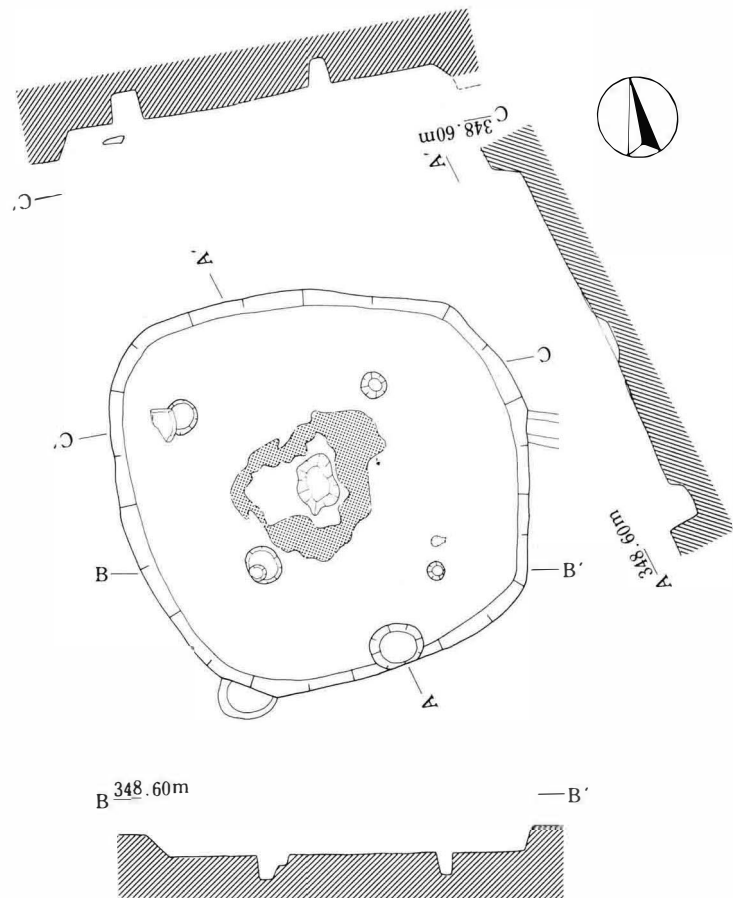
調査区北東隅に位置し、北側及び東側は調査区域外にあり検出できないため、住居形態は不明である。床面の深さは検出面から南壁で24cm、西壁で36cmを測る。1号住居跡と2条の溝跡（1条は環状溝跡）を切っている。大きく3面の床を確認し、それぞれに炭化物を挟みこんでいる。炉跡は床面より7cmの掘り込みがあり、底面には焼土が広がっていた。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっているが、中央のくぼみ及びその他の部分は軟弱である。柱穴は2基のみの検出であった。出土した土器〔第91図・10～21、第92図・22～38〕の多くが、床面直上からで、壺・甕共に多量の出土をみた。中でも表面に赤色塗彩を施した大型の壺〔第91図・19〕が出土している。また床面より3点の打製有茎石鏃〔第107図・1～3〕が出土し、覆土内からは管玉〔第114図・121〕が1点出土している。



第51図 3次面2号住居跡実測図

3次面6号住居跡

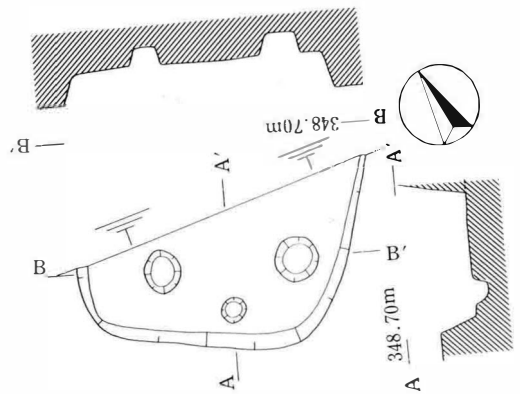
平面形はやや変形した隅丸方形を呈し、主軸方向4.20m×横方向4.50mを測る。主軸方位はN-17°-Wで、住居南壁際には出入口相当施設と考えられる掘り込みを検出した。北壁の一部は直線的に伸びる5号溝跡に切られており、床面の深さは検出面から30cmを測る。主柱穴は4基検出したが、柱列配置は不規則な方形になる。住居跡のほぼ中央に位置する炉跡周辺にはドーナツ状に広がる炭化物を検出した。床は炉跡を中心として堅い床が広い範囲に広がっているが、その他は軟弱な床である。土器〔第95図・74～85〕の出土量は多くない。



第52図 3次面6号住居跡実測図

3次面3号住居跡

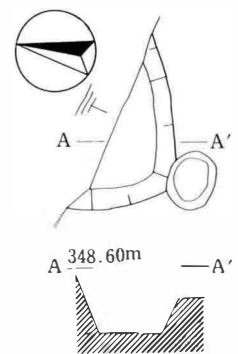
住居の平面形は隅丸方形を呈すると考えられるが、北側は調査区域外にあり検出できなかった。柱穴は3基確認したが、炉跡は調査区外と思われる。検出面からの床面の深さは南壁で42cm、東壁で38cmを測る。床面は調査区壁際に若干の堅い床を残すのみで、他は軟弱になっている。出土土器 [第93図・39~44] の多くが床面より出土しているが、調査区の制約により土器の量は非常に少ない。



第53図 3次面3号住居跡実測図

3次面4号住居跡

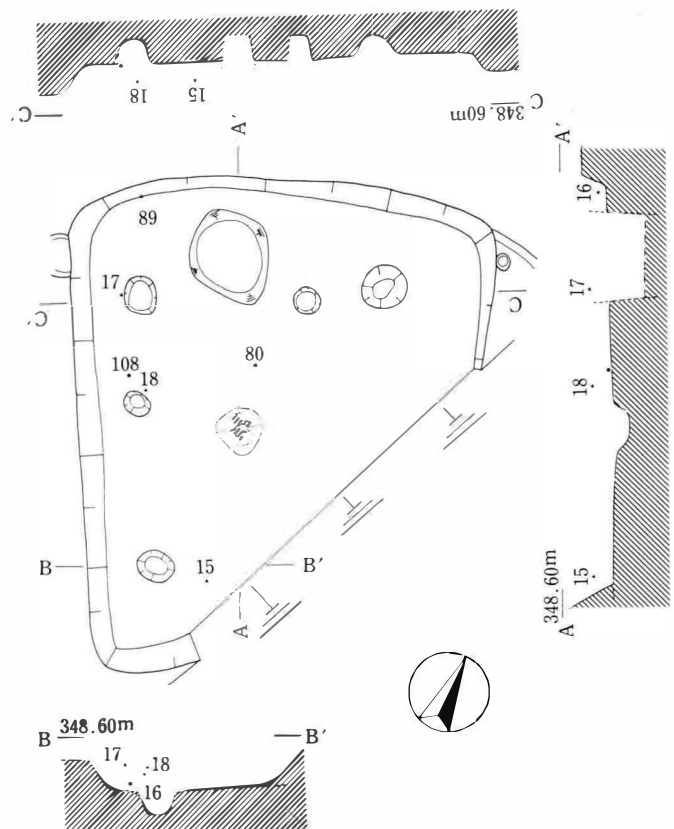
検出できた部分は、南隅の一角にすぎず、残りは調査区域外であるため住居形態は不明である。検出面からの掘り込みは40cmを測り、南隅は小土坑に切られている。炉跡や柱穴は調査区内では検出できず、床面も軟弱である。出土した土器も小破片のみ数点出土しただけで、図示し得るものは1点もなかった。



第54図 3次面4号住居跡実測図

3次面13号住居跡

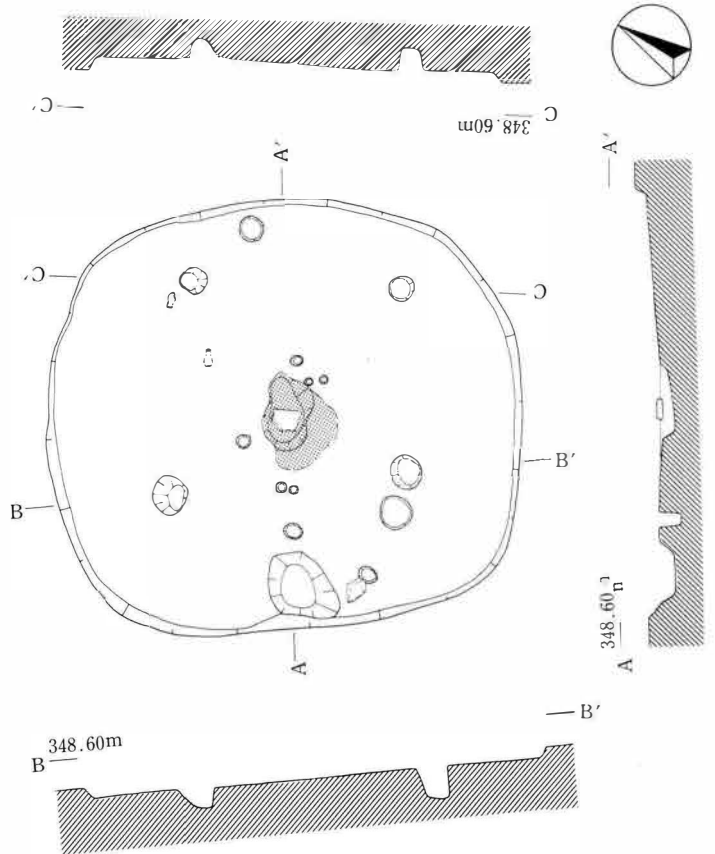
方形を呈する住居跡で、東側は調査区外により未検出であるが、南北方向5.20m×東西方向4.40mを測る。主軸方位はN-27°-Wで、検出面からの床面の深さは35cmである。柱穴の総数は5基で、主柱穴は3基確認したが4本柱の方形を呈すると考えられる。炉跡は住居の中央よりやや西に位置し、床面から16cmの深さで、底面から焼土が検出された。床面は住居中央を中心として堅い床が広がっているが、炉跡の周辺は特に堅く、その他は軟弱な床である。出土土器 [第97図・136~147] はすべて小破片にすぎず出土量も多くはない。しかしながら石器類は多く、覆土内から打製石鏃4点 [第107図・15~18]、磨製石鏃 [第112図・96]、大型偏平片刃石斧 [第113図・115] が出土している。また床面からは釣針形石製品 [第110図・83] が出土している。



第55図 3次面13号住居跡実測図

3次面5号住居跡

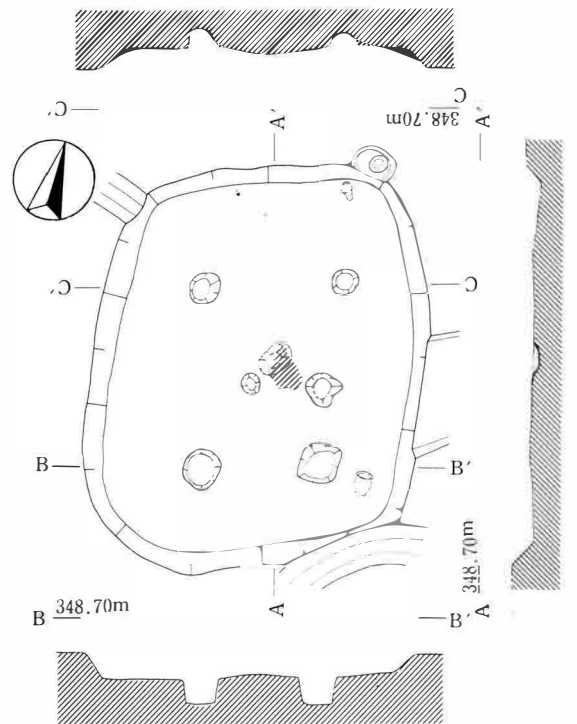
住居の平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、主軸方向4.60m×横方向5.00mを測る。主軸方位はN-57°-Eである。床面の検出面からの深さは10cm前後と浅いが、土器[第93図・45~54、第94図・55~73]の出土量は非常に多く完形に近いもので10個体を数える。中でも器高45cmの大型壺[第93図・45]が出土しているほか、甕の出土も多く、覆土内からは磨製石鏃[第112図・95]も出土している。支柱穴は4基でほぼ正方形を呈し、支柱穴も含めると14基確認し得た。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、深いところでは床面より16cmを測る。炉跡の覆土内からは、厚さ8cm程の作業台と思われる平石が出土しており、また炉跡の周辺には小さい支柱穴6基検出した。南西壁際には、床面より18cmの深さをもつやや大きめの掘り込みを検出したが、これは出入口相当施設であると考えられる。



第56図 3次面5号住居跡実測図

3次面12号住居跡

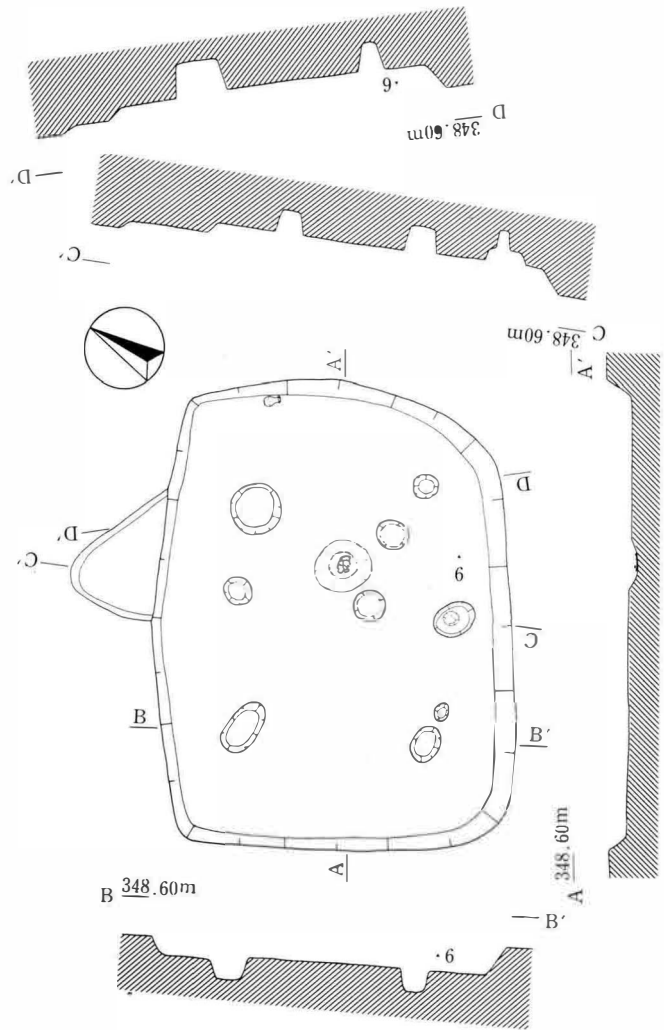
住居の平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向4.20m×横方向3.50mを測る。主軸方位はN-16°-Wで、検出面からの床面の深さは30cmである。今回の調査では大多数の住居跡が環状溝跡を切っているが、当住居と17号住居跡のみが環状溝跡に切られている。柱穴の総数は6基を数え、うち支柱穴は4基で、方形を形どっている。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面からの掘り込みは8cmを測る。底面及び周辺には2基の土坑があり、焼土が広がっていた。床面は炉跡の周辺が若干盛り上がり、柱列範囲部分に堅い床が広がっている。覆土の黒灰色炭化物層には土器[第96図・117~112、第97図・123~135]の出土が多量に見られ、特に甕は完形に近いものなど多く出土している。



第57図 3次面12号住居跡実測図

3次面7号住居跡

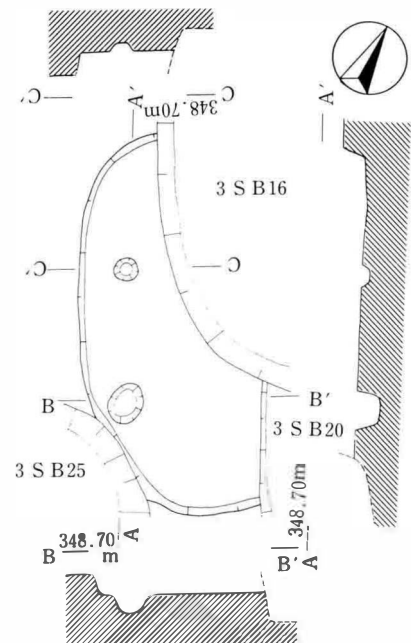
住居の平面形は長方形を呈し、東西方向5.50m×南北方向3.80mを測る。検出面からの床面の深さは30cm前後で、北西壁は土坑を切る。主軸方位はN-30°-Eで、柱穴の総数は9基を数える。支柱穴は6基で、柱列配置は方形を呈すると考えられるが、やや不規則である。炉跡は住居中央より若干東に位置し、床面からの掘り込みは8cmを測る。炉跡の底面からは、土器が敷かれたような状態で出土している。床面は炉跡を中心として広範囲に堅い床が広がっているが、その他は軟弱な床である。覆土内からは2点の打製石鏃[第107図・5、6]が出土しているほか、床面からは完形に近い台付甕[第95図・86~88]が3個体出土しているが、全体的に土器[第95図・86~97]の出土量は少ない。



第58図 3次面7号住居跡実測図

3次面21号住居跡

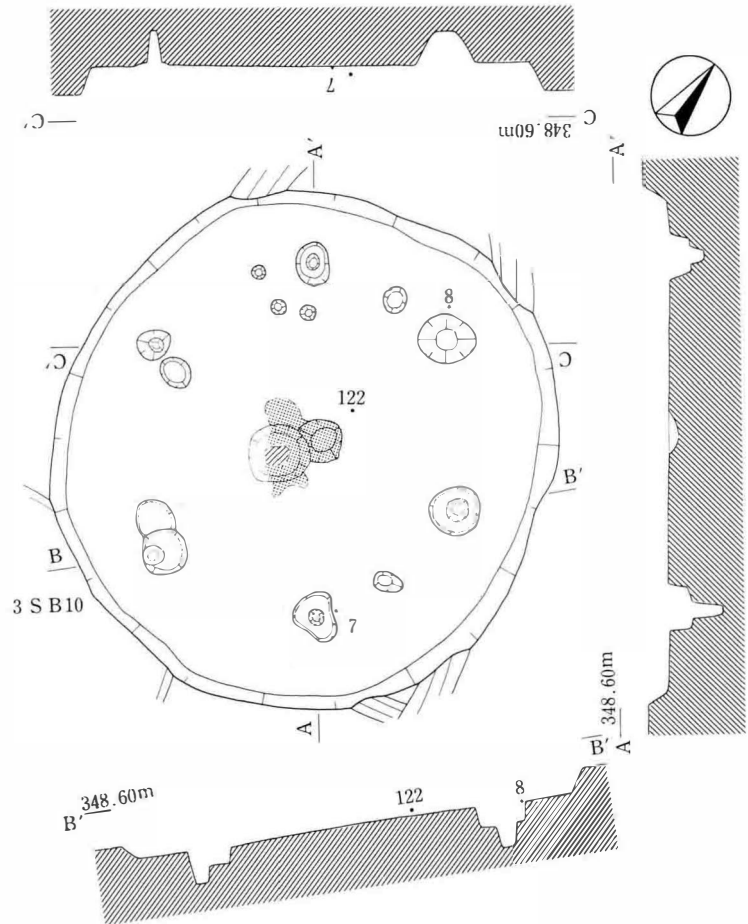
東側は、16・20号住居跡に、南壁は25号住居跡に切られており、周辺の住居群の切り合い関係においては、最古相と考えられるが、少ないながらも出土した土器から見ると、大きな時間的差異は認められなかった。3軒に切られているため東側は完全に破壊を受け、住居形態及び規模などは不明である。柱穴は2基のみ検出できたが、平面形・炉跡ともに16号住居跡による破壊で検出できなかった。検出面からの床面の深さは20cmである。堅い床は16号住居跡の掘りこみ部分に若干残るのみで、その他は軟弱な床になっている。検出できた範囲が狭小なため、出土土器も多くはないが、赤色顔料が残る壺[第102図・284]が出土している。



第59図 3次面21号住居跡実測図

3次面8号住居跡

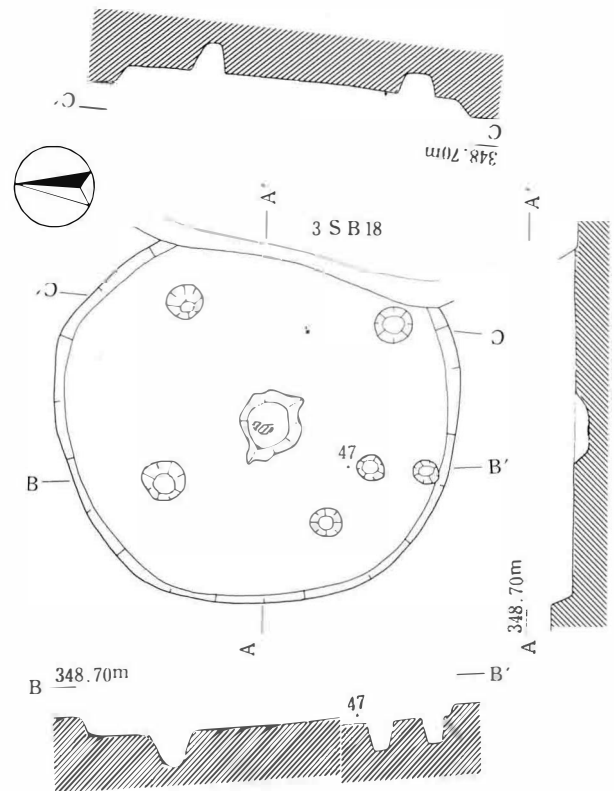
住居の平面形は直径5.50mの円形である。南壁は10号住居跡を切っているほか、環状溝跡を2条切っている。主軸方位はN-38°-Wで、検出面からの床面の深さは30cmを測る。主柱穴は6基で六角形状を呈し、柱穴の総数は13基を数える。炉跡は住居中央よりやや南に位置し、炉の脇には炭化物の混入した掘り込みを検出した。この掘り込みが住居の中央に位置していることを考えると、炉の移し替えが行われた痕跡と考えられる。床は炉跡を中心として広範囲に堅い床が広がっているが、その他は軟弱になっている。覆土内からは管玉[第114図・122]が、床面からは打製石鏃[第107図・7、8]2点が出土している。



第60図 3次面8号住居跡実測図

3次面19号住居跡

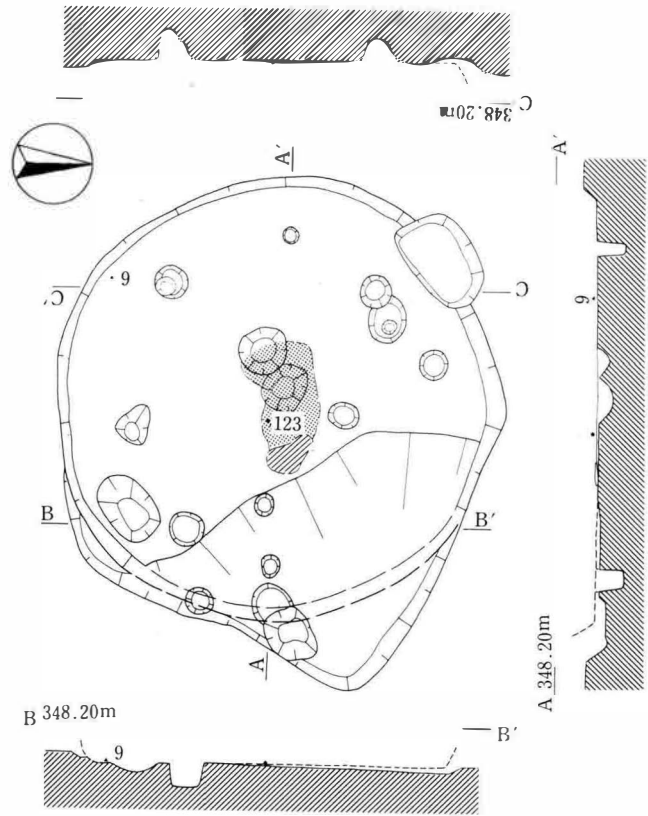
住居の平面形は直径4.30mを測る円形を呈している。東壁は18号住居跡に切られている。主軸方位はN-90°-Eで、検出面からの床面の深さは25cmである。総数6基を数える柱穴のうち主柱穴は4基で、柱列配置はやや変形した方形を呈している。炉跡は住居の中央よりやや西に位置し、床面から14cmの掘り込みである。底面には焼土が若干検出できた。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっており、その他は軟弱な床になっていた。出土土器[第101図・243~264]は甕が多い。鉢は完形の例[第101図・247]や、赤色塗彩された例[第101図・248、249]もある。多くの土器は床面からの出土で、中でも壺の割合は比較的少ない。床面近くからは、打製石鏃[第109図・47]が出土している。



第61図 3次面19号住居跡実測図

3次面9号住居跡

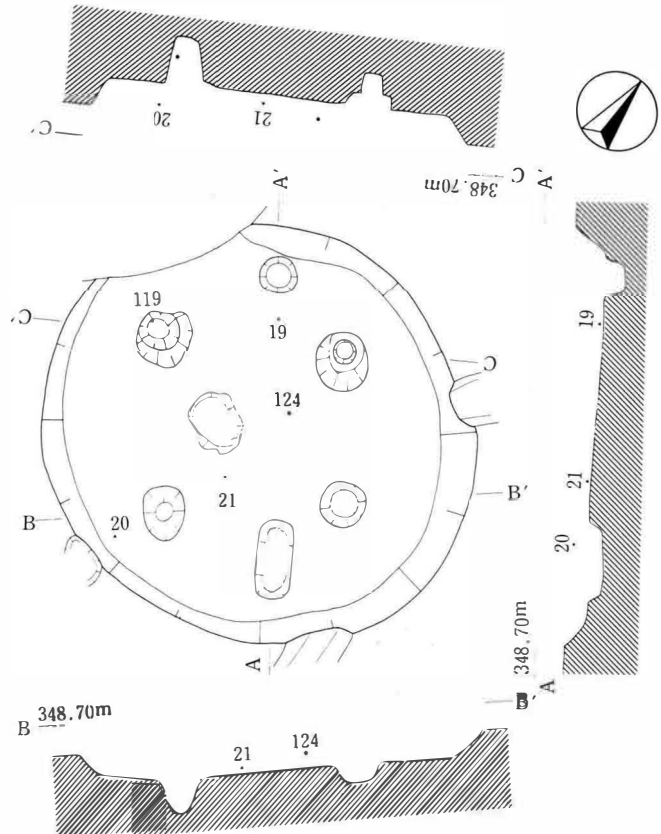
住居東半部に攪乱を受けているが、住居形態は円形を呈するものと考えられる。この攪乱の性格は不明であるが、床面、壁ともに破壊を受けている。柱穴の総数は11基で、そのうち主柱穴は6基と考えられるが、攪乱部分においては不明確である。柱列配置は六角形を呈するものと考えられる。炉跡は住居のほぼ中央に位置しているが、炭化物が混入した掘り込みが隣接しており、少なくとも2回の炉の移し替えが行われたものと考えられる。両方の炉跡とも床面から15cmと深い。出土土器〔第96図・105～111〕は覆土・床面共に非常に少なく、全てが小破片であった。床面近くより打製石鏃〔第107図・9、10〕が、床面からは磨製石斧〔第113図・118〕が出土している。また、炉跡近く炭化物内より管玉〔第114図・123〕が出土している。



第62図 3次面9号住居跡実測図

3次面14号住居跡

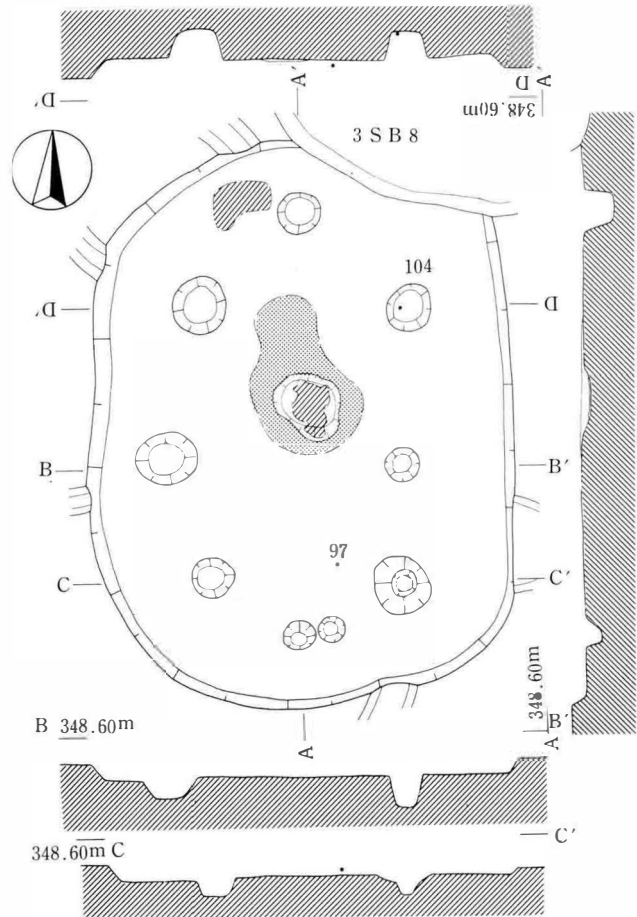
住居の平面形は直径4.50mを測る円形を呈している。北西壁は15号住居跡に切れ、2条の溝跡を切っている。主軸方位は $N-38^{\circ}-W$ 、検出面からの床面の深さは35cmである。柱穴の総数は6基で、主柱穴は4基の方形を呈すると考えられる。炉跡は住居中央より南に位置しており、床面から7cmの深さである。床面は北に向かって緩やかに傾斜し、堅い床は炉跡の周辺に若干広がるのみで他は軟弱な床になっている。土器の出土量は少なく図示できるものはなかったが、覆土内から打製石鏃2点〔第107図・19～20〕、管玉〔第114図・124〕、石庖丁の破片〔第112図・106〕が出土しており、床面からは打製石鏃〔第107図・21〕や、また柱穴内からは磨製石斧〔第113図・119〕等、石器類が多く出土している。



第63図 3次面14号住居跡実測図

3次面10号住居跡

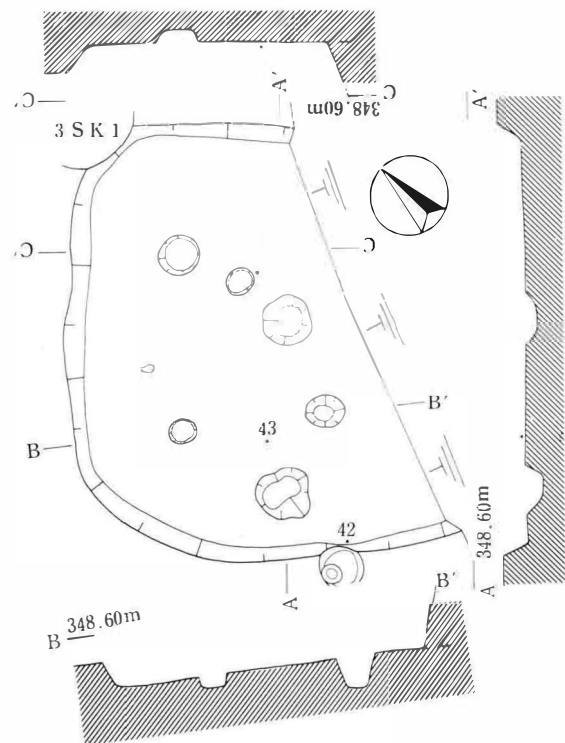
住居の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向6.00m×横方向4.50mを測る。北壁は8号住居跡に切られ、2条の環状溝跡を切っている。主軸方位はN-5°-Wで、検出面からの床面の深さは15cmを測る。主柱穴は6基で、長方形配置になる。柱穴の総数は9基を数える。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面からの掘り込みは12cmを測る。炉跡の周辺には炭化物が拡散していた。床は炉跡を中心として堅い床が広がり、その他は軟弱な床になる。また北壁脇の床面には焼土塊が存在した。完形に近い台付甕〔第96図・112〕らしき土器が1個体出土している他は、全て小破片が少量出土しただけである。また床面より若干浮いた状態で石庖丁の破片〔第112図・104〕が、柱穴内からは小型偏平片刃石斧〔第113図・109〕が出土している他、覆土内からは打製石鏃〔第107図・11~13〕、磨製石斧〔第112図・98〕が出土している。



第64図 3次面10号住居跡実測図

3次面17号住居跡

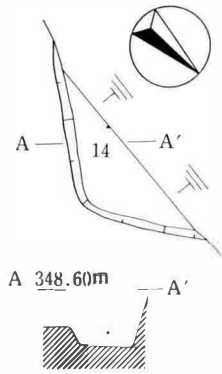
東壁は調査区域外により検出はできなかったが、住居形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-44°-Eで、床面の深さは35cmを測る。北隅は1号土坑に切られ、北壁は環状溝跡に切られているが、この住居も12号住居跡と同様、環状溝跡に切られる住居跡である。柱穴の総数は5基を数え、主柱穴を3基検出し4本柱の方形状を呈するものと考えられる。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面から10cmを測る。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっているが、その他は軟弱な床になっている。出土土器の量は、完形に近い小型の壺〔第100図・219〕が出土した他は、小破片が少量出土しただけで形態の分かるものは少なかった。また床面からは打製石鏃〔第108図・42、43〕が2点出土した他、偏平片刃石斧〔第113図・113〕も出土している。



第65図 3次面17号住居跡実測図

3次面11号住居跡

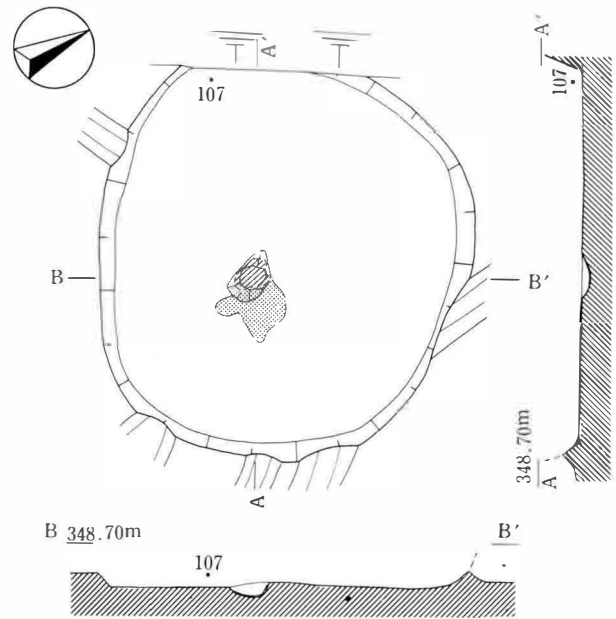
検出し得たのは隅の一角のみで住居の大部分は調査区外であるため、住居形態は不明である。検出面からの掘り込みは20cmを測る。柱穴・炉跡・堅緻な床面は調査では検出できなかった。土器 [第96図・113、116] の出土量も少なく、壺の頸部 [第96図・113]と、小破片が数点出土しただけである。また、調査区壁近くの覆土内からは、打製石鏃 [第107図・14] が出土している。



第66図 3次面11号住居跡実測図

3次面23号住居跡

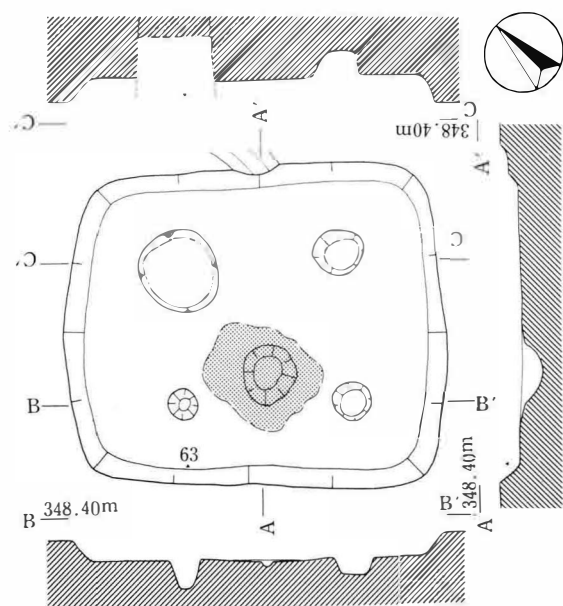
住居形態は変形はしているものの隅丸方形を呈すると考えられる。西壁は調査区域外にあり未検出である。規模は東西方向4.00m×南北方向4.00mを測り、検出面からの床面の深さは30cmで、3条の溝跡を切っている。炉跡は住居中央よりやや南に位置し、床面から10cmの深さにある底面から焼土が検出された。周辺には炭化物が拡散していた。床面は軟弱かつ荒れていたため柱穴土坑を検出し得なかったが、おそらく4基の柱穴をもつと考えられる。調査区壁近くの覆土内からは石庖丁未製品 [第112図・107] が出土している。



第67図 3次面23号住居跡実測図

3次面26号住居跡

住居平面形は方形を呈し、主軸方向3.40m×横方向4.40mを測る。北東壁は溝跡を切っている。主軸方位はN-45°-Eで、検出面からの床面の深さは30cmである。柱穴は3基検出したが、1基は平安時代の井戸跡による攪乱を受けているため不明だが、おそらく方形を呈するであろう。炉跡は住居中央より南西に位置しており、床面から20cmの掘り込みである。炉跡の周辺には炭化物が拡散していた。床面は炉跡を中心として若干の堅い床がみられるものの、その他は軟弱な床になっている。出土土器 [第104図・355~365] は多くはないが、覆土内からは打製石鏃 [第109図・63] が出土している。



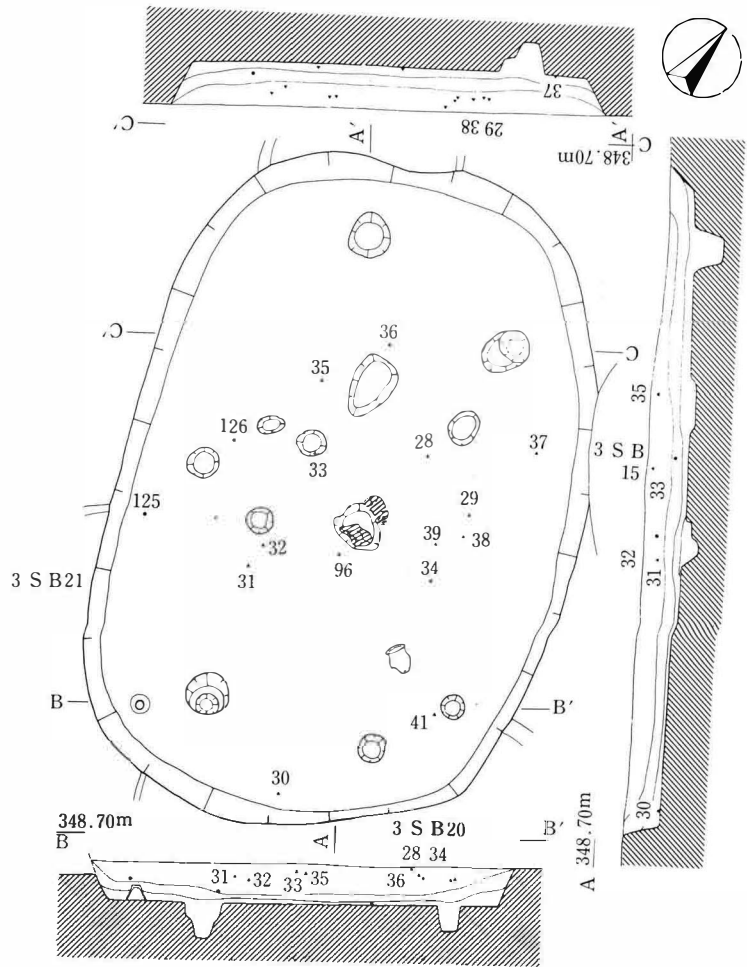
第68図 3次面26号住居跡実測図

3次面16号住居跡

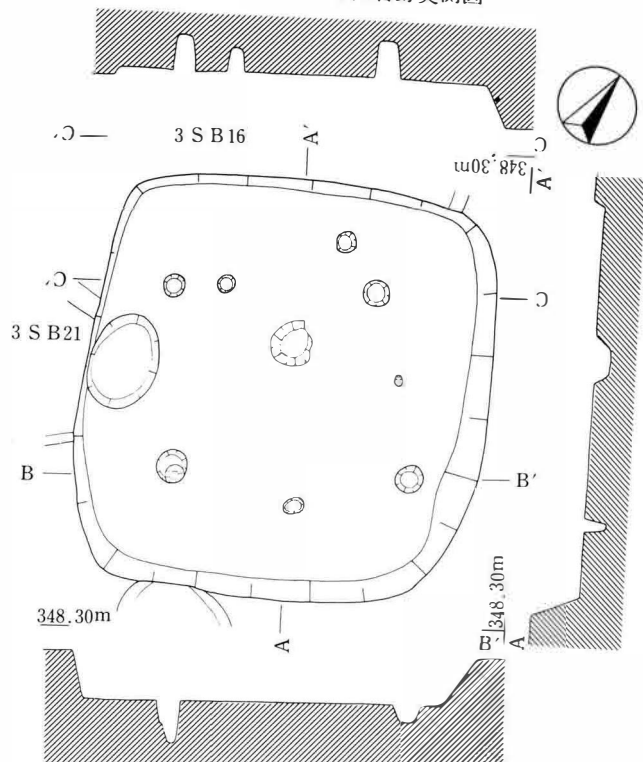
住居平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向7.20m×横方向4.90mを測る大型の住居である。北東壁を15号住居跡に切られ、南壁は20・21号住居跡を切っている。主軸方位はN-25°-Wである。柱穴は11基検出したが、柱列配置は不規則で不明であるが、長方形を呈すると考えられる。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面からの掘り込みは深いところで16cmを測り、深い部分には焼土が堆積していた。検出面からの床面の深さは40cmを測り、覆土の堆積状況は大きく3層に分層できる。上層は褐色土で、土器の出土量が多く、打製石鏃〔第108図・28~38〕を11点、管玉〔第114図・125〕等石器類も多い。中層は炭化物を若干含んだ暗褐色土で、土器の出土量は少なく管玉〔第114図・126〕が出土したのみである。下層は炭化物、焼土共に多く含んだ暗褐色土で、薄い層ではあるが土器の出土量は非常に多い。また床面からは打製石鏃3点〔第108図・39~41〕、磨製石斧2点〔第112図・102、103〕が出土している。現存している高さが45cmを測る大型甕〔第99図・183〕が出土しているのをはじめとして、完形に近い土器が多く出土している。なお他の住居跡覆土の堆積状況もこれに準ずる。

3次面20号住居跡

住居平面形は方形を呈し、4.50m×4.30mを測る。北壁を16号住居跡に切られ、西壁は21号住居跡を切っている。主軸方位はN-34°-Wである。柱穴の総数は7基で、主柱穴は4基方形を呈する。炉跡は住居中央よりやや北に位置し、床面からは18cmの掘り込みである。土器も多く出土し、また打製石鏃〔第109図・48〕や、円板状土製品〔第106図〕も多く出土している。



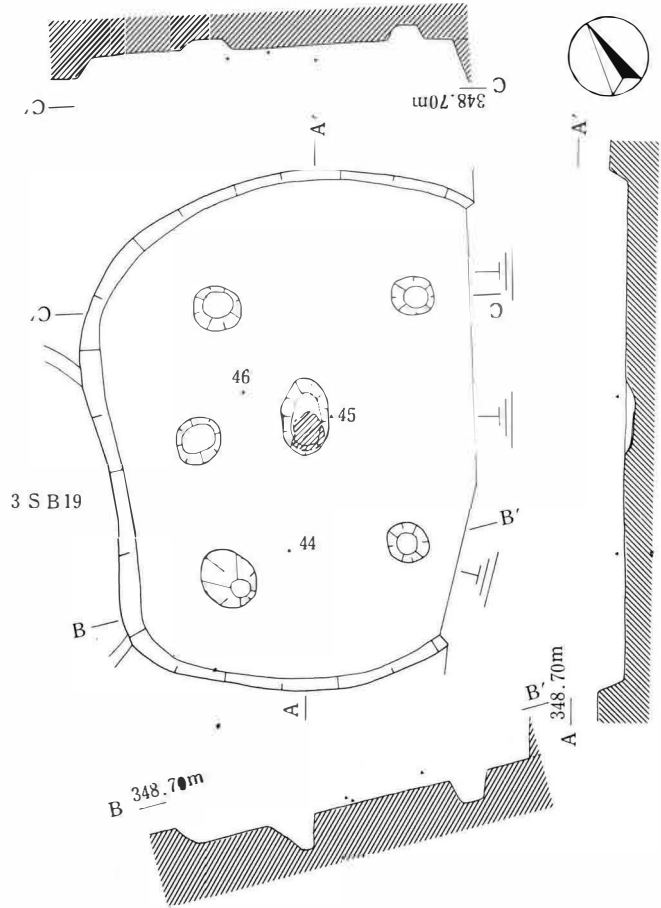
第69図 3次面16号住居跡実測図



第70図 3次面20号住居跡実測図

3次面18号住居跡

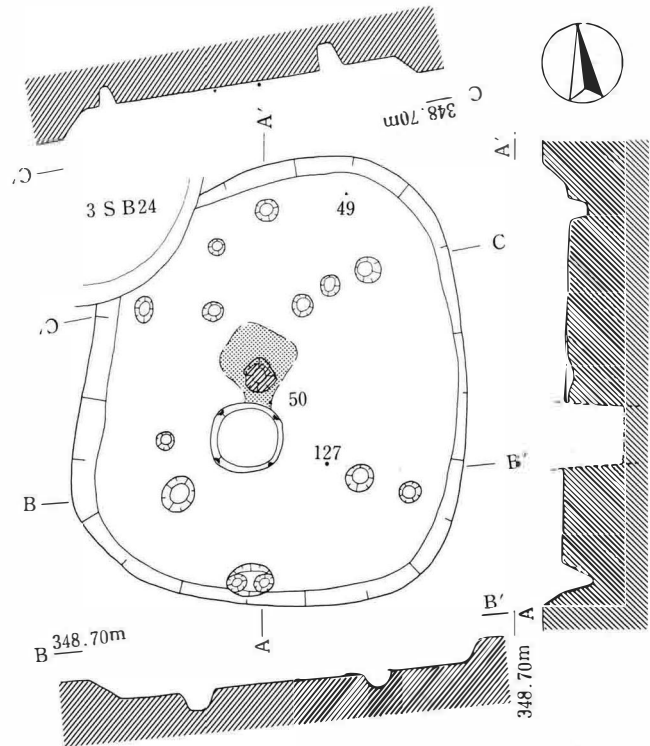
住居平面形は隅丸長方形を呈すると考えられるが、東壁は調査区域外にあり検出できなかった。主軸方位はN-35°-E、検出面からの床面の深さは35cmを測る。西壁は19号住居跡を、北壁は環状溝跡をそれぞれ切っている。柱穴は5基検出し、柱列配置は方形を呈すると考えられる。炉跡は住居の中央よりやや西に位置し、床面からの掘り込みは8cmを測る。炉底面からは焼土を検出した。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっているが、その他は軟弱な床になっている。土器は甕の出土が多く、完形に近いものもあった。また覆土内からは2点の打製石鏃[第108図・44、45]が、床面近くからも1点の打製石鏃[第108図・46]が出土している。



第71図 3次面18号住居跡実測図

3次面22号住居跡

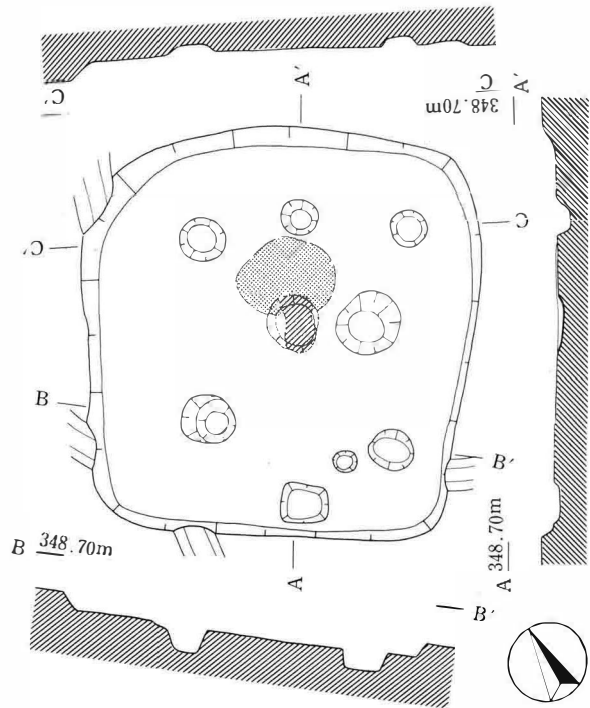
住居の平面形は変形しているものの、主軸方向5.00m×横方向4.20mを測る隅丸方形を呈する。北壁隅は24号住居跡に切られ、2条の環状溝跡を切っている。検出面からの床面の深さは30cmを測り、主軸方位はN-7°-Eである。柱穴総数は13基と多く不確定であるが、柱列配置は方形を呈すると考えられる。また住居主軸に対する支柱穴も2基検出した。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面からの掘り込みは6cmを測る。底面には焼土が残存し、炉跡の周辺には炭化物が拡散していた。出土土器は少なく全て小破片であったが、床面から打製石鏃[第109図・49]と管玉[第114図・127]が、炉跡周辺の炭化物内からは打製石鏃[第109図・50]が出土している。



第72図 3次面22号住居跡実測図

3次面24号住居跡

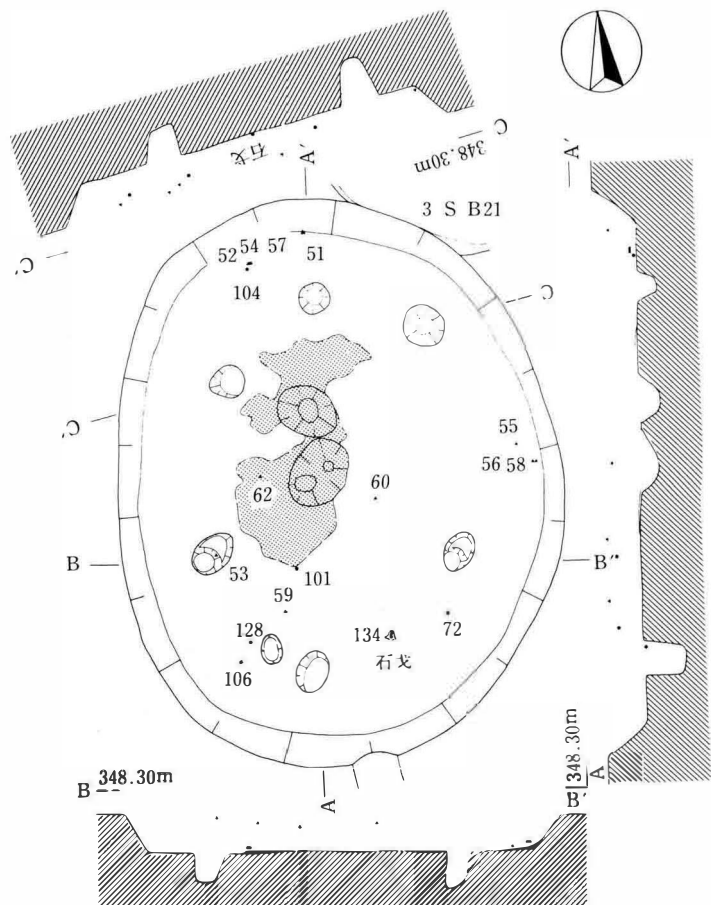
住居の平面形は主軸方向4.40m×横方向4.20mを測る方形を呈し、検出面からの床面の高さは20cmである。主軸方位はN-31°-Eで、1条の環状溝跡と2条の溝跡を切っている。柱穴の総数7基を検出し、うち主柱穴は5基で方形を呈する。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、床面から8cmの掘り込みで、底面から焼土を検出した。また炉跡の周辺には炭化物が拡散していた。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっているが、炉跡の東側は土坑による攪乱を受けている。その他は軟弱な床になっている。出土した土器は少量で、全て小破片のみである。



第73図 3次面24号住居跡実測図

3次面25号住居跡

住居の平面形は主軸方向6.00m×横方向4.60mを測る楕円形を呈している。検出面からの床面の深さは50cmあり、主軸方位はN-5°-Eである。北壁は21号住居跡を切り、南壁は1条の溝跡を切っている。主柱穴は4基を確認し、柱列配置はやや変形した方形を呈する。住居主軸に対する支柱穴も2基検出され、柱穴の総数は7基を数える。炉跡は住居のほぼ中央に位置しているが、北側にも炉跡と考えられる掘り込みがあるため、炉の移し替えが行われたと考えられる。炉跡の周辺には炭化物の拡散が見られた。中央の炉跡は床面より16cm、もう一方は20cmの深さになる。床面は炉跡を中心として堅い床が広がっているが、その他は軟弱な床になっている。土器 [第103図・308~321、第104図・322~354] の出土量は多いが、全て小破片にすぎず完形或いはそれに近いものは出土しなかった。石器類については、床面より打製石鏃 [第109図・52、54、57] が3点重なり合った状態で出土したほか、小型偏平片刃石斧 [第113図・112] が出土している。また床面より石支 [第114図・134] が、住居の南側の炉跡と住居壁の中間あたりから出土した。

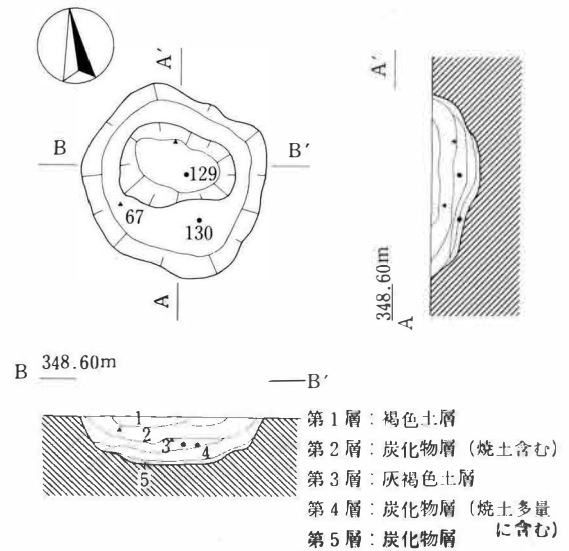


第74図 3次面25号住居跡実測図

b 土坑

3次面1号土坑

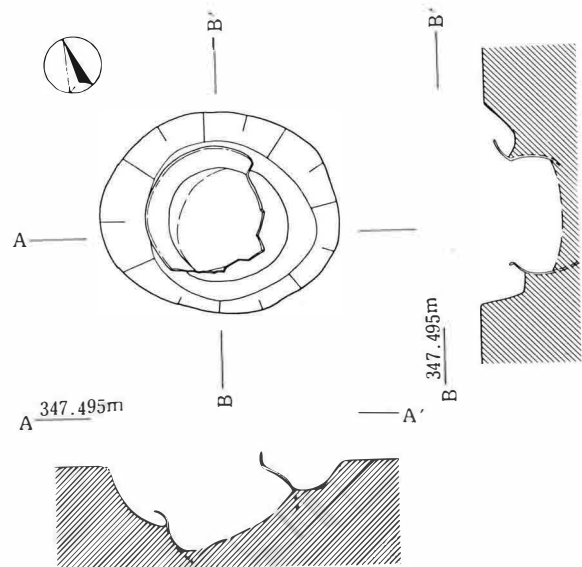
調査区北東に位置しているこの土坑は、南側が17号住居跡を切っている。平面形は円形に近い方形で、1.40m×1.50mを測る。検出面からの深さは36cmを測り、中央にはさらに10cmの掘り込みがある。覆土は大きく5層に分層し、褐色砂質土層と炭化物層とが交互に堆積している状況が看取り得た。堆積（埋没）状況は人為的であるものと考えられる。出土した土器は小破片が大半を占めていたが、第2層からは打製石鏃〔第109図・67〕が、第3層からは管玉〔第114図・129、130〕が出土している。また土器は層別取上げを試みたが、良好な結果は得られなかった。



第75図 1号土坑実測図 (Scale = 1 : 60)

3次面28号土坑

8号環状溝跡に囲まれた土坑群の一つで、53cm×63cmを測る小土坑である。土坑内からは、表面に櫛描波状文を施文した甕〔第105図・366〕がやや傾き埋置された状態で出土した。また小型偏平片刃石斧〔第112図・111〕も出土している。他の小土坑からも土器や石器は数点出土しているが、土器が埋置された状態のものは唯一例であった。



第76図 3次面28号土坑実測図 (Scale = 1 : 10)

c 環状溝跡

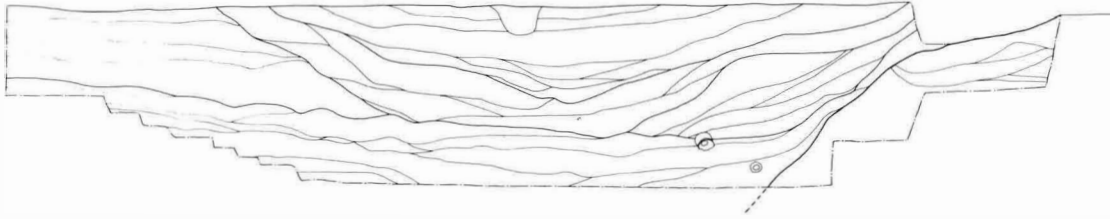
今回の調査では13条を検出することができたが、不明瞭なものも含めると20条近くにも及ぶ。多くの平面形が円形もしくは楕円形を呈しているが、7号溝跡のみ方形に近い形である。検出面からの掘り込みは10cm前後と浅く、一番深い箇所でも18cmを測る。この環状溝跡に囲まれた中において無数の小土坑を検出した。規模は直径30cm～50cmのものが多く、深さも5cm～20cmと多種である。希少例として土器を埋置した28号土坑や磨製石鏃を2点出土した8号土坑などが存在するが、多くは柱穴土坑と思われる。これら土坑群の規則性について今回の調査では明確にし得なかったが、環状溝跡との関係は否めない。この種の遺構の検出例は少なく、現在のところでは明確にできない。

d 河川跡

調査区内の北側隅及び南側一帯で検出され、深さ約2mのトレンチを3ヶ所に設定した。弥生時代以前または弥生時代中期頃にはまだ河川として機能していたか否か不明であるが、大溝状の窪地であったことは想定できる。弥生時代後期から奈良時代頃にかけて埋没し、平安時代までには平地化したと考えられる。このことは1・2次面において12・14・15・20・24・25・26・27・29・30・31・33・34・35号住居跡等を検出していることから推察される。なお河川本体の深さは5～6mあったと予想される。

347.20m

347.20m



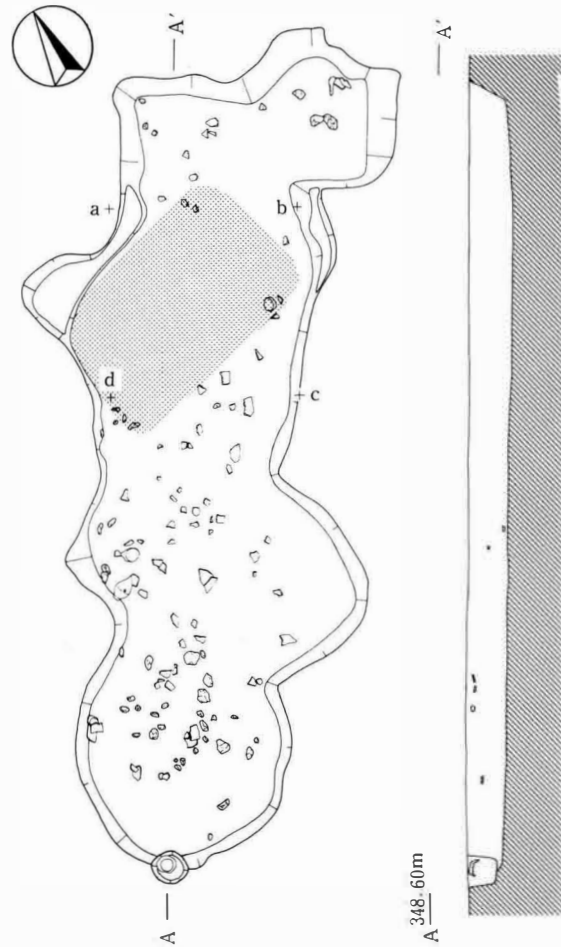
第77図 3次面河川跡土層断面実測図 (Scale=1:80)

e 性格不明遺構

3次面1号性格不明遺構

調査区の南側、河川跡の東脇にて検出した。河川跡埋土によって調査区南半部の土壌堆積が不明瞭なため、純粹に第3次面(弥生時代中期)の遺構であるかは確定できない。最大長4.28m、最大幅1.58m、最大深さ23cmを測る不規則・長大な土坑状の遺構である。覆土は炭化物・焼土・土器・小石等を多量に含んだ砂質土層である。南の一部を小土坑に切られている。遺構中心部よりやや北に小石・焼土の集中区〔第79図〕がある。この集中区が本遺構の主体部と考えられるが、その性格は不明である。出土遺物には土器〔第105図・370～373〕、石鏃〔第109図・64～66〕がある。特に胴部に1孔を有する壺〔第105図・370〕は完形で出土している。

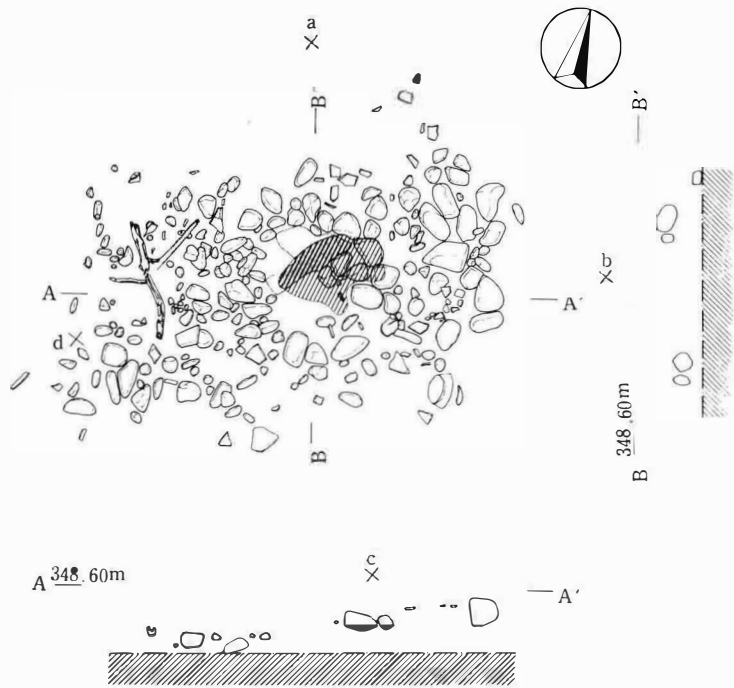
集中区には小石がおおよそ長軸方向N-76°-Eを示す長形状に集中している。小石・焼土・炭化物・被熱骨・土器で構成され、何らかの施設を思わせる。この中心部には、集中している焼土と炭化物を囲繞する拳大の石と小石がある。直径約25cmで、円を意識した



第78図 3次面1号性格不明遺構実測図 (Scale=1:40)

配列であることが明瞭である。内部には焼土・炭化物・骨片のみで、その下層には第3次面の地山層である黄褐色砂質土層になる。被熱骨は熱による変質・変色が著しく、残存状況はきわめて不良である。集中区の南側には大腿骨、北側には頭蓋骨と思われる骨片があり、まだ正式な鑑定を受けていないが、おそらく人間と思われる。

本遺構の性格としては、礫床木棺墓や焼土坑など考えられるが、中心部の円形列石、被熱骨の存在はその他の施設の存在を想定させるものであろう。

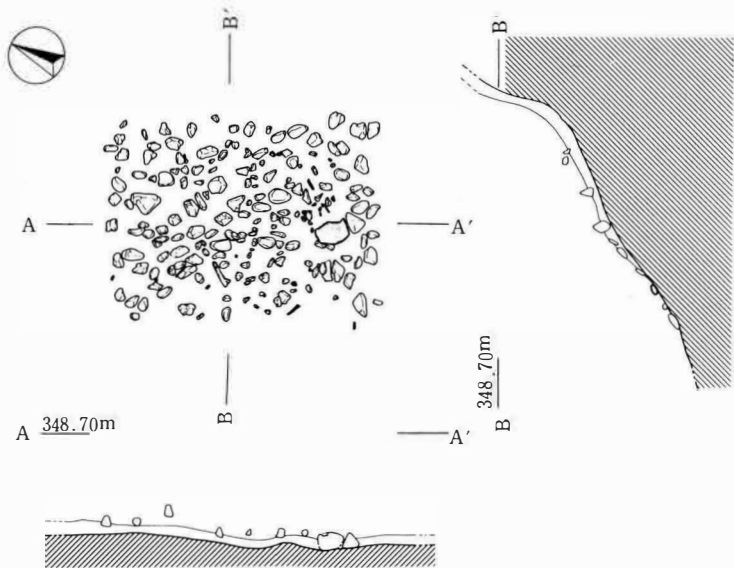


第79図 3次面1号性格不明遺構微細実測図 (Scale=1:20)

3次面2号性格不明遺構

河川跡の落ち込み部に位置しているため、平均33°の傾斜角を持っている。長軸方向N-26°-Wを示す長方形を呈し、全長1.46m、全幅1.08mを測る。拳大の石と小石で主に構成されているが、残存状態不良な骨片が数片存在する。1号不明遺構と同様、頭蓋骨・大腿骨らしき骨片があるが、熱は受けていないもののスポンジ状となっており脆弱である。

河川跡との間には1層挟んでいるが、西側では河川跡のベース面に接しており、周辺部には掘り方等の遺構は確認し得なかった。本遺構の性格としては、河川跡落込みの影響を受けた礫床木棺墓と考えられるが、現状では不明である。



第80図 3次面2号性格不明遺構実測図 (Scale=1:40)

IV 遺 物

1 奈良・平安時代の土器

a 土 器

土師器 杯・高台付杯・皿・高台付皿・甕・小形甕・鉢・甑・羽釜・三脚付火舎・筒形土製品がある。

杯 ロクロを使用している。調整方法により、以下に分類される。底部切り離し方法は、回転糸切りである。

A₁ 底部静止ケズリ（底部周縁から底部全体静止ケズリのもの [1・37・92・155・185・243・246・276]、
底部周縁回転ケズリし底部静止ケズリのもの [73]、底部のみ静止ケズリのもの [10・38・39・214・223・
233・234・241]）

A₂ 底部一部静止ケズリ（底部周縁から底部一部静止ケズリのもの [186・232・242]、底部一部静止ケズリ
のもの [196・239]）

B₁ 底部回転糸切り内面ミガキ黒色処理したもの。 B₂ 底部回転糸切り内面ミガキのみのもの。

B₃ 底部回転糸切り内面黒色処理のみのもの。 B₄ 底部回転糸切り内面無調整のもの。

Aの杯は内面ミガキ黒色処理している（246はミガキのみ）。

高台付杯 A 内面ミガキ黒色処理 [72・85・110・111・139・140・141・149・151・178・180・197・198・271]

B 内面ミガキのみ [248・249・269・270] C 内面無調整 [58・138] に分けられる。

皿 ロクロ調整し、内面はナデによりロクロ痕を消している [112]。

高台付皿 内面ミガキ黒色処理。高台はとれている [66]。

甕 成形、調整方法により3つに分類される。

A ロクロ調整のち、外面胴部をタテ方向のケズリ、内面をカキメ、ハケ調整のロクロ甕。

B 外面頸部付近から胴部上位をヨコ方向のケズリ、その下をタテ方向にケズリ、内面をナデ調整している
いわゆる武蔵型甕。

C 外面胴部をタテ方向のハケ、内面をナデ調整しているハケ甕。

小形甕 口径が15cm以下のものを小形甕とした。成形、調整方法から、ロクロ調整しているA [2・7・23・
31・43・44・59・67・68・69・91・114・124・157・163・164・170・218・219・254] と、いわゆる武蔵型甕
のB [255] に分けられる。15号住居跡出土の114は、口径が8.4cmと小さく、ロクロ調整後、外面は口縁部か
ら胴部上位ヨコ方向にミガキ、内面は口縁部から胴部下位までヨコ方向のちタテ方向にミガキ、底部は回転
糸切りしている。

鉢 99は口縁部が長く外反し、くの字状を呈する。外面胴部上位から中位までタテ方向のハケ、下位は斜め方
向のケズリ、内面はナデ調整している。外面底部にモミ痕、ロクロのゲタ痕が残る。130は口縁部が短く外反
し、ロクロ調整後、外面はタテ状のハケ、内面はカキメ調整している。

甑 171は外面ハケ、内面ナデ調整。172の外面はハケ、内面はナデ調整し、下位を丁寧なケズリ調整。

羽釜 145は口縁部が内傾し、鏝が平行している。154は口縁部が直立し、鏝が太い。273は口縁部がやや内傾
し、鏝が平行している。274は口縁部がほぼ直立し、鏝が太く短い。275は口縁部が長く直立し、鏝が平行し
ている。

三脚付火舎 152は口径17.8cm、口縁端部が須恵器口縁部形態に近似し、外面胴部中位から底部にかけケズリ調

整し、底部はケズリ底である。脚はとれているが、脚を付けやすくするためにつけたキザミ痕が見える。272は口径16.0cm、口縁端部が須恵器口縁部形態に近似し、外面胴部下位方向から中位にかけナデ調整、底部付近から底部にかけ静止ケズリしている。底部は静止ケズリ後ナデ調整している。脚はとれている。

筒形土製品 [47・238]

須恵器 杯・高台付杯・杯蓋・甕・壺・横瓶・四耳壺・鉢・甗がある。

杯 調整方法により、以下に分類される。

A₁ 底部へラ切りのちナデ。A₂ 底部へラ切りのち静止ケズリ。A₃ 底部周縁から底部静止ケズリ。

B 底部回転糸切り。

高台付杯 底部から口縁部へほぼ直に立ちあがり、底部は糸切りのち回転ケズリにより調整し、高台を付けナデ調整。

杯蓋 つまみ部の形態から、扁平なつまみをもつもの [33・49・54・93・147] と、宝珠つまみをもつもの [34] に分類される。

横瓶 土器片を転用した置台の付着状況、自然釉の付着状況から窯内で横に立て、焼成したことがわかる。内外面ともに自然釉がかかっている [27]。


甕 159は、内外面ともに自然釉がかかっている [159・222・260]。

壺 158は、内外面ともに自然釉がかかり、底部に窯道具が付着している [42・96・158・165・235]。

鉢 [41・48]

甗 [100]

灰釉陶器 椀 [40・115・132・181・253・278]、皿 [26・89・116] がある。

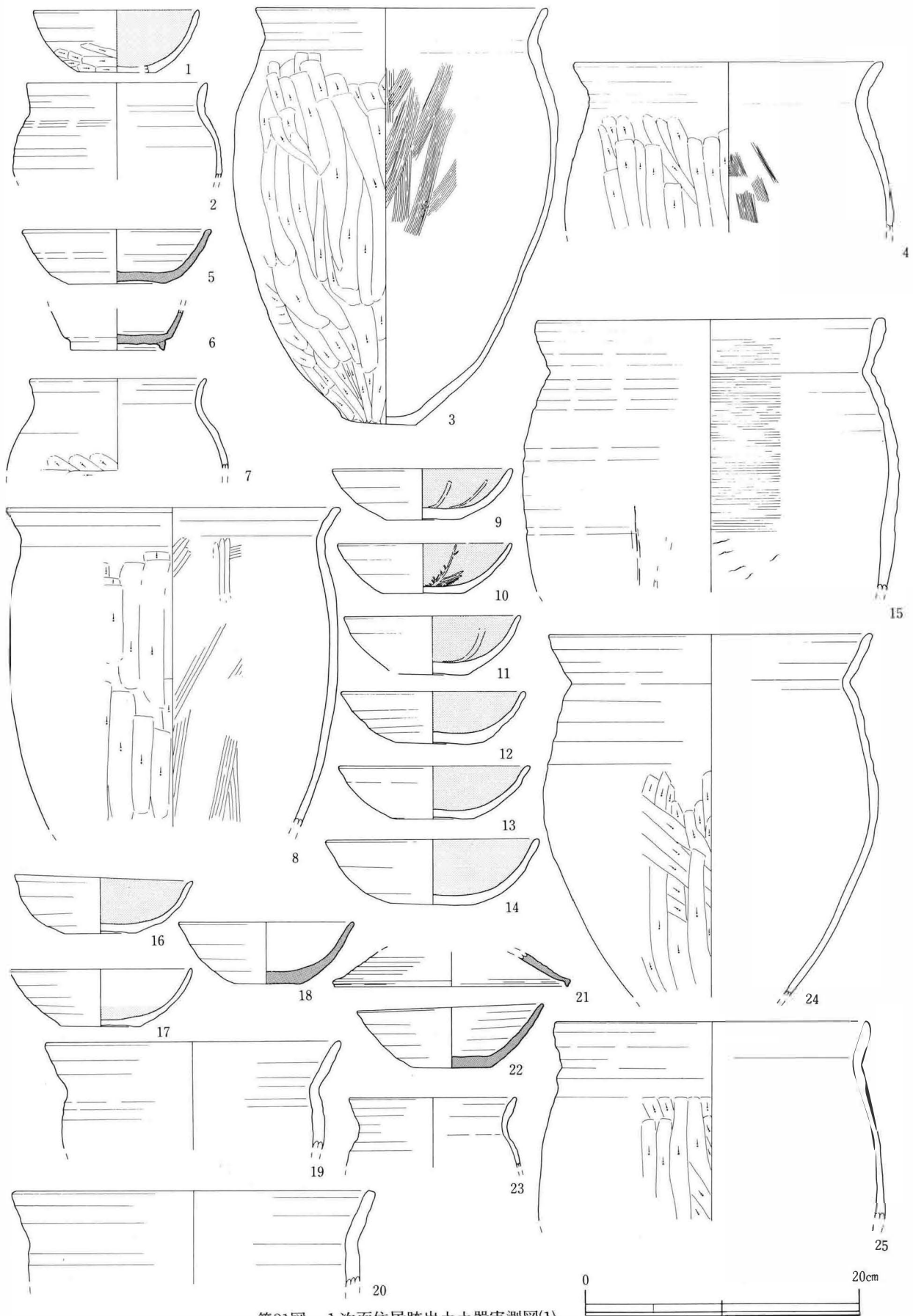
本遺跡から出土した墨書土器は、土師器杯片2点、須恵器杯片2点が出土している。土師器杯片では、11号住居跡から「𠩺」[81]、15号住居跡から「𠩺」[109]、須恵器杯片では、11号住居跡から「牛」[80]、28号住居跡から「山」[211]の墨書片が出土している。33号住居跡からは杯蓋天井部内面に朱墨をとどめている転用碗の破片[258]が出土している。特筆すべき土器について述べると、33号住居跡出土の土師器杯 [243] と須恵器杯 [250] の底部に刻印がある。2点ともに焼成前に同じ「」印を刻んでいる。土師器と須恵器の製作者（集団）の関係解明について、一石を投ずる資料となろう。今回出土した甕のほとんどがロクロ甕であるが、17号住居跡出土の126・127の2点は、他のロクロ甕と異り、外面胴部をタテ方向にケズリ調整した後、タテ方向にヘラミガキし、ケズリ痕を消している。26号住居跡出土の183は武蔵型甕を模倣している。灰釉陶器は、暗緑色の釉が内外面に施され、外面下半が、回転ケズリ整形されているものと、未整形のものがある。底部は回転ケズリにより調整され、高台を付けナデている。高台は、稜がやや不明瞭な三日月高台の形態をとる。大原2号窯式に相当すると考えたいが、光ヶ丘1号窯式の様相を残していることもあり、明確に言及し得ない。

本遺跡の1次面・2次面は、8世紀末ないしは9世紀初頭から11世紀代に相当する。8世紀末から9世紀代に相当するものは、7号住居跡・13号住居跡・31号住居跡で、土師器杯はA₁・A₂で丁寧調整されている。須恵器杯はA₁～A₃の丁寧調整されているものとBがある。他に壺・鉢・高台付杯・蓋・甗がある。7号住居跡の40は混入品と思われる。11世紀代に相当するものは、19号住居跡・20号住居跡・34号住居跡で、土師器杯はB₄となり、須恵器は消滅していく。土師器杯は小形のものが出土し [261～265]、中世の「かわらけ」に近似している。煮炊き用具である甕に、新たに羽釜が加わってくる。他の住居跡は10世紀代に相当するものと考えられる。須恵器が減少し、かわって灰釉陶器が出現してくる。

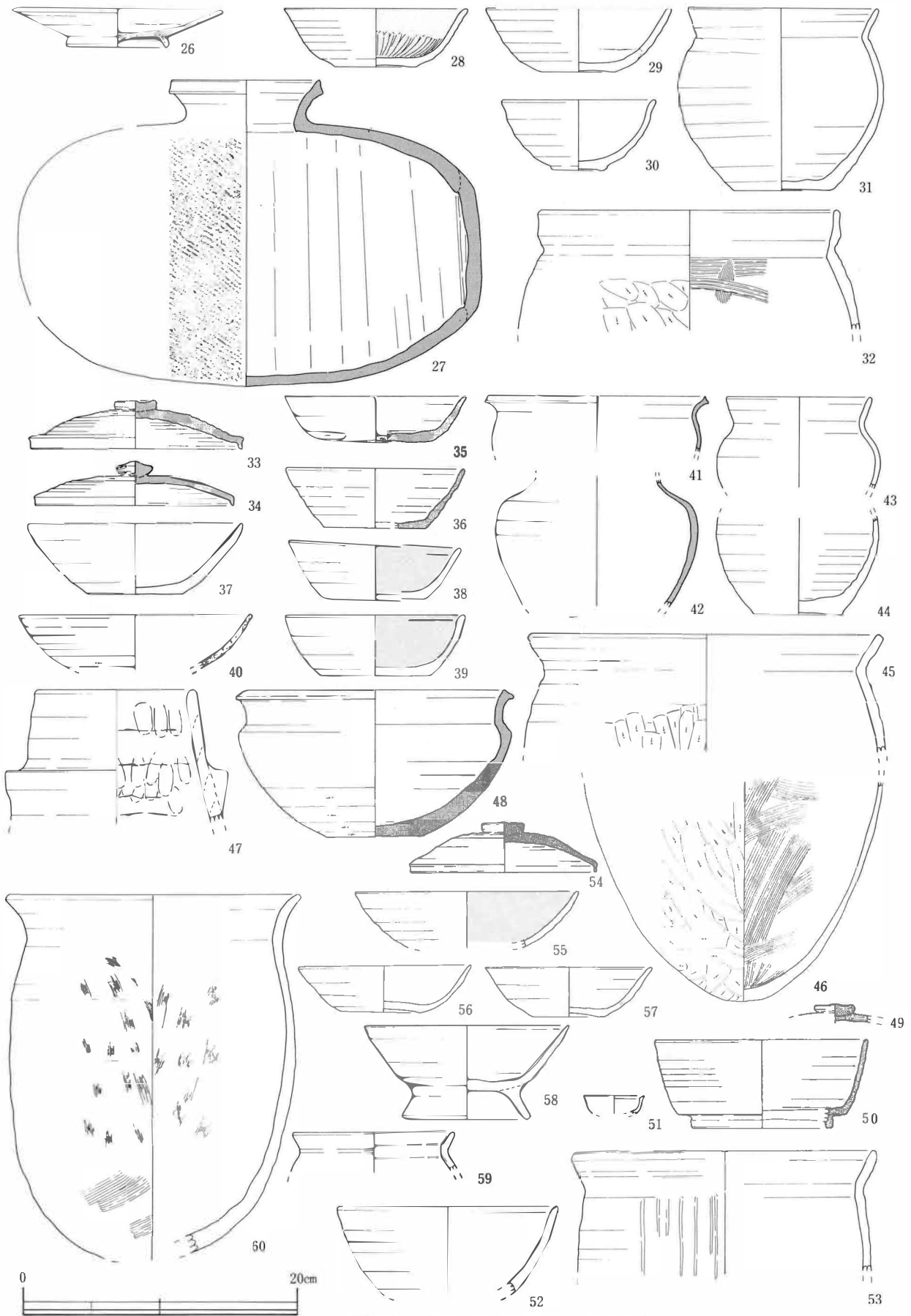
第1表 1・2次面出土土器器種構成表

住居	土 師 器											須 恵 器					灰 種					
	杯						台 杯	甕			甗	羽 釜	そ の 他	杯								
	A1	A2	B1	B2	B3	B4		A	B	C				A1	A2	A3		B	台 付	壺	甕	蓋
1	1							3 4														
2								8	+								5	6				
3	10		9 11~14					15														
4			16 17	18				19 20														
5								24 25									22					
6			28	29 30				32													27 横瓶	26
7	37~39							45	+			47 筒形土製品			35	36		42		33 34	41・48 鉢	40
8								53	+								50			49		
9							56 57	58		(60)										54		+
10			63 64				62	70				60 台付皿					61					
11	73		71					72								74~ 80						+
12			82・84 86				83	85	90							87 88						89
13	92							98	+			99 鉢	94	95				96		93	100 甗	
14						101																+
15			103~ 108				110 111					112 皿										115 116
17			117~ 120	123		121 122		125~ 127														+
18										131		130 鉢										+
19						134~ 137	138~ 141	142~ 144				145										132
20						150	149 151					154	152 三脚付火舎							147		
21	155							156										158	159			
24																						
25						167~ 169					171 172							165				+
26			174・175 179			173	178 180	183 184														181 182
27	185	186 196	190・191 193~195	201	187~189 192	199・200 202	197 198	205~ 210								203	204					
28	214							215								211~ 213						
29								220 221								216						+
30	223							225	224										222			
31	233 234	232						237				238 筒形土製品				226~ 231	236	235				
32		239						240														
33	241・243 246	242			244 245	247	248 249	257	256							250~ 252			260		259 四耳壺	253
34						261~ 267	269~ 271					273~ 275	272 三脚付火舎									
35	276					277											279 280					278

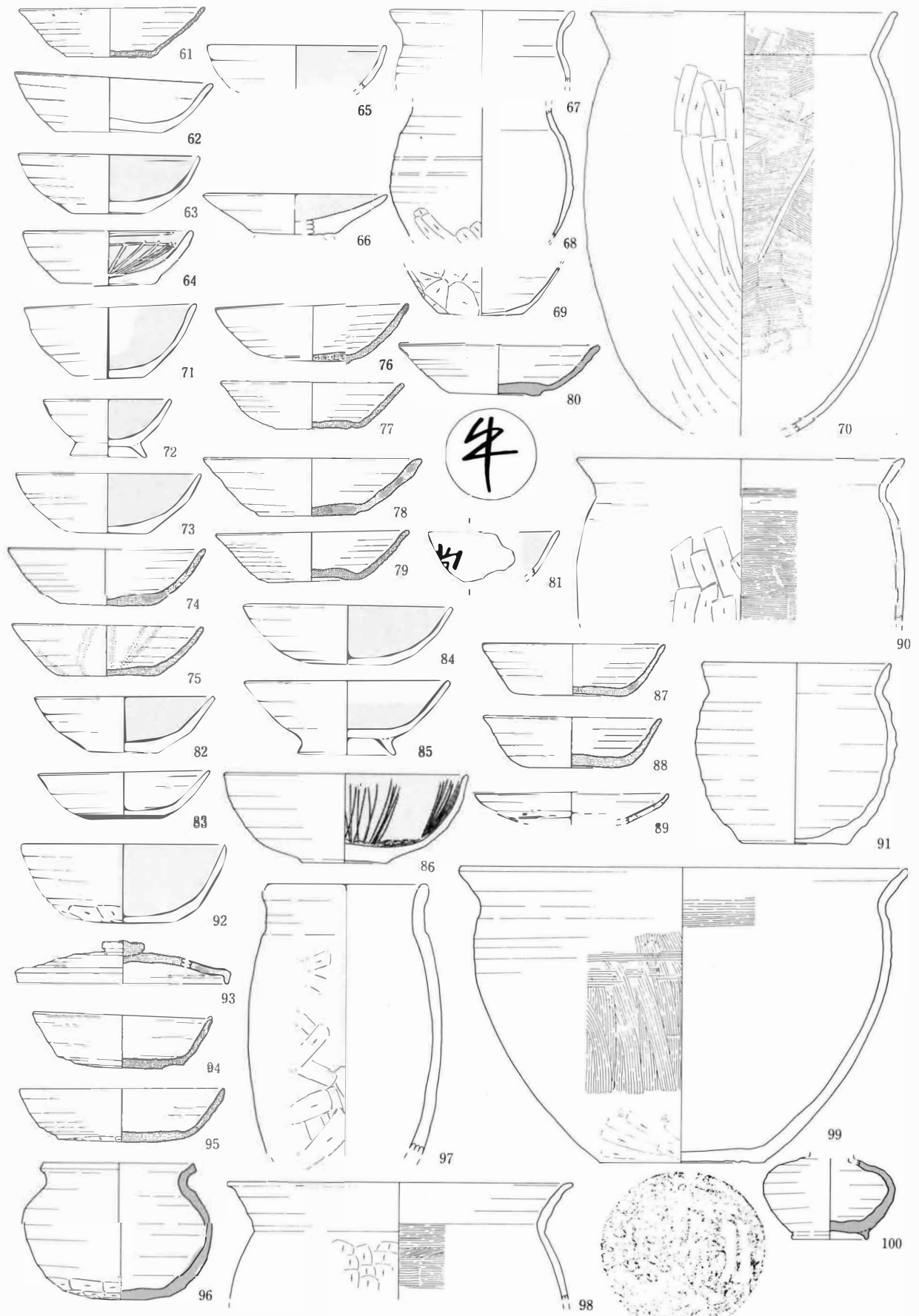
(番号は実測図と一致、+は未実測個体中破片等の存在を表す。)



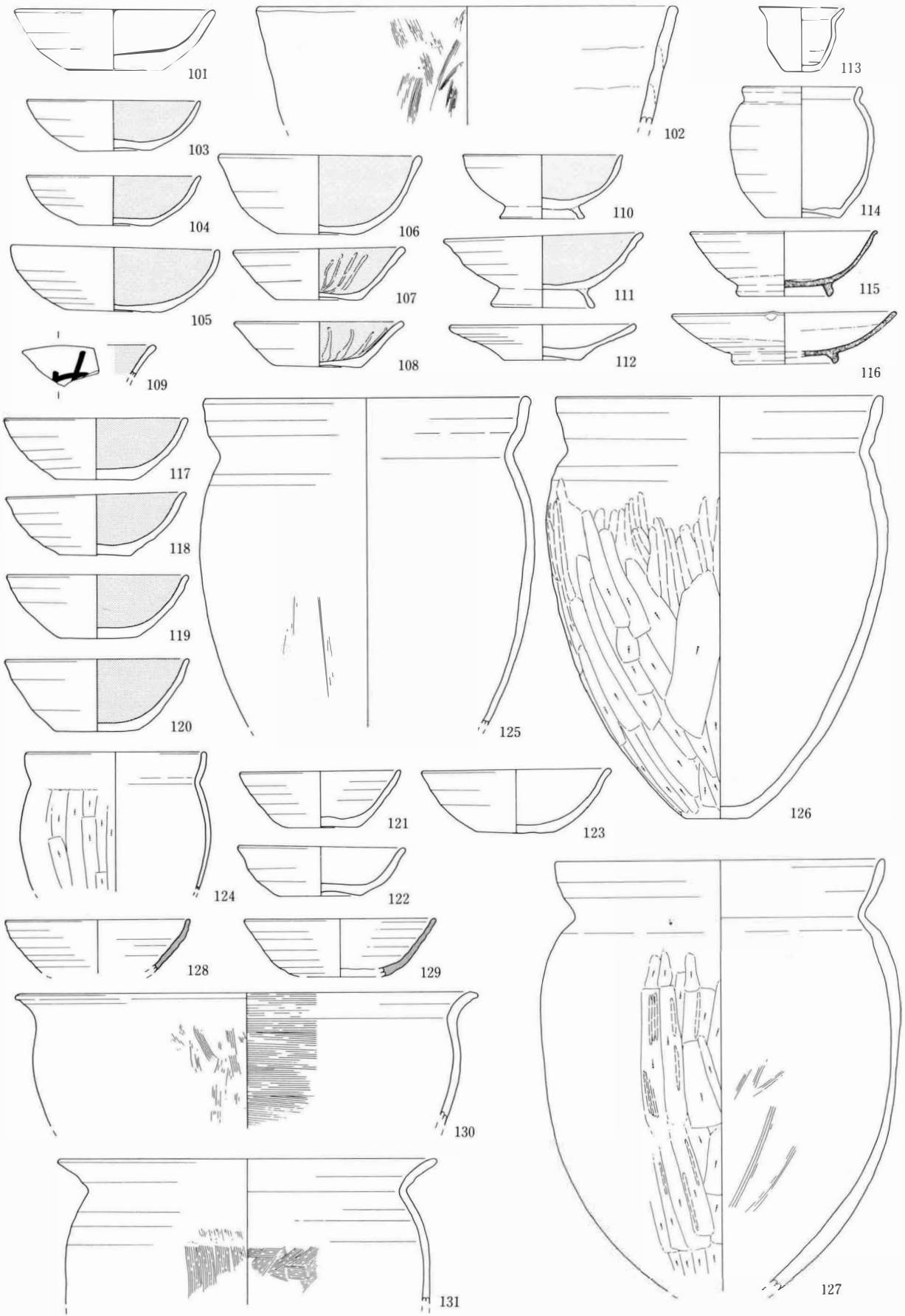
第81图 1次面住居跡出土土器実測図(1)



第82图 1次面住居跡出土土器実測図(2)



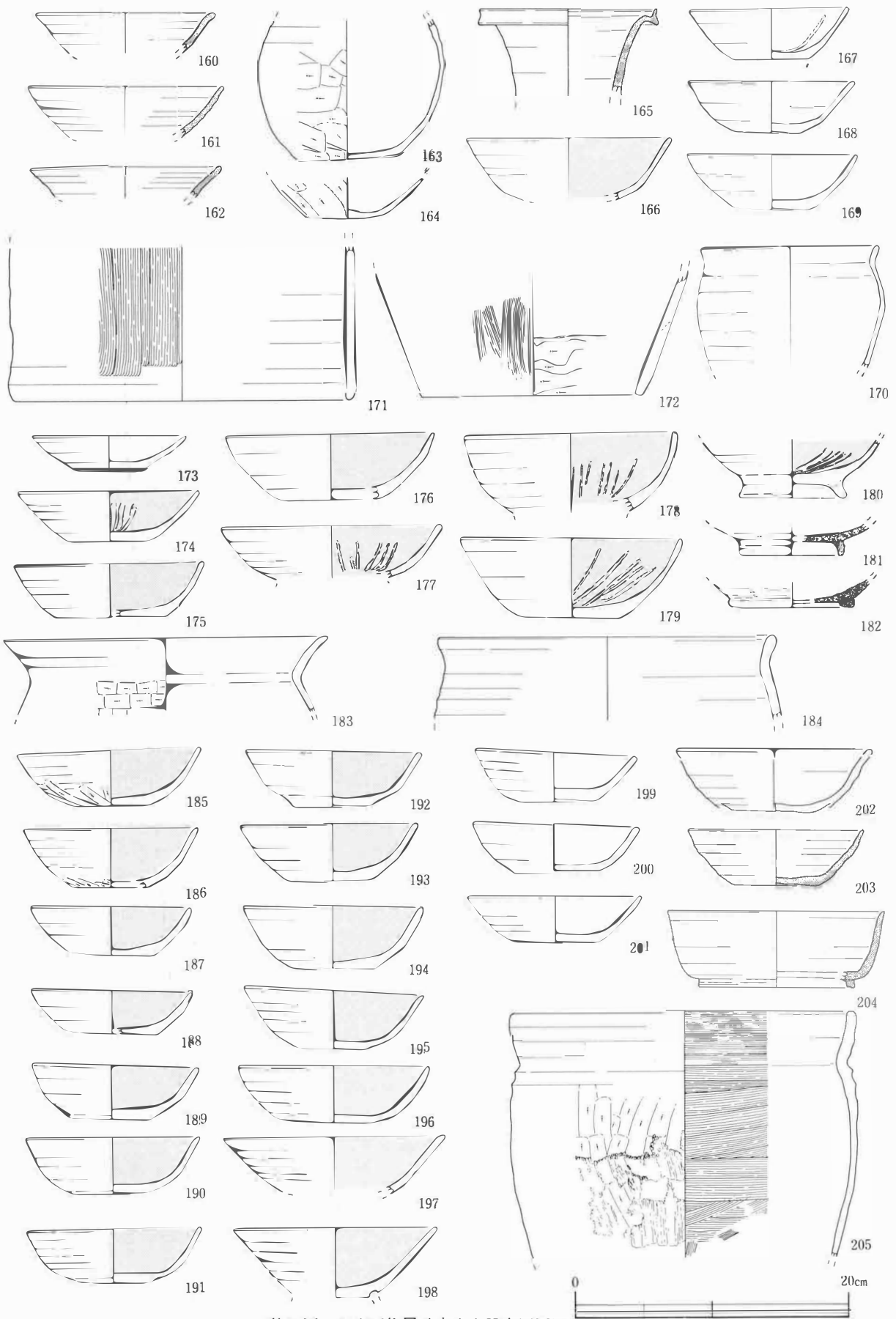
第83图 1次面住居跡出土土器実測図(3)



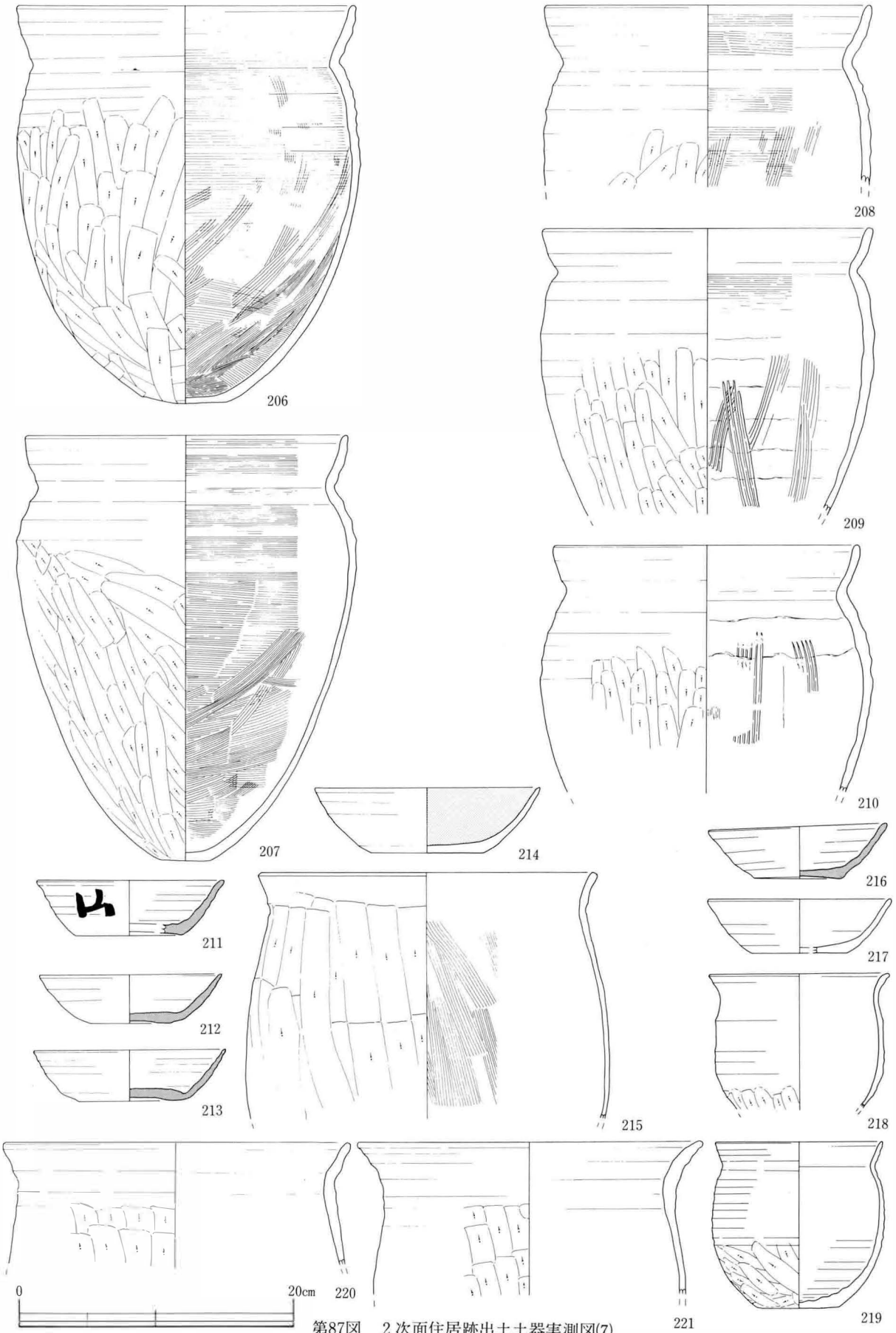
第84图 1次面住居跡出土土器実測図(4)



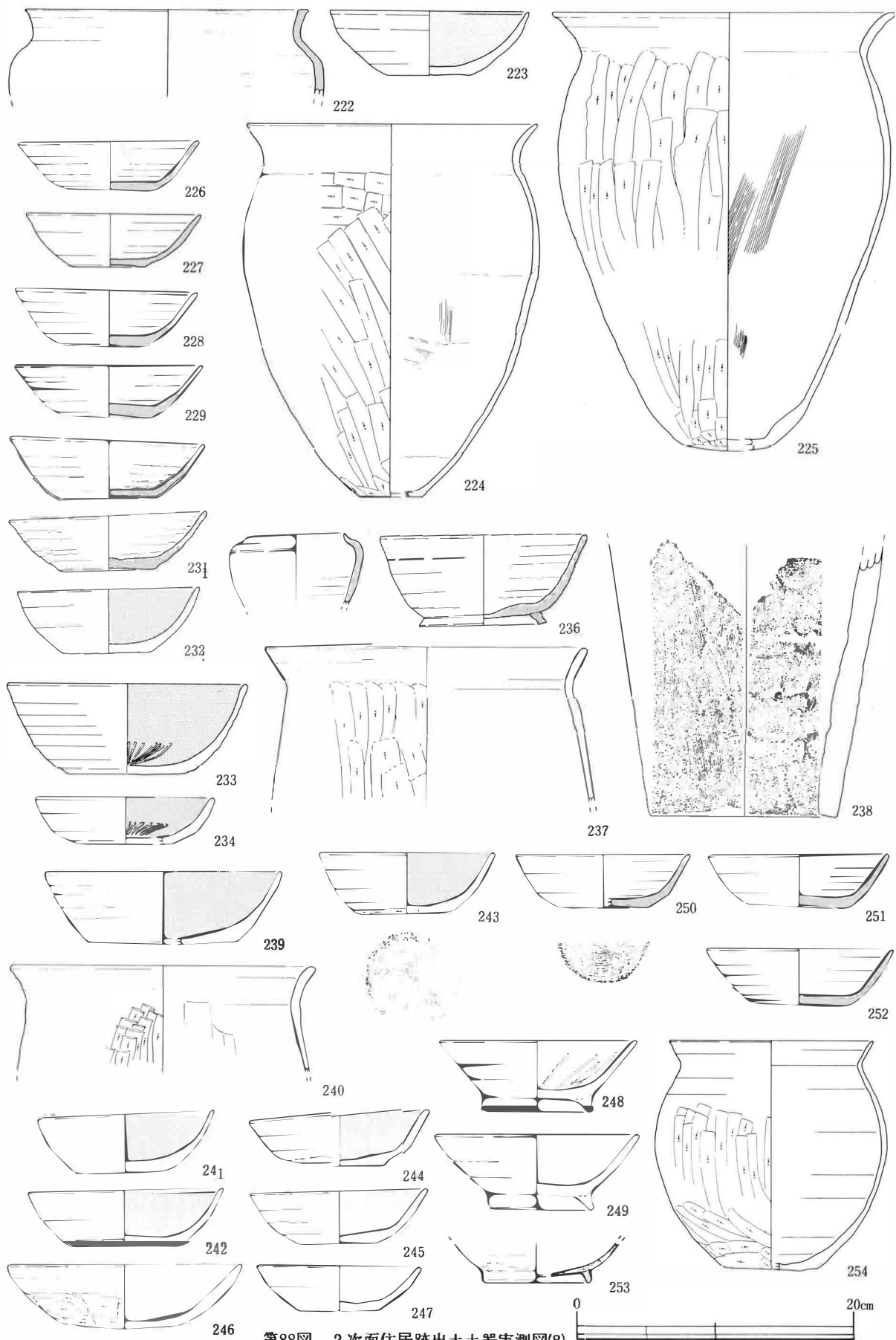
第85图 1·2次面住居跡出土土器実測図(5)



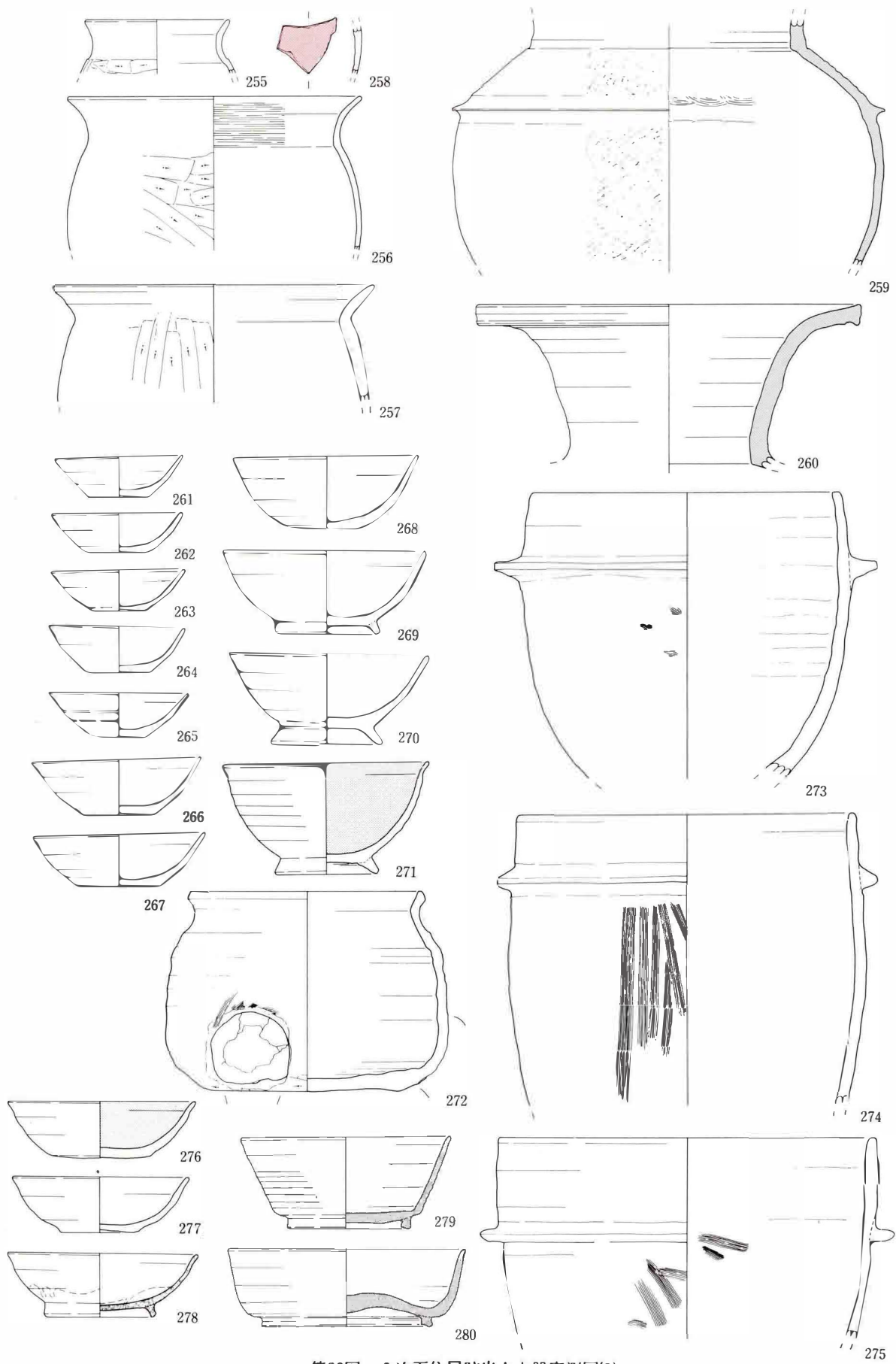
第86图 2次面住居跡出土土器実測図(6)



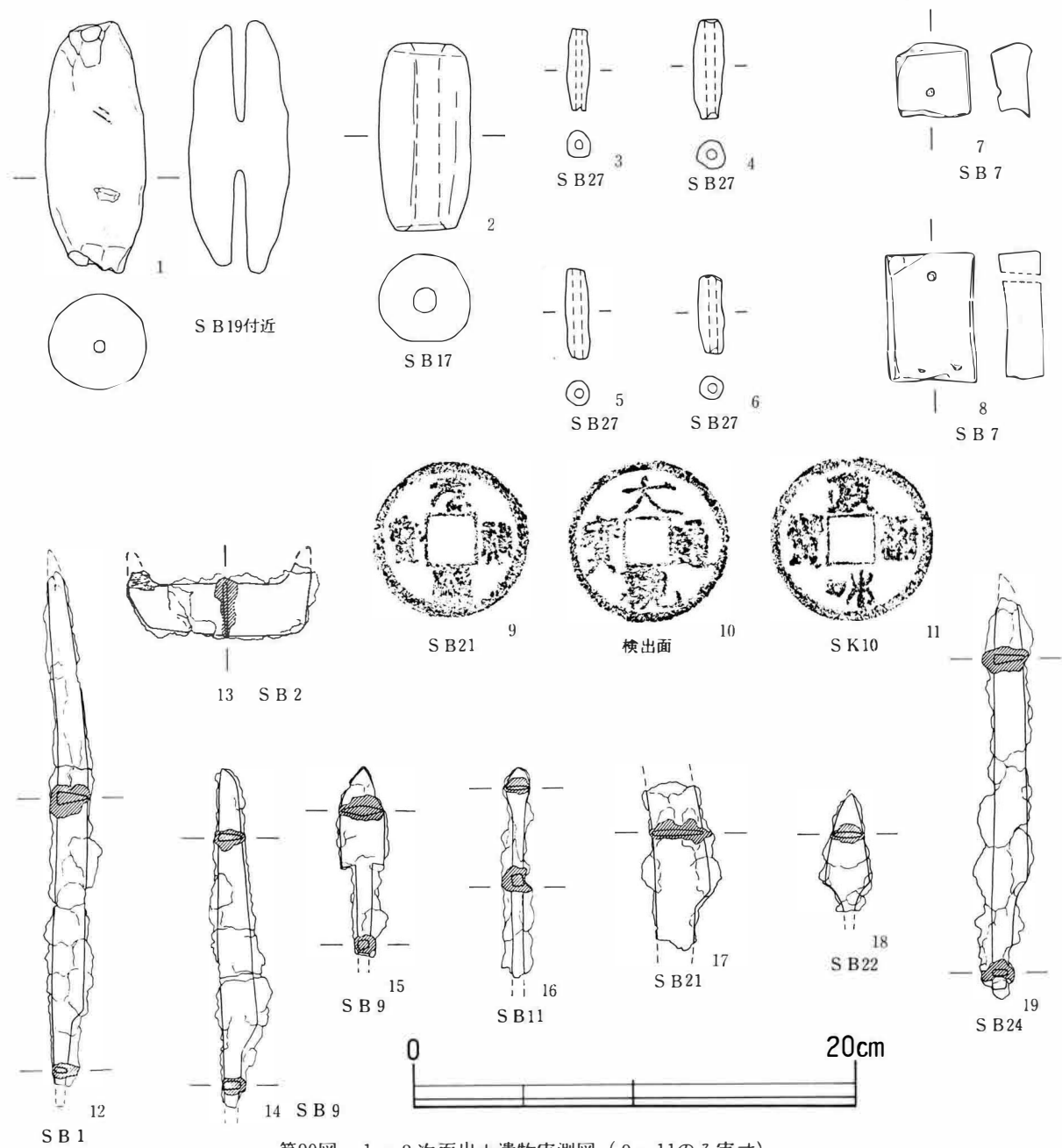
第87图 2次面住居跡出土土器実測図(7)



第88图 2次面住居跡出土土器実測図(8)



第89图 2次面住居跡出土土器実測図(9)



第90図 1・2次面出土遺物実測図(9~11のみ実寸)

b その他の遺物

1・2次面における土器以外の出土遺物として土錘、砥石、北宋銭、刀子、鉄鍬、鍬先状鉄製品等がある。土錘は、管孔が貫通せず土錘としての機能を持たない錘形土製品〔第90図・1〕や陶錘〔第90図・2〕の大型品と、27号住居跡一括の小型品4点〔第90図・3~6〕がある。砥石は7号住居跡より出土した2点〔第90図・7、8〕を図化した。銅銭3点はいずれも北宋銭で、1093年初鑄の「元祐通宝」〔第90図・9〕は21号住居跡覆土より、「大観通宝」〔第90図・10〕は検出面より、1111年初鑄の「政和通宝」〔第90図・11〕は10号土坑より出土している。鉄製品としては2号住居跡より小型鍬先状鉄製品が出土しており、装着部には木質が遺存している。9号住居跡からは刀子〔第90図・14〕と鉄鍬〔第90図・15〕が床面より出土している。この他、獣骨片・獣歯や作業台として使用したと思われる平石等が出土している。

2 弥生時代中期の遺物

a 土器 [第91図～第105図]

今回の調査では竪穴住居跡26軒、環状溝跡を含む溝跡34条、土坑244基、性格不明遺構2基、河川跡を検出した。各遺構とも比較的多量の土器を出土するが、住居跡遺構からの出土が多数を占める。各住居別に出土量は異なり、2・5・12・16号の各住居跡は極めて多く、これに対し9・10・14・22・24・26号の各住居跡は極端に少ない。各住居遺構の時期は概ね弥生時代中期後半に位置するものであり、この住居跡出土土器を中心に器種や器形、文様等についての特徴を概観してみたい。図化し得た土器は実測図224点、拓影149点の計373点を数える。1点を除きすべて弥生時代中期後半の特徴を有する土器群である。器種には壺・甕・台付甕・鉢・甑・蓋・高杯等がある。また器種の不明な土器や住居以外の遺構から出土した土器などについては、その他の項目の中で取り上げた。

壺 口縁部の形態から大きく2種類に分けられる。頸部より口縁部にかけて外反する壺Aと口縁端部を立ち上げ受口状を呈する壺Bがある。壺Aには、口縁部は頸部から緩やかに外反し、文様帯の中心が頸部にあるもの〔A₁:第91図・10〕と、口縁部が急激に外反開口し、頸部と胴部に文様帯の中心があるもの〔A₂:第99図・174〕がある。口唇部には縄文を施している例が多く見られるが、刻みを有する例〔第93図・45〕もある。また指頭によるツマミアゲが併用されているもの〔第102図・282〕もあるが、形態的には他器種の可能性も考えられる。壺Bの受口状口縁部における文様構成は、縄文のみのB₁と、縄文を地文として山形文を施すB₂、および山形文のみのB₃がある。主たる文様は頸部から胴下半部にかけて重点的に施文されている。頸部文様帯は縄文を地文とした後に沈線文で区画する例が多数である。胴部上半部はハケ調整後に若干のミガキを施したままの無文帯となる例が多く見られるが、稀少例として沈線文で区画した中に櫛描直線文あるいは刺突文を充填する例〔第91図・19〕がある。このように胴部上半に文様帯をもつ特徴は古手の要素を継承する土器の一つであろう。該期における文様形態のなかでも特異な例として、「し」字を呈した文様（懸垂文の退化？）を施す壺〔第93図・46〕がある。また壺形を呈す唯一の注口土器が1点出土しており、注口付壺形土器〔第92図・38〕として扱った。表全面および内面の口縁部それぞれに赤色塗彩を施し、口唇部には2単位の小突起を4ヶ所に配している。注口部分と底部は欠損している。この他底部に靱痕が認められる壺〔第102図・265〕等がある。

甕 壺とほぼ同様に口縁部の形態等から、頸部より単純に外反する甕Aと、口縁端部を立ち上げ受口状を呈す甕Bの大きく2種類に分類し得る。口唇部に縄文を施文するA₁が量的には主体となるが、指頭によるツマミアゲを併用するA₂〔第92図・23等〕や、指頭によるツマミアゲのみのA₃〔第97図・123等〕がある。甕Bにおいても口縁部に縄文のみを施すB₁と、縄文を地文として山形文を施すB₂がある。頸部文様帯は櫛描直線文・櫛描波状文を施文する例が多いが、無文で直接胴部文様帯へと至る例もある。胴部形態は頸部から大きく張り出すものと、頸部より単純に底部に至るものがある。胴部文様帯は主に櫛描羽状文（横羽状・縦羽状）が大半を占めるが、他に櫛描波状文または櫛描直線文を縦位に施文区画した中に櫛描波状文を施す例〔第101図・245〕や、縄文のみの例〔第94図・64〕、「コ」字重ね文を施すもの〔第97図・128〕もある。

台付甕 全体的に小型である。口縁部形態は単純口縁となる台付甕A〔第95図・86等〕と、受口状口縁を呈する台付甕B〔第99図・182〕とがあり、口唇部には縄文が施される。胴部文様帯には櫛描羽状文・櫛描波状文、またこの器種に多く見られる「コ」字重ね文など、文様帯の構成は甕と同様と考えてよいであろう。

鉢 赤色塗彩の有無で大きく2種類に分かれる。赤彩されたものには単純口縁になる鉢Aと、甕と同様頸部に若干のくびれを持ち口縁部が外反する鉢Bや、受け口状を呈する鉢Cがある。口縁部には1ないし2つの小孔

を有し、外反した口唇部には4～6単位で小突起または稜をもつものも見られる。無彩のものには、口縁部が内湾して縄文を施しているもの〔第92図・33等〕や、底部に1孔を有する小型の鉢〔第97図・131〕も見られる。また底部に靱痕の認められる鉢〔第97図・129〕や、木葉痕が見られる鉢〔第102図・272〕がある。

甗 主に底部に1孔を有する。4点を図化し得たが全て底部のみであるため、全体の様子が分かるものは1点もなかった。櫛描羽状文が施文された甗の底部に孔の穿たれた甗〔第99図・190〕が見られるが、これは焼成後に穿孔されている。また底部が欠損しているため細部については不明であるが、甗の可能性のある甗〔第97図・130〕もある。

蓋 4点を図化した。第92図・37の口縁部には2孔穿たれ対をなしている。中央につまみを持ち、表面には赤彩の痕跡が残る。また表面に縄文と沈線文を施している例〔第104図・358〕も見られるが、この例も口縁部に2孔穿たれており対をなす可能性がある。平蓋でつまみは持たない。

高杯 高杯と思われる脚部3点〔第98図・158、第100図・197、第104図・338〕を図化した。全て赤彩され、脚部は短く全体的に小型と思われる。また鉢として扱った資料にも高杯の杯部となるものがあると考えられる。

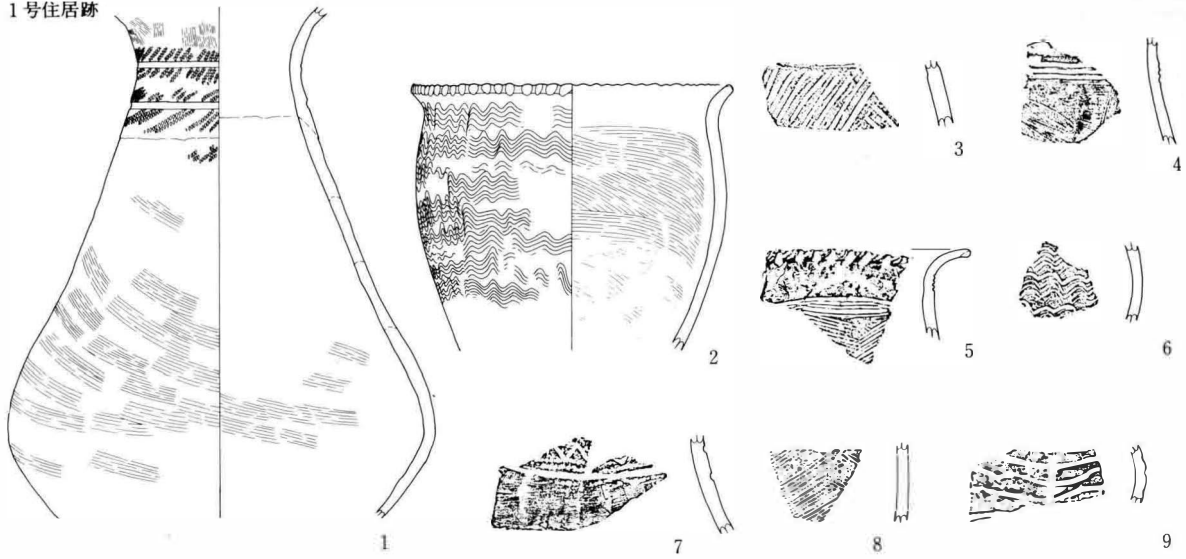
その他 器種不明のものが3点ある。特殊な形態を呈する鉢と考えることもできるが、赤彩され胴部に段を持つもの〔第94図・70〕と、同じく赤彩され頸部に1孔（破片が小さく残存状況も悪いため、2孔となる可能性もある）を有し胴部に段を持つもの〔第104図・335〕、内外面共に丁寧なミガキを施しているもの〔第94図・72〕などである。いずれにしても善光寺平における該期の土器系譜としては考えにくいいため、現時点での明確な位置付けは避けておくとともに、今後の資料増大を待ちたい。また第105図中の土器はいずれも住居跡以外の遺構（28号土坑、河川跡、1号性格不明遺構）から出土したものである。河川跡からは後期（箱清水式）の甗〔第105図・369〕が出土し、1号性格不明遺構からは胴部に1孔を有する壺〔第105図・370〕が出土している。また僅少ではあるが外来系の影響を受けた土器が数点見られる。12号住居跡出土甗〔第97図・123〕の土器形態は、北陸の小松式からの影響も想定できよう。

b 土製品〔第106図〕

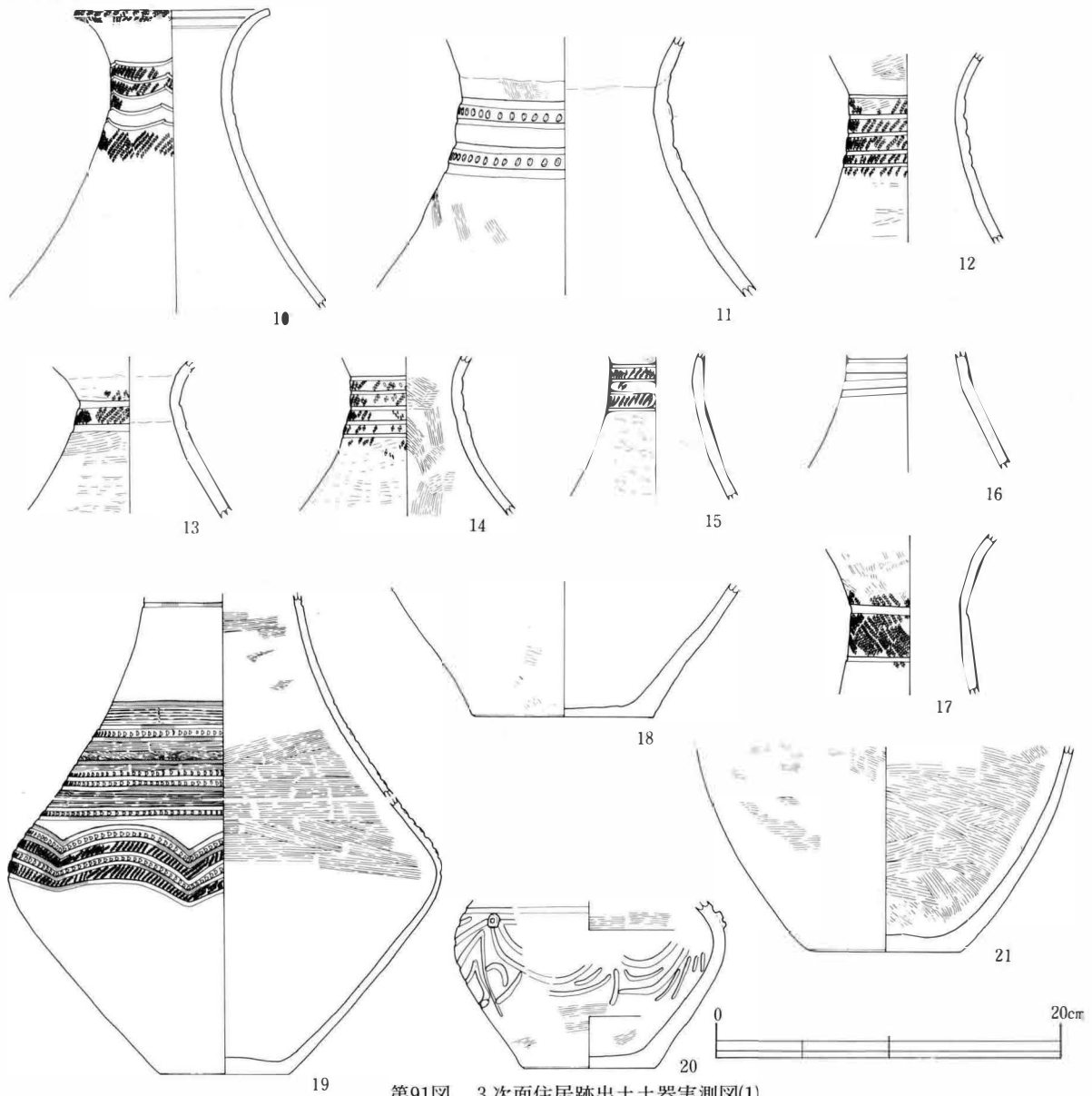
ミニチュア土器 2・5・16・20・24号の各住居跡から8個体が出土し、その全てを図化した。器台の形を呈し、くびれの部分に粘土紐を巻き付けているもの〔第106図・2〕や、8個体中唯一文様を持ち口縁部から頸部にかけて不規則な細い沈線文を施しているもの〔第106図・5〕などがある。

有孔円板・円板状土製品 破片等も含め総数86点を数える。遺構としては住居跡からの出土が多く、16・20・25号の各住居跡からの出土が特に多い。残りの良いもの13点を図化した。甗の破損品を再利用したものが大半であるが、鉢の破損品と思われる赤彩を施しているものも多く見られた。全面に赤彩を施し、再利用ではなく意図的に製作したもの〔第106図・17〕が1点だけ出土した。紡錘車として利用したものであろうか。甗破片の再利用品で文様を有するものは櫛描羽状文〔第106図・9、12〕と、櫛描波状文〔第106図・15、16〕が圧倒的に多い。このほか壺の胴部破片や土器底部を利用したものがある。

1号住居跡



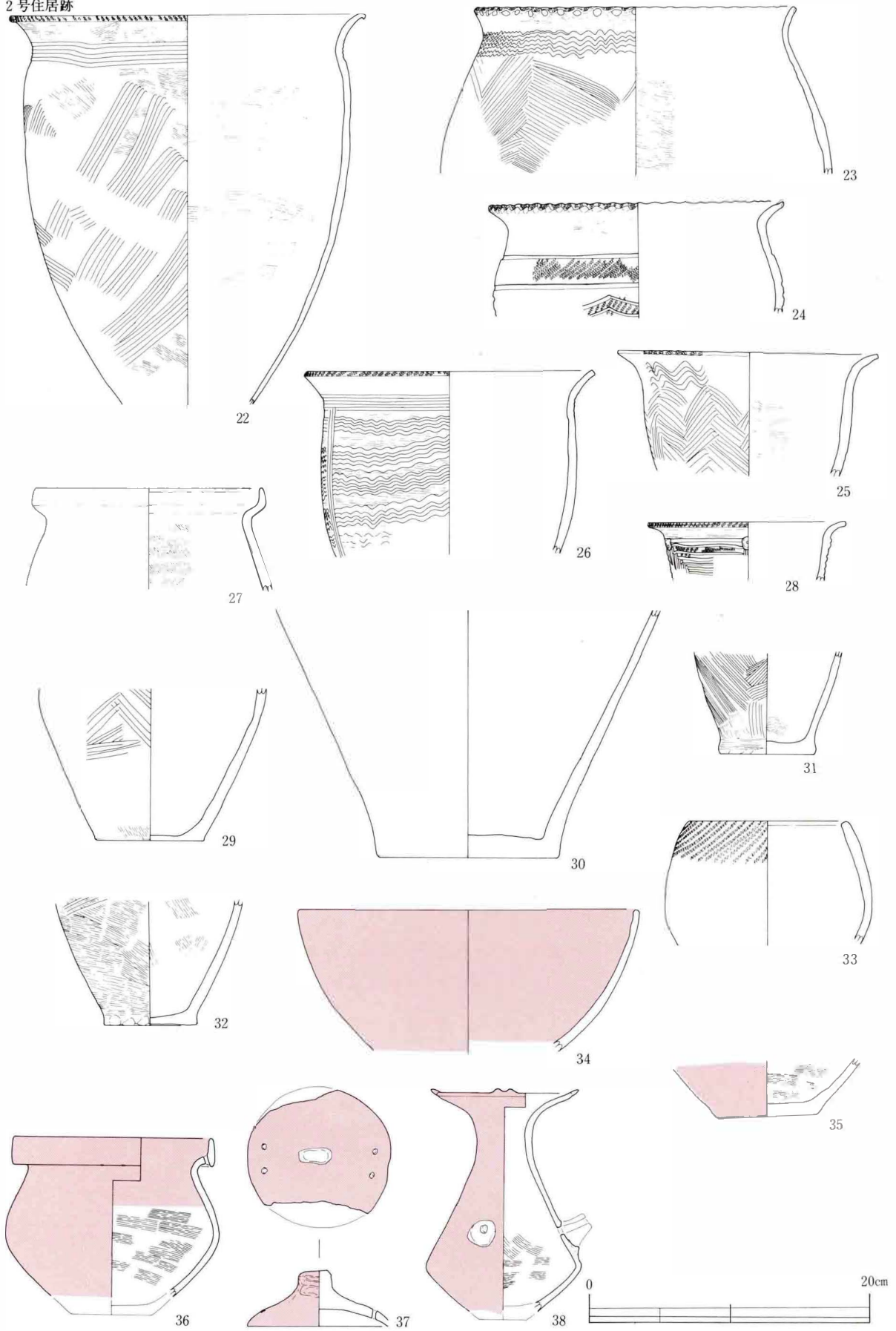
2号住居跡



第91図 3次面住居跡出土土器実測図(1)

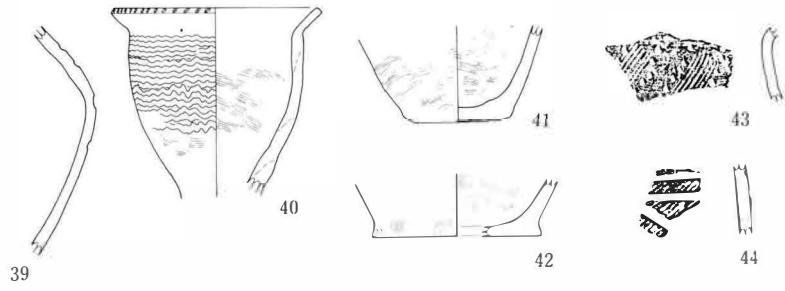
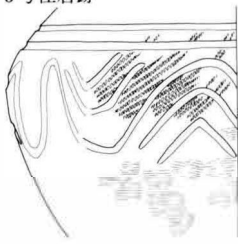
19のみ1/6

2号住居跡

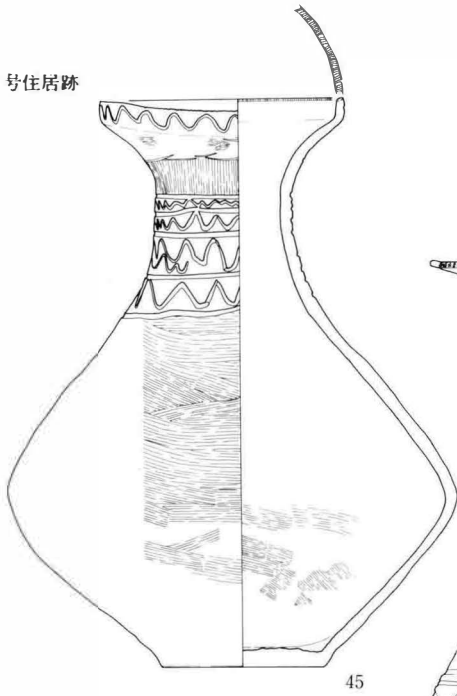


第92图 3次面住居跡出土土器実測图(2)

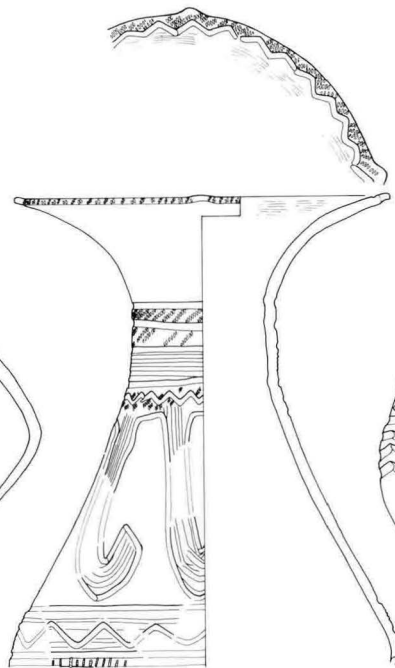
3号住居跡



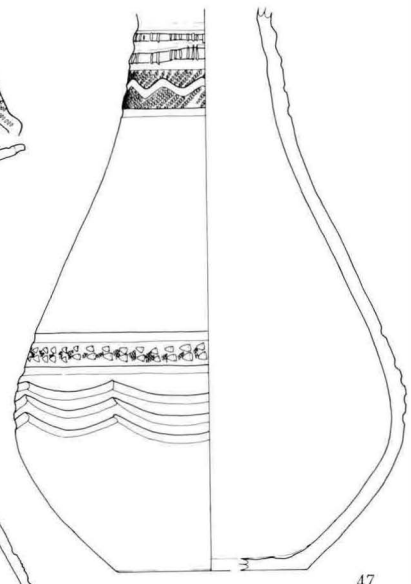
5号住居跡



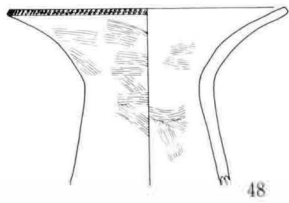
45



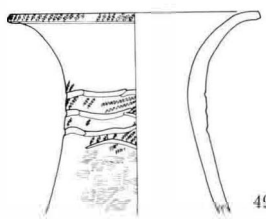
46



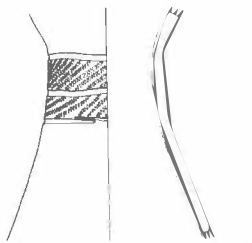
47



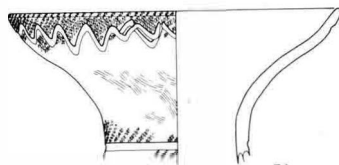
48



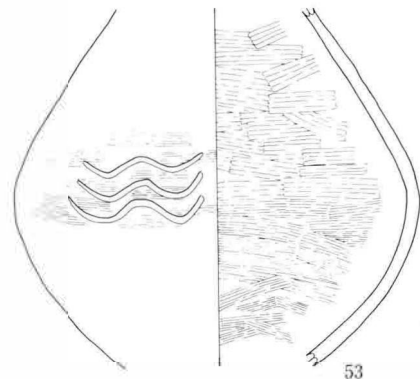
49



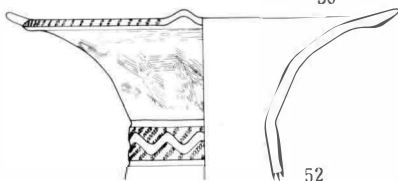
50



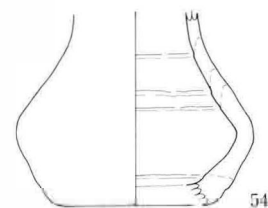
51



53



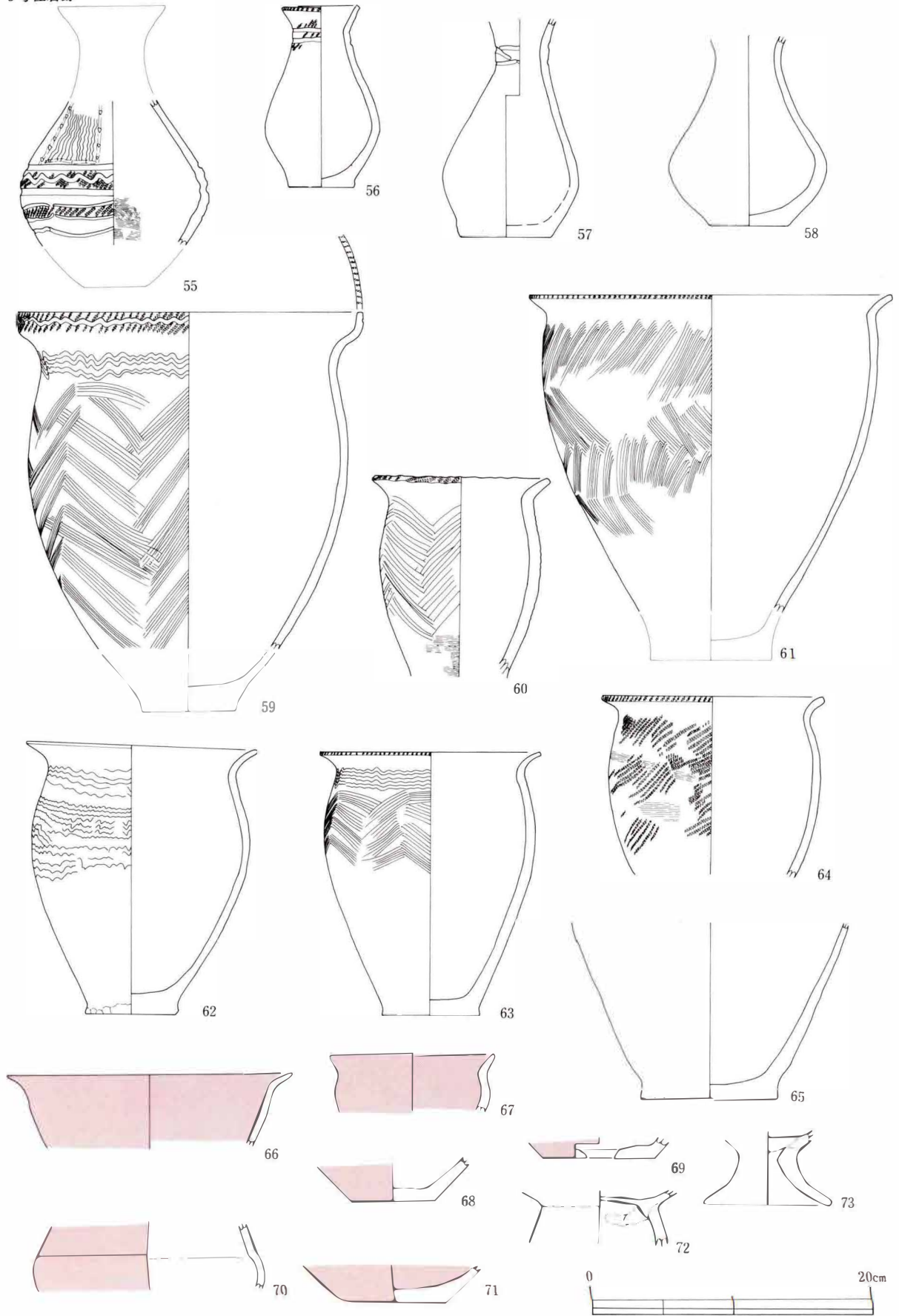
52



54

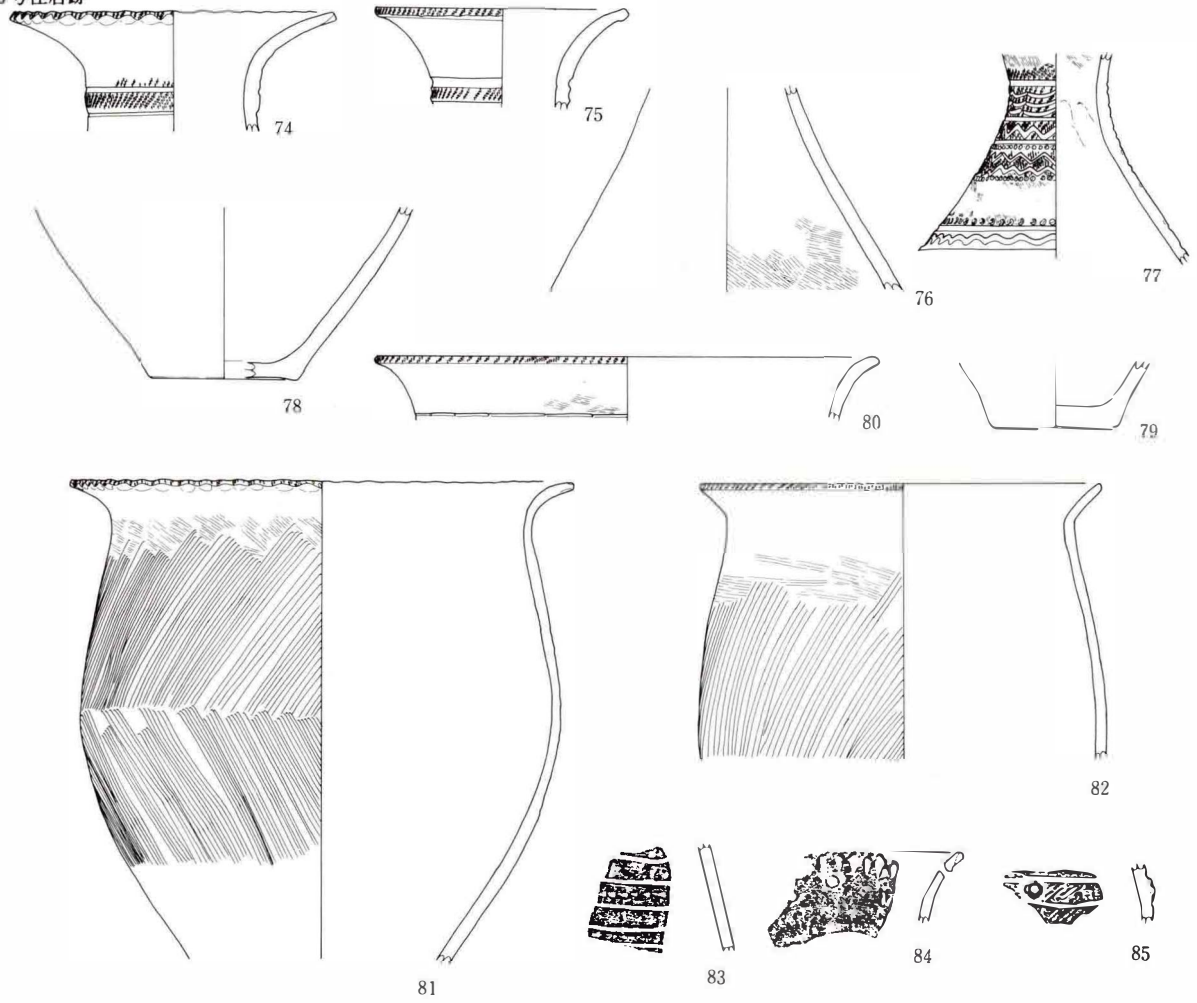
第93図 3次面住居跡出土土器実測図(3) 45のみ1/6

5号住居跡

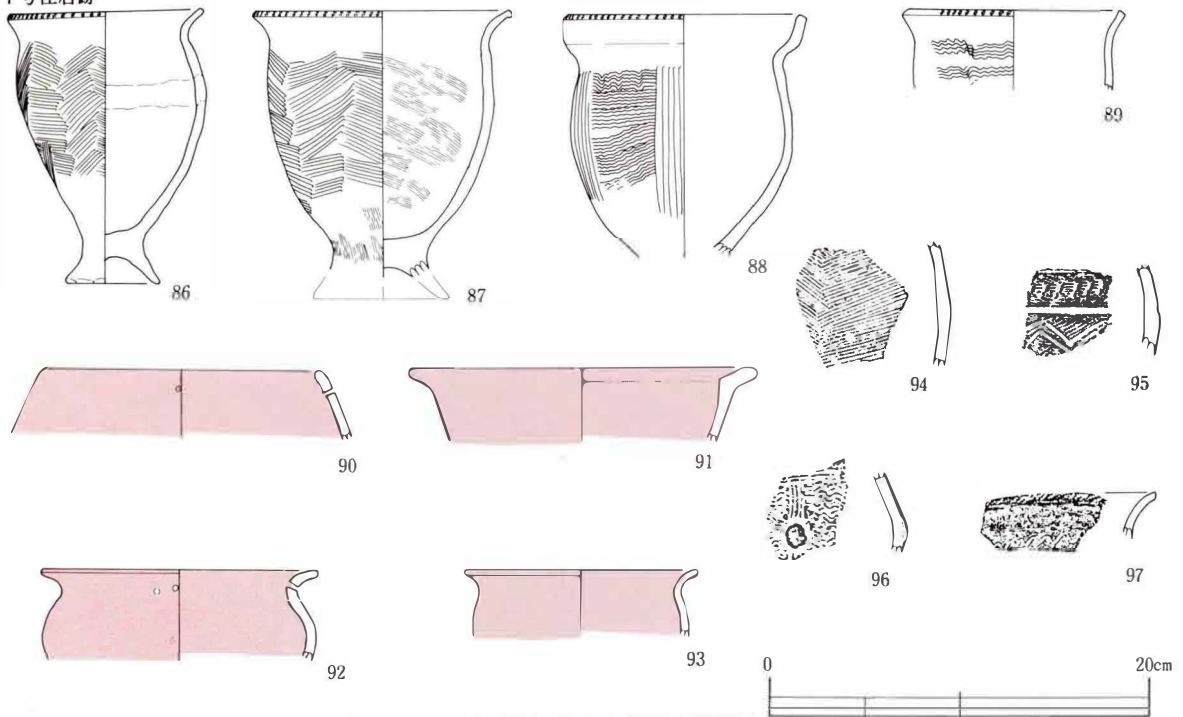


第94图 3次面住居跡出土土器实测图(4)

6号住居跡

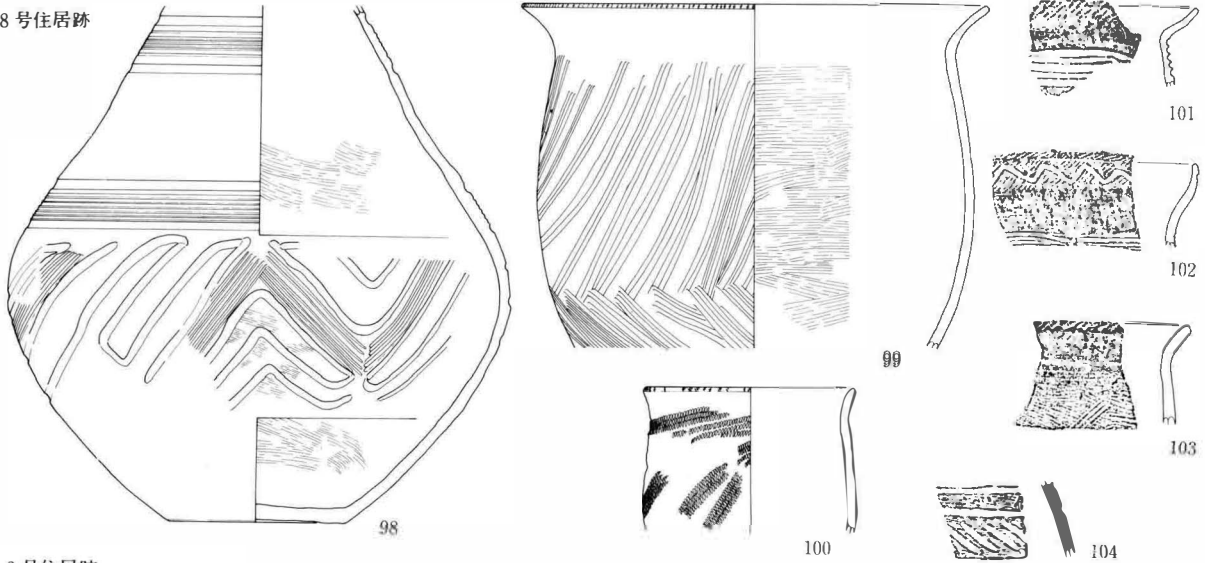


7号住居跡

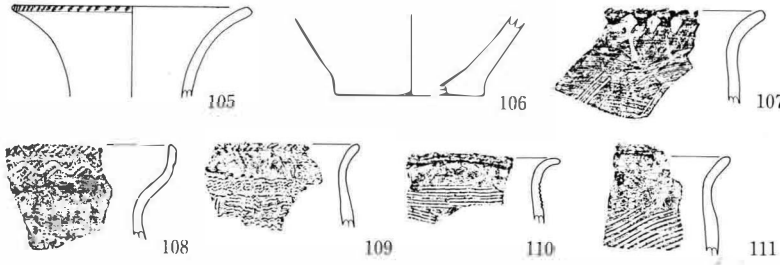


第95図 3次面住居跡出土土器実測図(5)

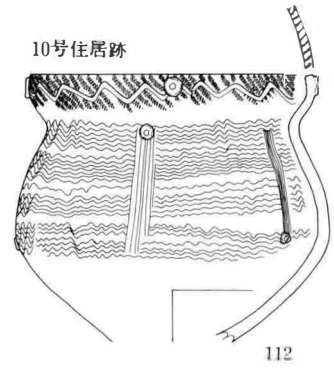
8号住居跡



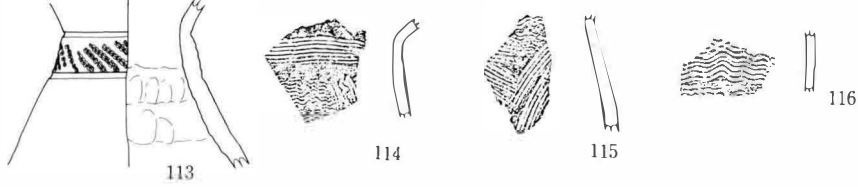
9号住居跡



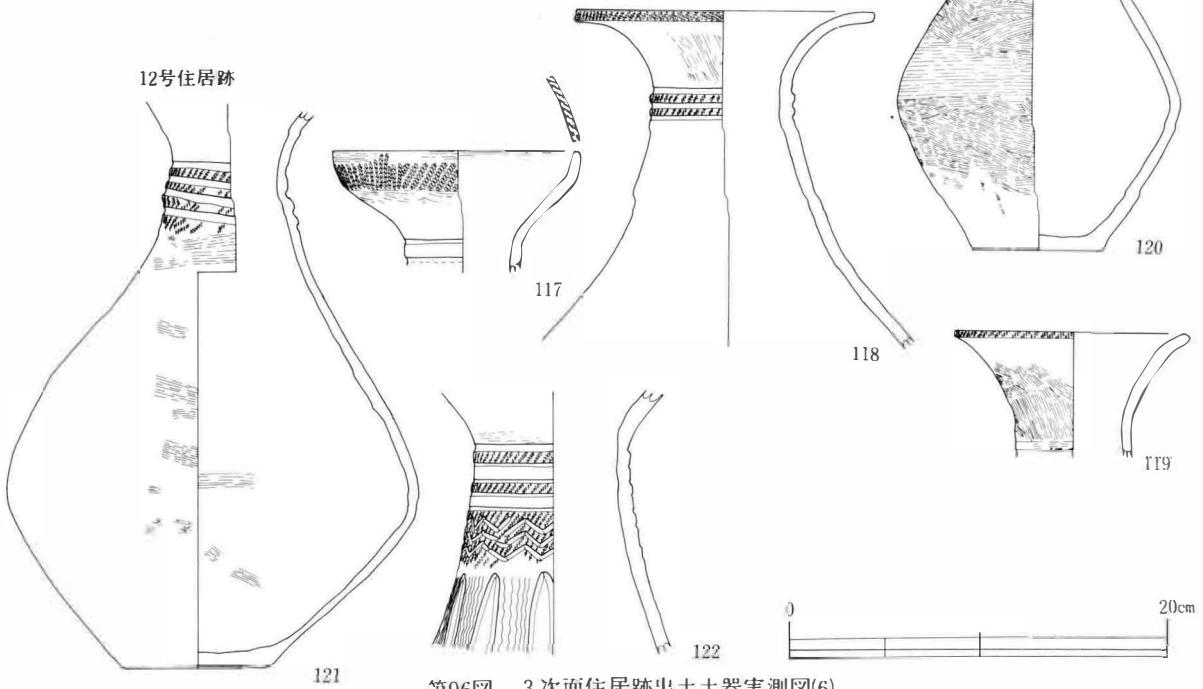
10号住居跡



11号住居跡

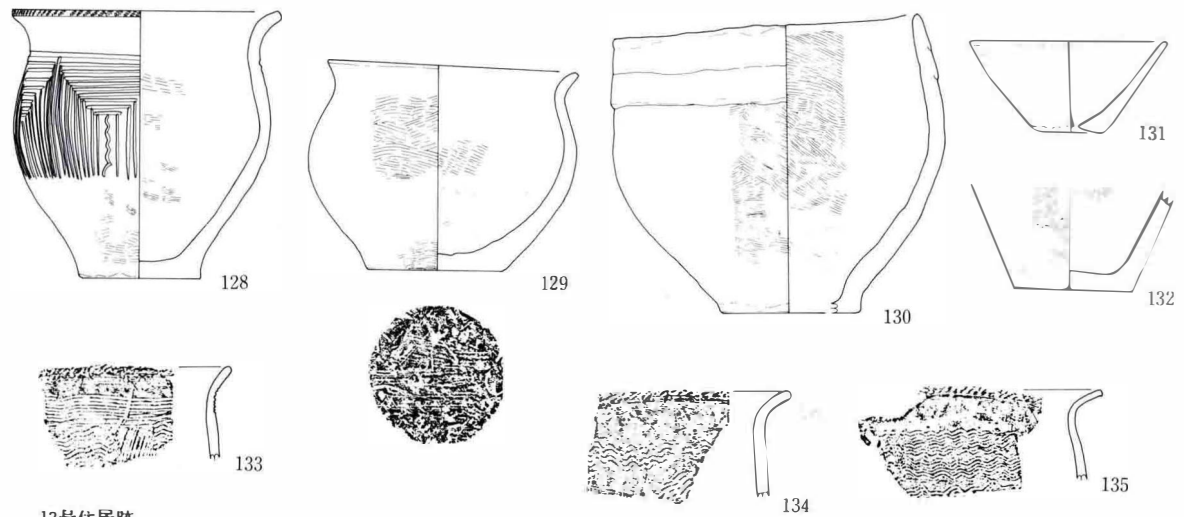
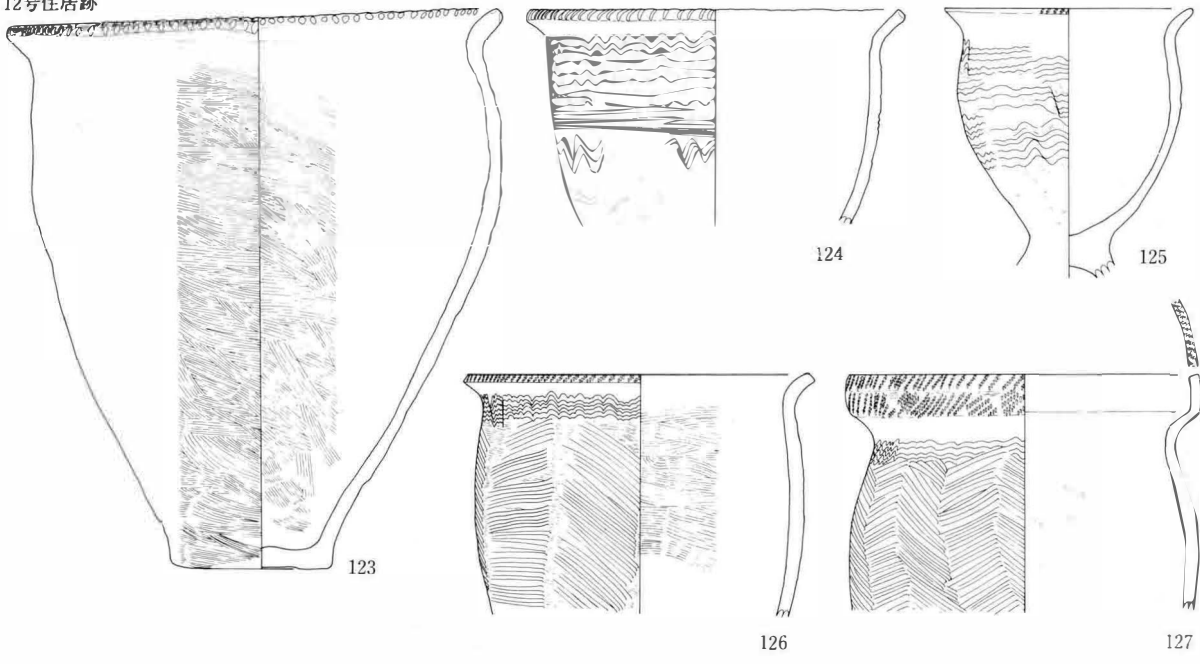


12号住居跡

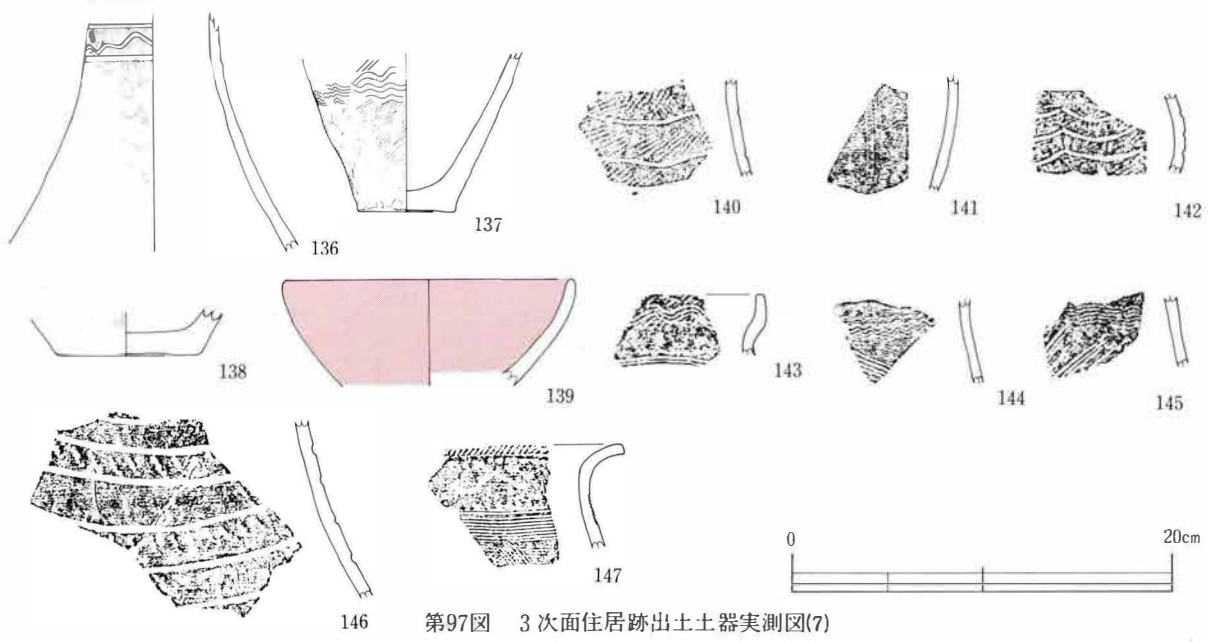


第96图 3次面住居跡出土土器実測图(6)

12号住居跡

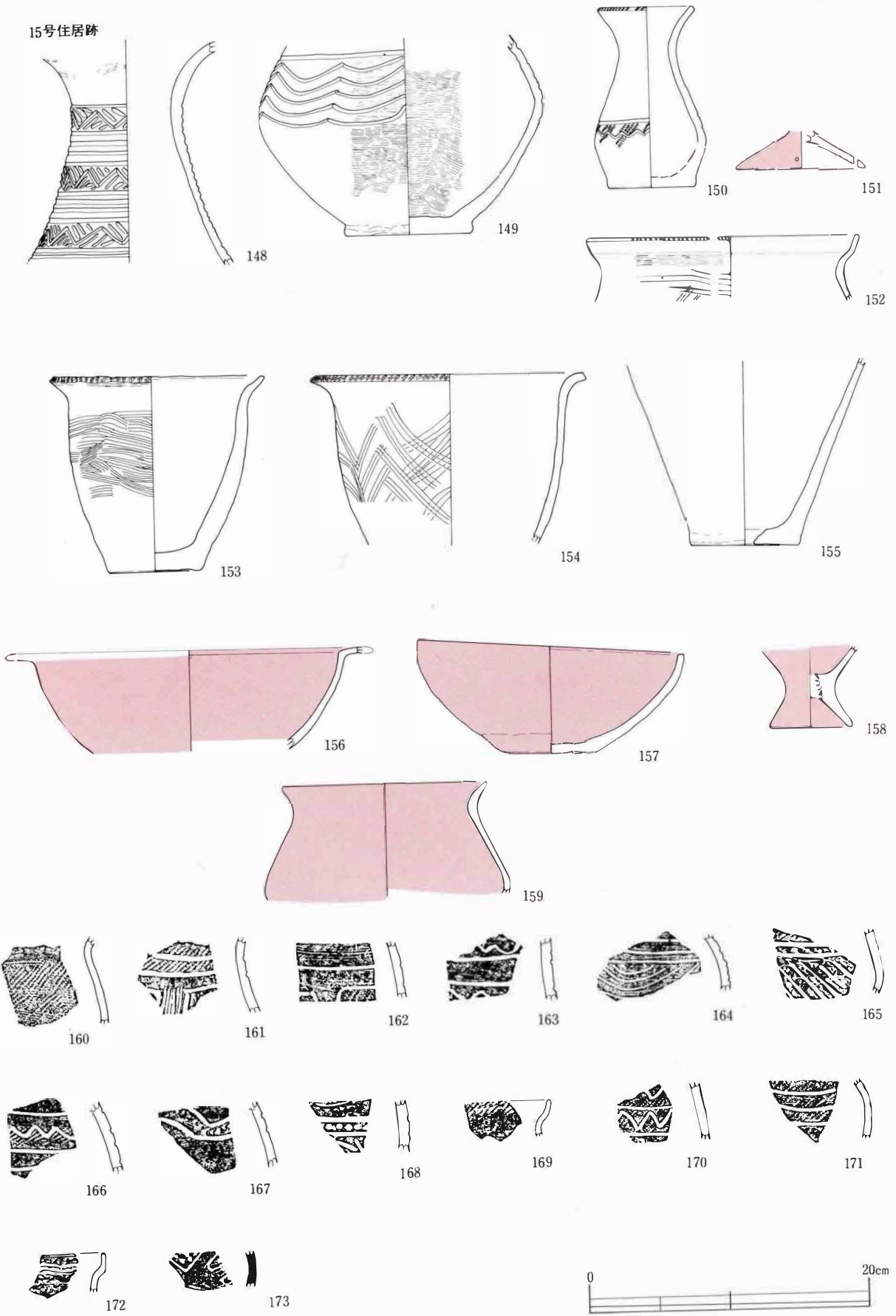


13号住居跡

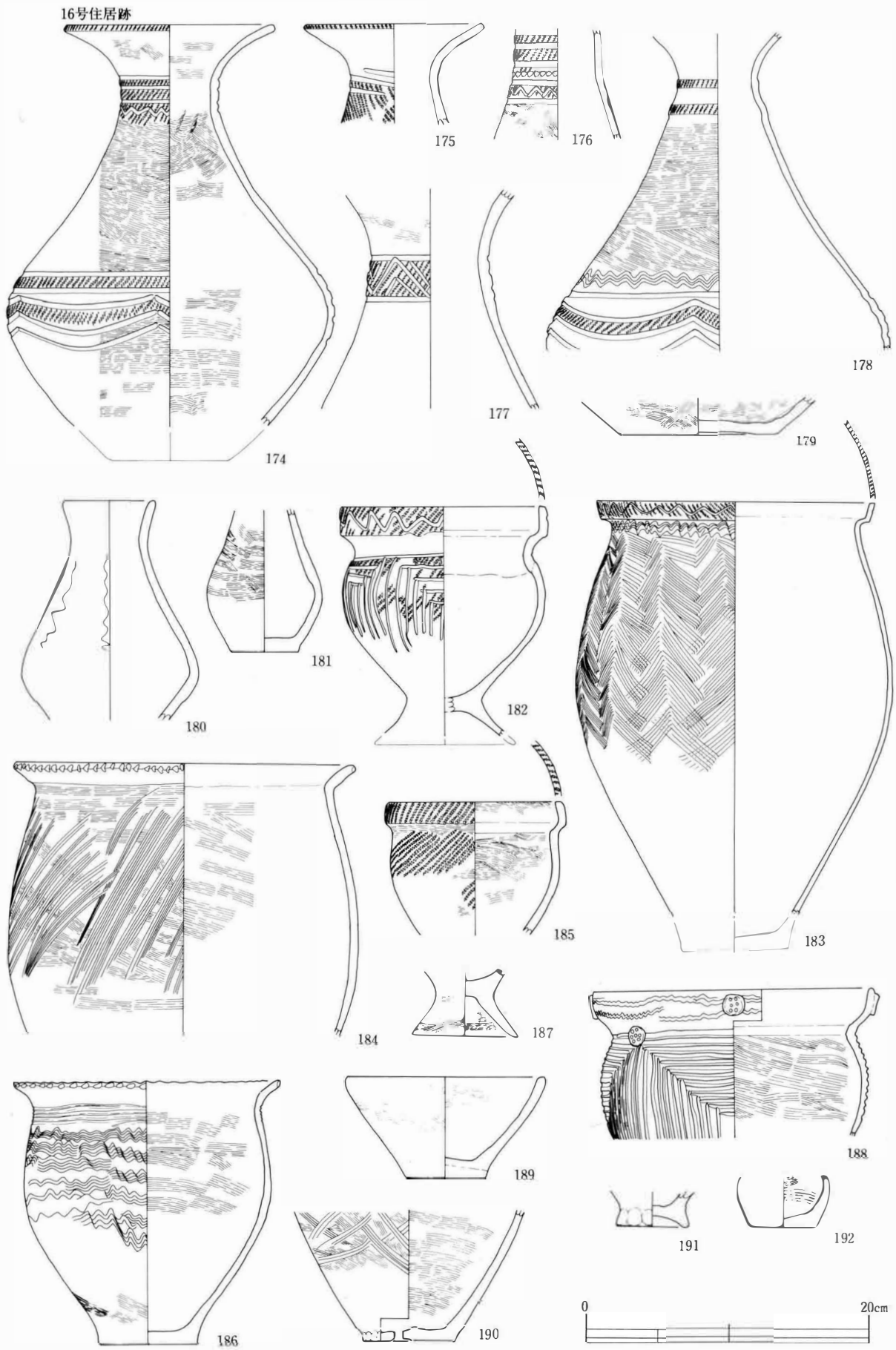


第97图 3次面住居跡出土土器実測図(7)

15号住居跡

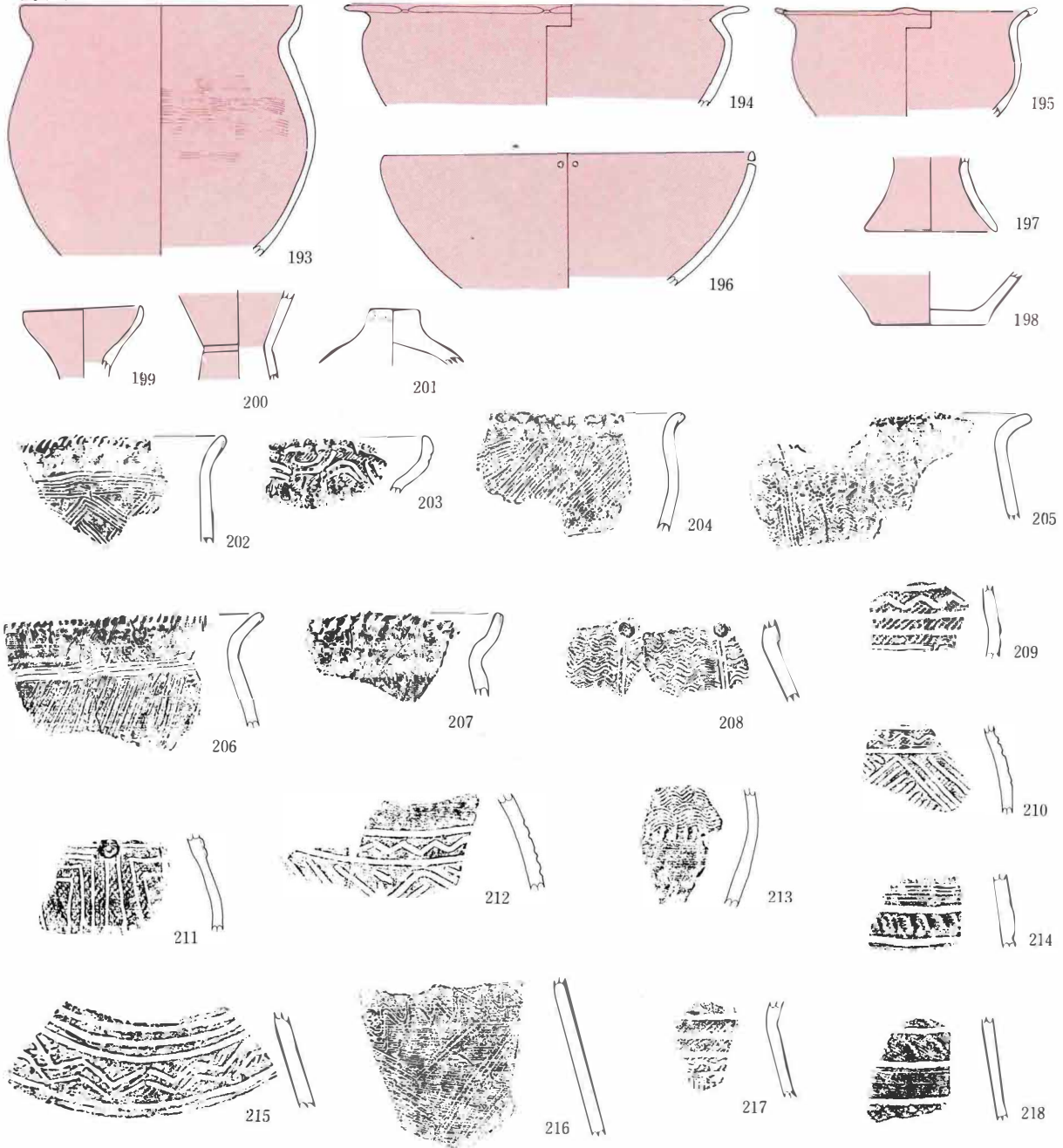


第98图 3次面住居跡出土土器実測图(8)

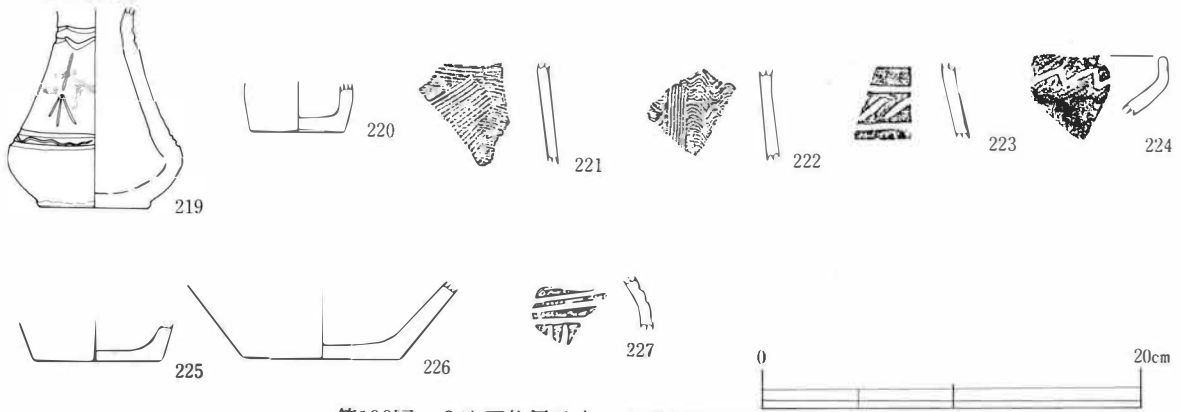


第99図 3次面住居跡出土土器実測図(9)
183のみ1/6

16号住居跡

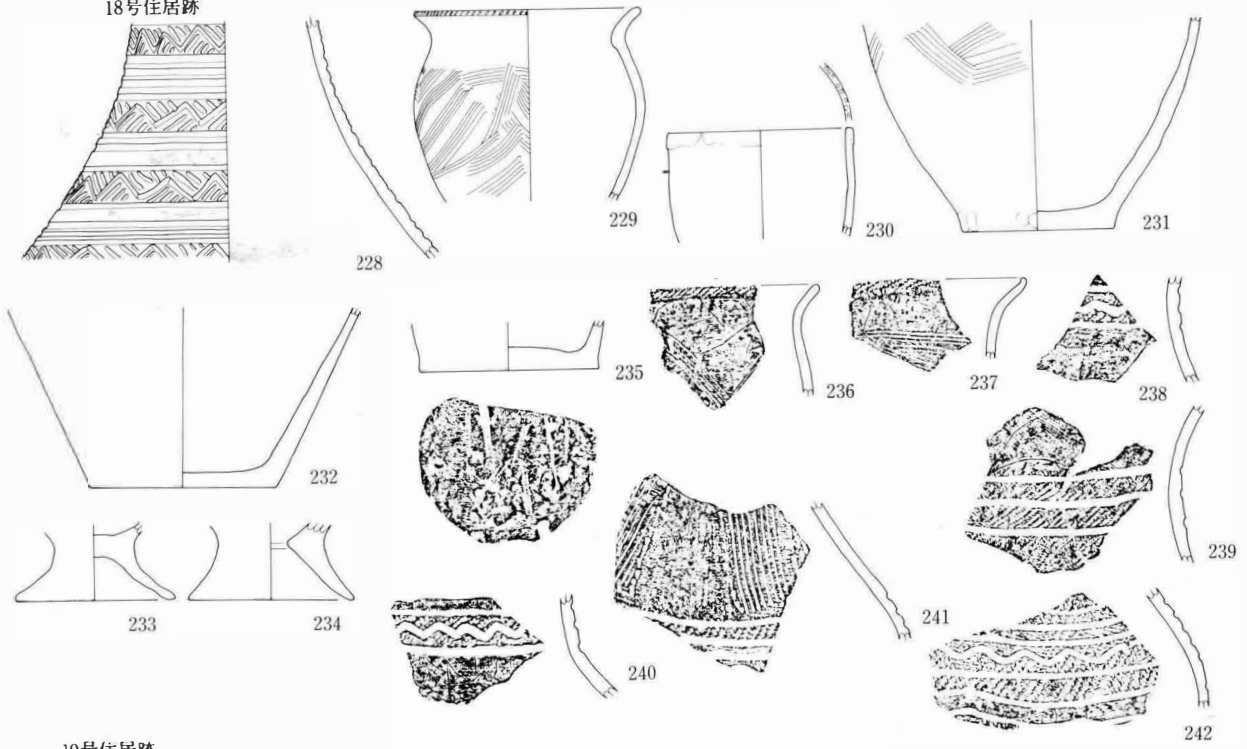


17号住居跡

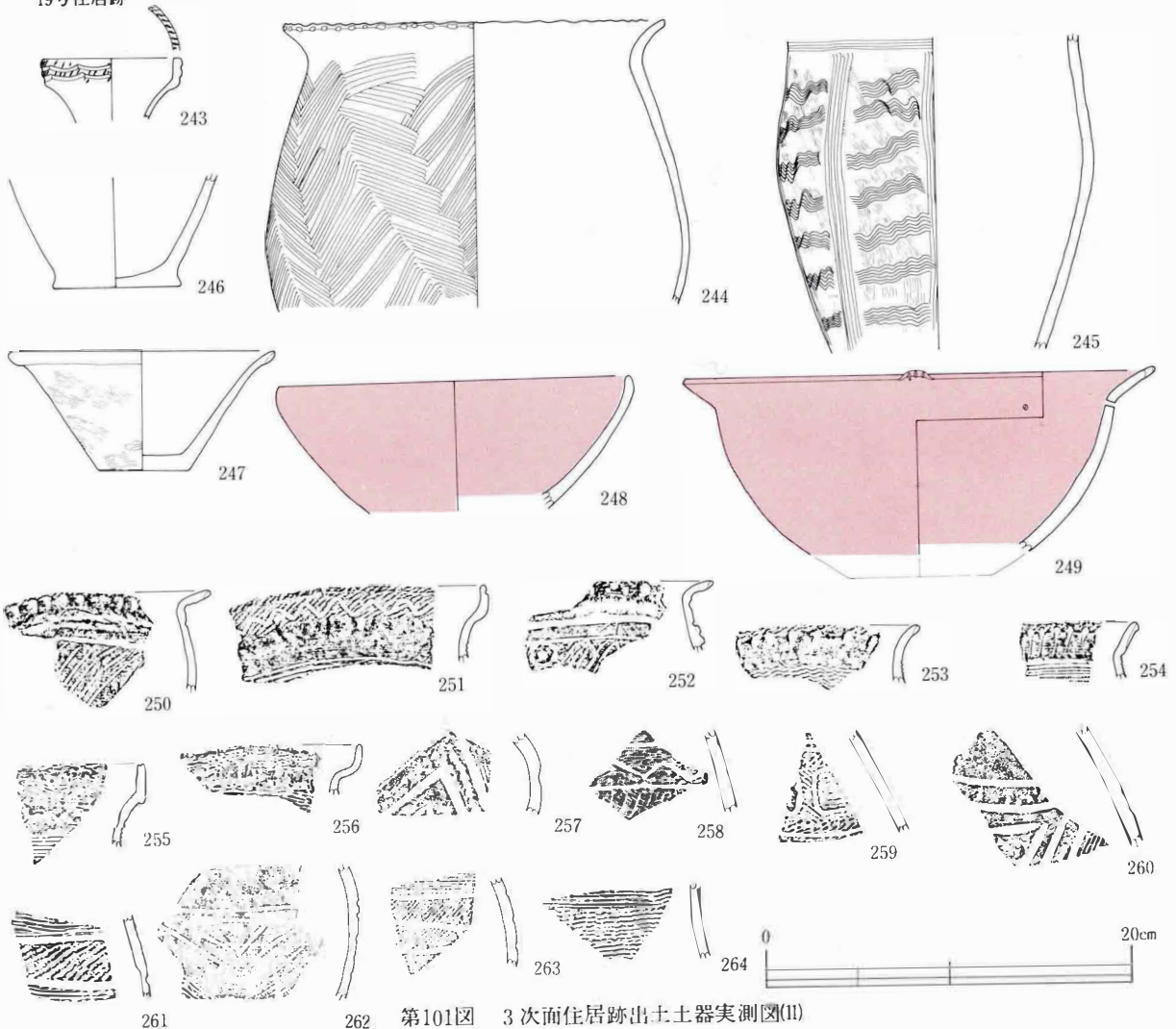


第100图 3次面住居跡出土土器実測图(10)

18号住居跡

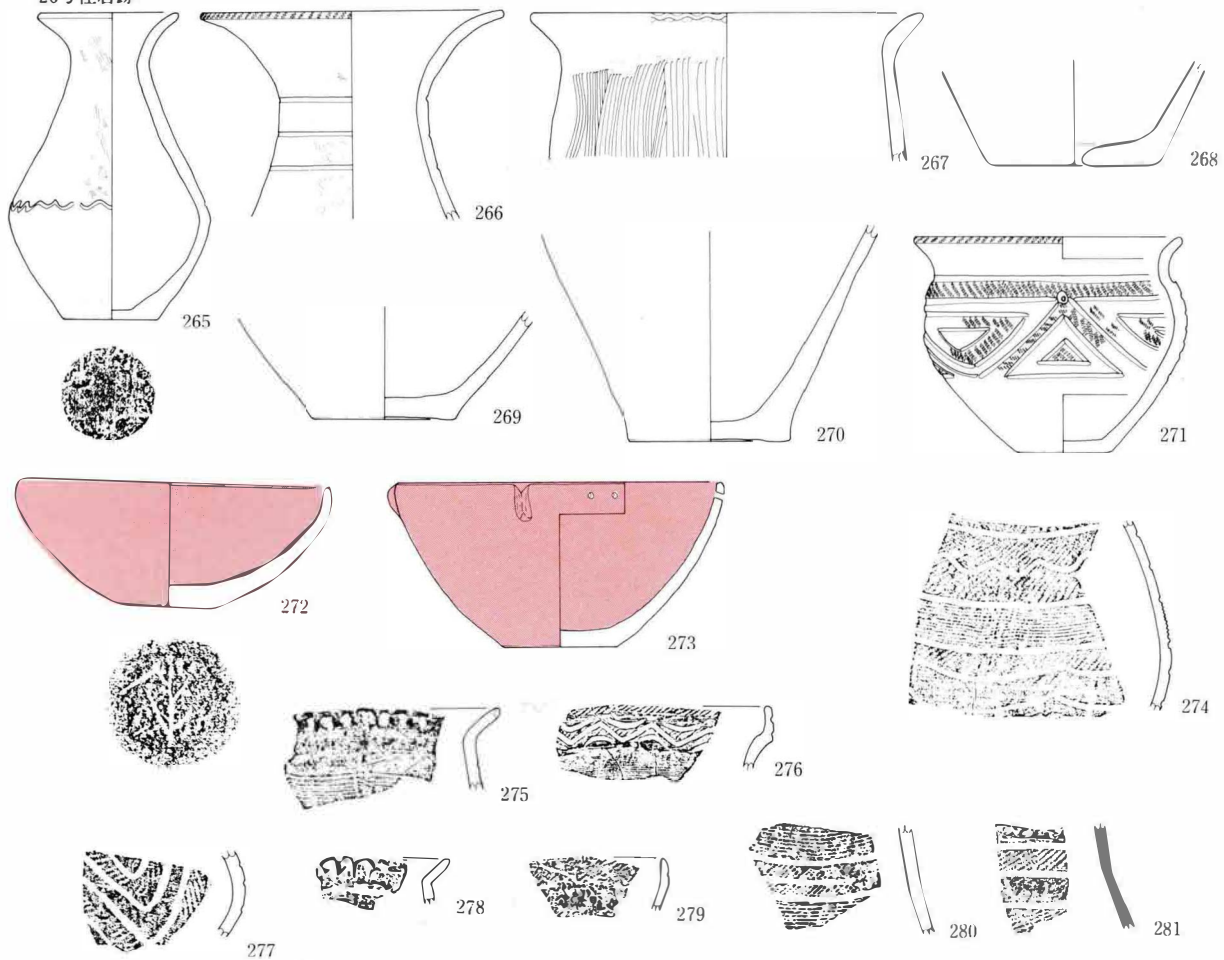


19号住居跡

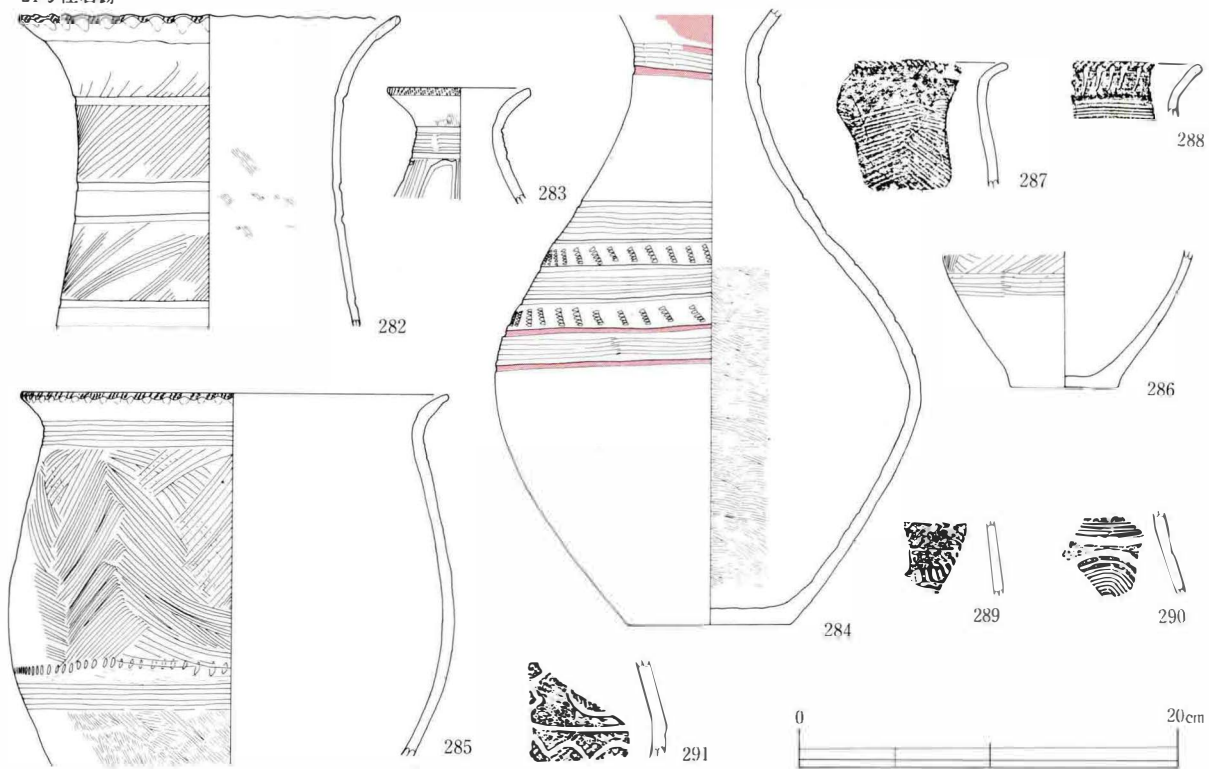


第101图 3次面住居跡出土土器実測图(II)

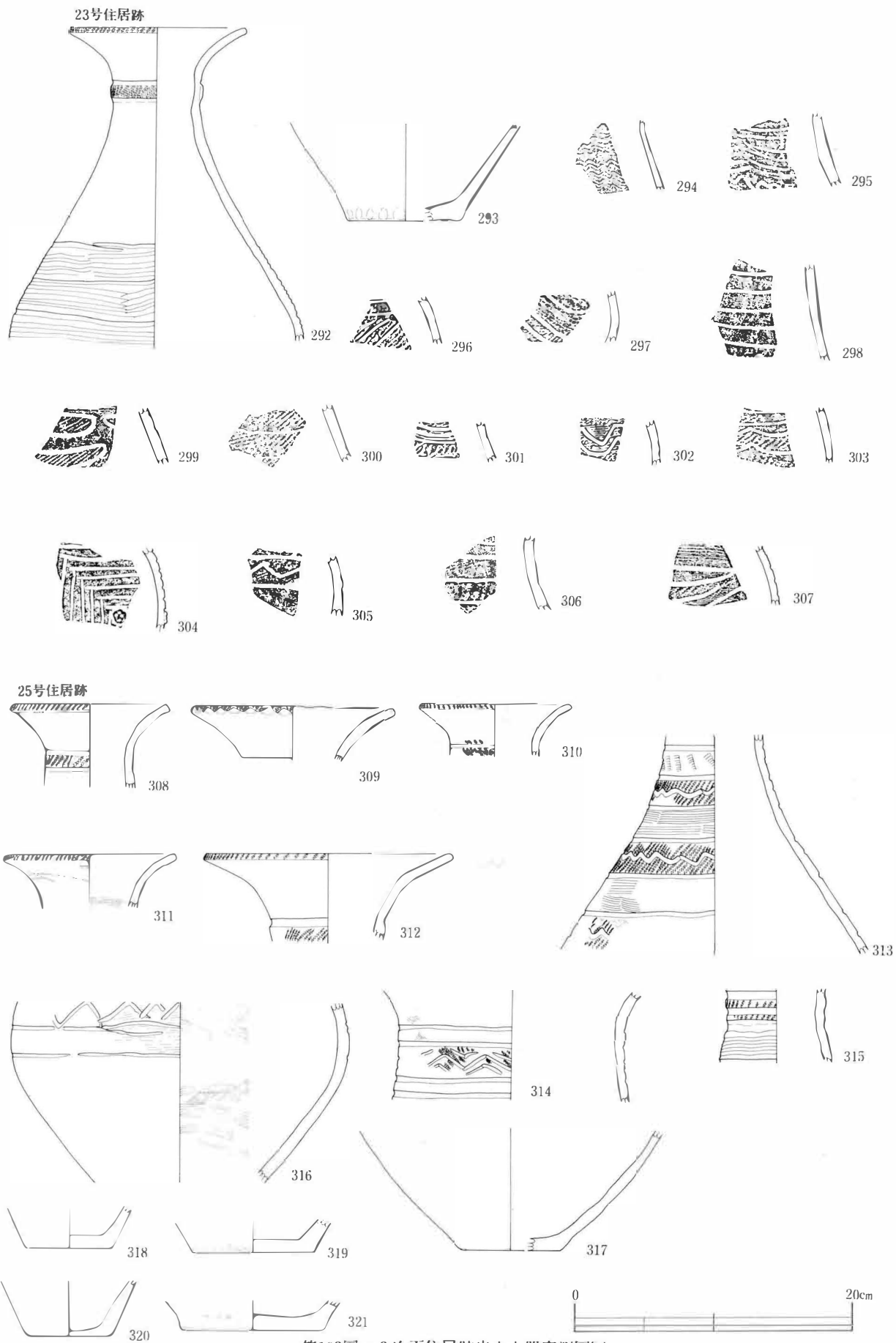
20号住居跡



21号住居跡

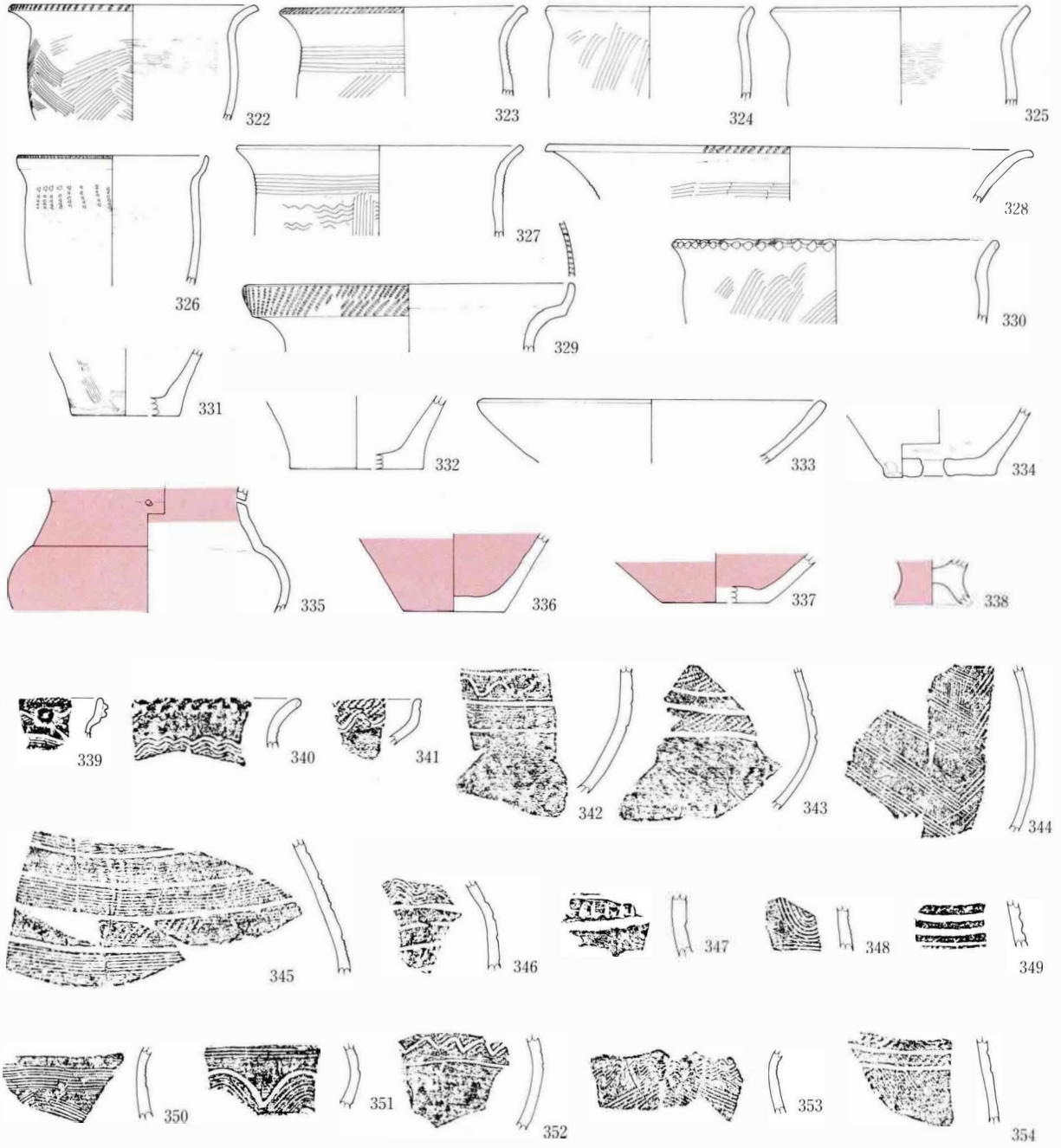


第102图 3次面住居跡出土土器実測图(2)

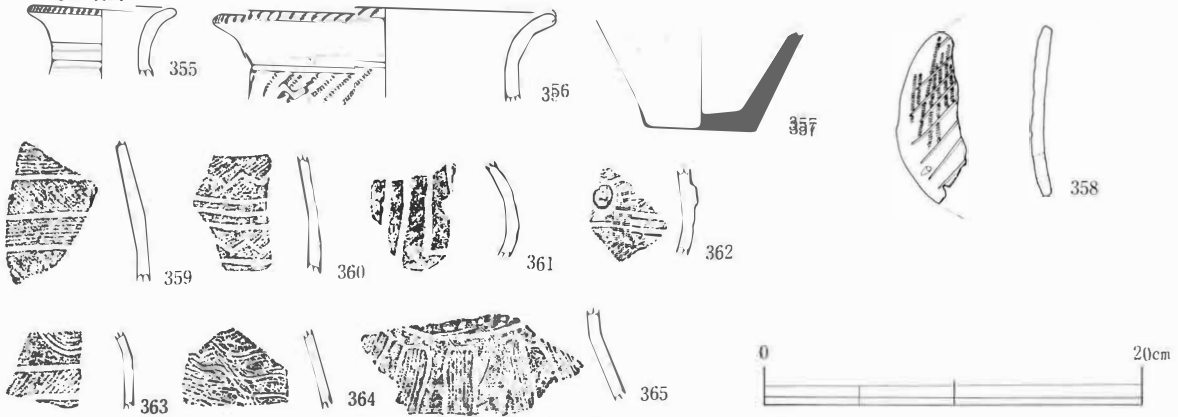


第103图 3次面住居跡出土土器実測图(13)

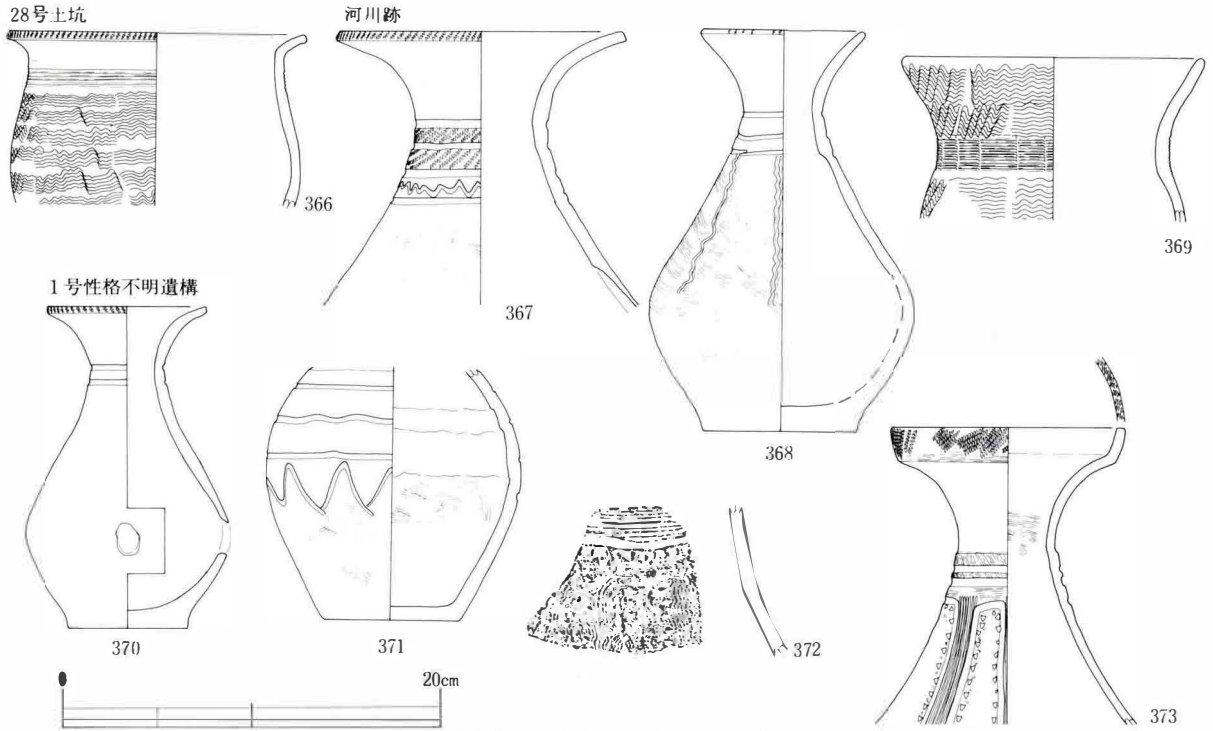
25号住居跡



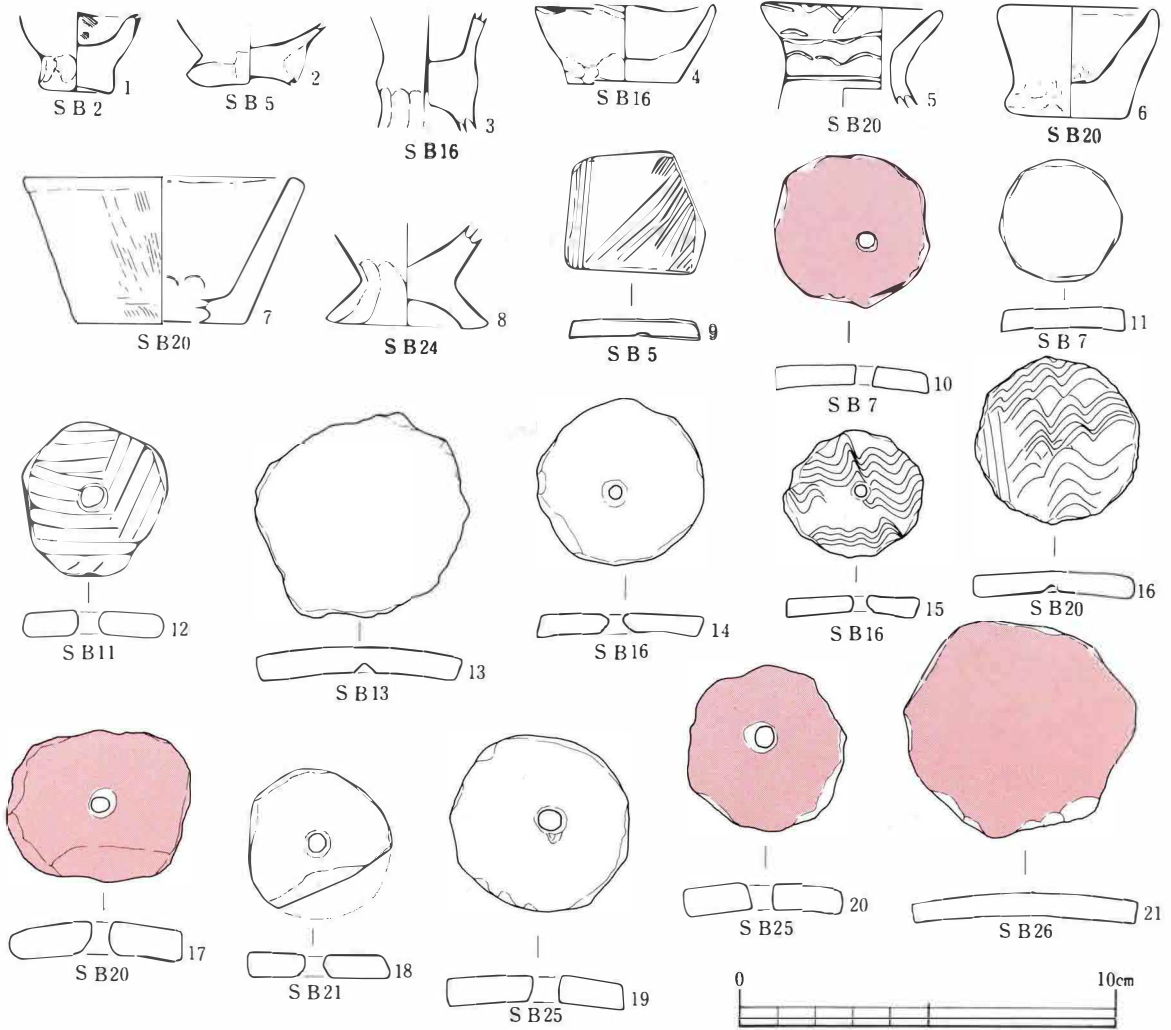
26号住居跡



第104图 3次面住居跡出土土器実測图(14)



第105図 3次面出土土器実測図(15)



第106図 3次面出土ミニチュア土器・有孔円板・円板状土製品実測図

C 石器・石製品

久保勝正（三重県立斎宮歴史博物館主事）

1. はじめに

石器・石製品類は2755点出土した（第2表）。その内訳は、打製石鏃89点、同未製品9点、石錐40点、スクレイパー23点、楔形石器66点、二次加工痕有剥片141点、使用痕有剥片116点、石核50点、剥片・碎片2075点、打製石斧1点、礫器1点、敲石4点、石皿1点、釣針形石製品1点、異形石器1点、部分磨製石器17点、磨製石鏃14点、同未製品13点、大型蛤刃石器3点、扁平片刃石斧20点、同未製品6点、磨製石庖丁7点、同未製品5点、磨製石斧・石器片20点、砥石9点、浮子1点、ミガキ石3点、基石形石製品2点、小型磨製石製品1点、石戈1点、管玉13点、水晶1点、不明品1点である。以下器種ごとに形態記述を行う。石戈、管玉については後節で記述している。

2. 遺物

打製石鏃（1～71） 住居跡番号順に並べてある。無茎鏃28（黒曜石）の1点を除いて全て有茎鏃である。有茎鏃は基部の形態により、①平基、②凹基、③凸基、④その他（①～③の組合せ）に、側縁とこれに規制される身部形態により、(a)長身細身で先端部が直線的、中央部から基部にかけて内湾（稀に直線）ぎみのもの、(b)側縁が直線的で、身部が二等辺三角形のもの、(c)側縁が緩く外湾し、身部が二等辺三角形のもの、(d)側縁が直線的で、身部が正三角形のもの、(e)側縁が緩く外湾し、身部が正三角形のもの、にそれぞれ大別できる。そしてこれらの組合せによって特徴の大枠を捉えられよう。製品89点の石質をみると、多い順に黒曜石42点（47%）、珪質頁岩30点（34%）、チャート11点（12%）、珪質凝灰岩2点（2%）、石英質安山岩2点（2%）、黒色粘板岩1点（1%）、頁岩1点（1%）となり、黒曜石、珪質頁岩の利用度が高い。ここでは個々については触れず、特徴的な類型についてのみ記述するに留めたい。まず、各類型のなかで最も斉一性のあるものは、①-(a)類（2・8・14・33・66）、②-(a)類（4・6・26・27・60・70）で、これらに使用される石材はいずれも珪質頁岩・チャートに限定され、黒曜石は用いられていない。一方、②-(c)類（9・16・17・19・29）は、全て黒曜石製で他の石材は存在しない。概して黒曜石製は他に比して小型で、1・11・20・23・31・51～56などもそうした部類である。③-(b)類の37・42はともに石英質安山岩（いわゆる下呂石）製で、同質の石材は本遺跡ではこの2点以外見あたらない。また、①-(b)類の35は黒曜石の中で唯一漆黒色を呈するもので、同色の剥片類もない。他方、技術的な面をみると、大部分は調整加工が全面に及ぶもので、周縁加工のみの38（黒色粘板岩）・48（チャート）、素材剥片の末端部を未調整で先端部に用いた加工度の低い41（珪質凝灰岩）などの部分加工手法によるものは僅かである。

石錐（72～75） 素材に対する加工度・形態により、①全面またはほぼ全面に加工を施す棒状のもの、②部分加工（剝離・折り取り）で三角形・台形状のもの、③機能部以外に加工を施さず素材の形状を大きく残すものに、機能部の箇所により(a)1箇所のもの、(b)2箇所のもの、に分けられる。石錐の大部分は、機能部が磨耗して鈍くなっており、なかには明瞭な線状痕を残すものも多々ある。①-(a)類の72と73は、チャート製で同一母岩である。74（②-(b)類）は珪質凝灰岩製で形態を台形に整え、機能部を2箇所設定したものである。75（②-(b)類）は黒色粘板岩製で、1側縁片面加工により三角形を呈す。石錐は①-(a)類が多く、次に②-(b)類が多い。石質はチャート・黒色粘板岩・珪質頁岩・珪質凝灰岩で構成され、黒曜石は使用されていない。

楔形石器（76・77） 図示した2点は共に珪質頁岩で、相対する2辺、或いは上下・左右の4辺に細かな剝離痕や奥に延びる剝離痕を残す。素材はほとんどが剥片で残核を利用するものは僅かである。石質は限定されない。

スクレイパー（78～80・85） 縁辺に連続して安定した刃部を形成するものを一括した。78は珪質頁岩製で、

素材末端部に急斜度の刃部を形成する。また、腹面右側には微小剥離痕を留める1枚の剥離面からなる刃部をもつ。打面側は折れ面である。79はチャート製で素材末端部に加工を施す。右側縁には連続した微小剥離痕が残っていることから、末端部への加工を刃部としてではなく、右側縁のサポート的なものと見做すこともできるが、ここでは打面側の折れ面を重視し、右側縁同様刃部と認定しておきたい。78・79とも打面側が折れ面である点は注意されよう。80は珪質凝灰岩製でいわゆる「抉入石器」である。打面部を留める厚めの剥片を用いる。85は黒色粘板岩製で、両面及び側縁稜上の一部を研磨した剥片の全周に加工を施す。加工は図上を粗く凹形に、左側縁の一部を両面からノッチ状に整える他は、腹面側に細かく行われており、形態的には「石匙」である。

二次加工痕有剥片(81・82) 加工痕を残すものの、定型的な石器の認定には躊躇するものを一括した。よって本器種にはスクレイパー、楔形石器、各種未製品などを含む可能性がある。81は使用痕を残す鋭利な左側縁以外は、両面から加工を施す。加工部位は左側縁のサポート的なものと判断した。82は相対する2辺に截断面をもち、他の1辺に二次加工を施すもので、「切断調整石器」(岡村1979)と呼ばれているものである。これに類する形態の石器は多くあり、本来は二次加工痕有剥片と分離すべきと考えるが、1側縁あるいは2側縁に残る剥離の変異、楔形石器・スクレイパーとの関連など未整理のため、ここではとりあえず本器種に含めた。

使用痕有剥片(86) 86は黒色粘板岩製の、打面縁調整を施した横長剥片で、縁辺に小剥離と共に両面に珪酸付着(網掛け部)による光沢がみられる。同様の珪酸付着の剥片は、安定した大きさと、比較的多く存在し、石材は黒色粘板岩を用いる傾向がある。

鈎針形石製品(83) 珪質頁岩製、長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmで「し」字形を呈する。軸部は緩やかな曲線を描き、外縁は錢を意識してか、やや鋭角に、内縁は弧状に鈎部へと至る。軸部の調整は、a面内縁がリングの収斂しない折れ状の剥離面1枚で形づくられ、外縁は上半部を急斜度に、下半部はやや緩やかに加工している。そして内外縁とも軸部から鈎部にかけて入念な角度のある加工を施す。b面内縁は、素材の主要剥離面をそのまま留めており、軸頂部はヒンジ・フラクチャーとなっていることから、素材剥片の末端部であることが理解できる。外縁は平坦剥離が連続し、軸部から鈎部にかけて急斜度剥離を施し、鈎部末端に至る。

異形石器(84) 黒曜石製、長さ2.3cm、幅3.0cm、厚さ0.8cmで、「M」字形に近い形態である。大きさから考えて、石鏃の先端を打ち欠いたものと思われる。上下凹部は階段状剥離を呈す。

石核 図示し得なかったが、石核の最終形態により次のように分類できる。①最大長5cm程で、原礫面を打面とした塊状のもの。作業面以外は原礫面を留める。珪質頁岩と黒曜石が大部分である。②最大長5～8cm、厚さが2cm程で、板状剥片を素材とし、横長剥片や不定型剥片を剥取するもの。打面調整を施す例もある。大部分が黒色粘板岩によって占められる。③最大長3～8cmで、側面観が三角形・菱形を呈し、表裏面に作業面を残すもの。黒色粘板岩、珪質凝灰岩などある。④縦長剥片剥離の作業面を残すもの。②・③類は、同質の大型剥片が存在することから、大小の剥片をかなり生産したことが分かる。また、縦長剥片も少なからず存在するものの、それに対応する石核がほとんどないことから、剥片剥離の進行と共に石核形態が変容している点が窺われよう。

部分磨製石器(87・88) 87は黒色粘板岩製の横長剥片の右端に両面から研磨している。88も黒色粘板岩製で腹面側に研磨を施す。石質はほとんど黒色粘板岩で占められる。形態的には整ったものが多く、磨製石庖丁の未製品に似るものがある。

基石形石製品(89・90) 89は蛇紋岩製、長さ2.6cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。全体がすべすべしており淵は稜をもたず丸みをもつ。90も同様の蛇紋岩製、長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmで、器面の状態は89に似る。こうした器面の特徴から、土器の器面をみがく「土器調整道具」(小山・羽毛田他1987)、「研磨礫」(直井・関沢他1990)に分類されるべきものかもしれないが、それら(本稿では「ミガキ石」に分類)の多くは篋状を呈し、手にしっ

かり持てる大きさであるのに対し、本品はやや小型である。また、緑色の蛇紋岩を用いていることから、装飾品の可能性も考えられ本器種とした。但し、土器調整具としての用途を否定するものではない。

磨製石鏃(91~103) 91~94は未製品で、その他は全て有袂単孔式で二等辺三角形状を呈す。大型品(93・96・99・103)とその他の小型品がある。91は研磨前の粗い整形、92は研磨途中、そして全面研磨と細かな整形を経て穿孔する(93・94)。96は基部に切り込みをもち、103は長身細身で背に明瞭な鏝をもつ。101は先端部を再研磨した可能性がある。石質は、珪質凝灰岩や片岩が主体で、他に粘板岩がある。

磨製石庖丁(104~107) 半円形直刃の2孔で、いずれも破損品、未製品で、完形の製品はない。石材には粗い安山岩(104・105・107)、黒色粘板岩(106)が選ばれている。安山岩製は穿孔段階での未製品、粘板岩製は剝離による整形、初期研磨段階での未製品がある。

扁平片刃石斧(108~117) 最大幅により①1~2cmのもの(108~112)、②3~4cmのもの(113・114)、③5cm以上のもの(115~117)に分けられる。108・111は共に蛇紋岩製、他は黒色粘板岩製である。また、図示していない①類のものには珪質凝灰岩製のものがある。110・117は刃部の一部に面をもつ未製品である。研磨調整において、研磨が全体に及ぶことは稀で、蛇紋岩製の108・111以外、調整面を残す。よって、製品と未製品の区別は機能部である刃部の面の有無で行った。それと共に、鑿や楔として用いた際に形成される頭部の剝離面が、調整段階の剝離面と同様に残置しており、研磨面と剝離面の先後関係の峻別に注意せねばならない。

大型蛤刃石斧(118~120) 3点ともハンレイ岩?と思われる石材を利用している。119は薄型で側面がやや平坦な面となるもので、むしろ定角式石斧とすべきかもしれない。いずれの刃部にも刃こぼれがみられる。

3. 小結

本遺跡出土の石器・石製品類は、弥生時代中期中葉・後葉の土器に伴う、竪穴住居の重複関係から少なくとも4時期の連続した一定期間に残された資料と見做すことのできるものである。遺跡全体の石器構成は、先にみたように、二次加工痕有剝片、使用痕有剝片を中心に、打製石鏃、楔形石器、石核、石錐、スクレイパー、扁平片刃石斧、部分磨製石器、磨製石鏃を一定量もち、磨製石庖丁、砥石、大型蛤刃石斧、敲石などを少量含む。そして、これらに鈎針形石製品、異形石器、石戈、管玉などを伴う。

さて、ここでは先ず、狩猟具(武具を含む)を見てみたい。打製石鏃は、定型的な石器のなかで量的に最大数を誇っている。既に述べたように、打製石鏃の中で特徴的な類型は①-(a)類・②-(a)類で、これらは形態的には愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡(加藤・七原他1982)、阿弥陀寺遺跡(石黒編1990)、愛知県春日井市勝川遺跡(赤塚・石黒他1984)、岐阜県美濃加茂市牧野小山遺跡(紅村・増子他1973)などで見られ、東海地方におけるこの時期の打製石鏃の一特徴を示すものである。特に66はその典型で、長野市塩崎小学校遺跡(矢口他1979)、佐久市北西の久保遺跡(小山・羽毛田他1987)でも1点ずつ出土しており、出土数の僅少さからも搬入品の可能性が強い。更に、③-(b)類とした石英質安山岩(下呂石)製の37・42は、明らかな搬入(交易)品で、飯田市恒川遺跡(桜井・小林他1986)でも同形態・同石質のものが1点搬入されていることから、直接的・間接的な東海地方との関連、特にこれら大型石鏃(注1)を武器とする観点(佐原1964、松木1989)に立って考えるならば、武器を媒体の一つとした流通関係を考えることができよう。そして、東海地方における武器の発達の中心地域を濃尾平野南部である(松木前掲)とするなら、搬入という現象のみに留まらず、併せて東海地方に特有な石鏃形態・技術をも受け入れている可能性がある。本遺跡の①-(a)類・②-(a)類は、東海地方のそれに比べ、断面形が丸味の強い凸レンズ状を呈さない点で異なるものの、多くは大型品に属する。また、磨製石斧や磨製石鏃を伴わない点が気が掛かるが、新潟県柏崎市下谷地遺跡(佐藤・斉藤・高橋他1979)でも、①-(a)類・②-(a)類の石鏃が、中期中葉・後葉の栗林系土器と共に出土しており、これらを単に縄文時代の有茎鏃の伝統を残すという認識に留

めず、新たな大型石鏃の波及ルートの一つとして「木曾川や奥三河をへて信濃に、ここから越後…へと伸びる」(神村1988a) ことをも検討する必要がある。

一方、磨製石鏃に関しては、これまで県内の下伊那郡高森町北原遺跡(松島・戸沢1951、神村1972)、恒川遺跡、松本市県町遺跡(直井・関沢他1990)などで、素材剥片獲得から製品までの一連の製作工程が明らかにされており、本遺跡でも粗割→剥離調整→研磨(側縁・表裏面→挾部・刃部)→穿孔という過程を追うことができた。また、県町遺跡では打製石鏃の用途を狩猟用、磨製石鏃の用途を打製石鏃より長大であること、磨製石鏃出現の突然性、狩猟に適さない低地の集落での大量生産という点から、「人間を標的とする武器」としている。本遺跡では、打製・磨製石鏃に大型品と小型品が混在しており、打製と磨製の一元的な対比・分離による二極化では、用途特定が解決困難と思われ、打製石鏃・磨製石鏃の有無、比率、大きさ(大型・小型)などの総合的評価が必要と考えられる。例えば、恒川遺跡は大型・小型の磨製石鏃が主体、打製石鏃は数点あるのみであり、磨製石鏃のなかで大・小型を作り分けている。北西の久保遺跡は打製石鏃が中心で、磨製石鏃に比して小型であることから、前者を小型指向、後者を主に大型指向とし得るであろう。本遺跡は、打製石鏃で大・小型品を、磨製石鏃でも大・小型品を製作している。すなわち、こうした打製・磨製→大型・小型の対応関係を考慮するなら、石質や製作技術の差を越えて大型品と小型品の作り分けが為される場合もあるといえる。しかしながら、打製が小型品、磨製が大型品を中心に存在していることも事実で、作り分けはあくまでも大きさと石材・製作技術の間の安定した結びつきの上に成り立っていると思われる。

次に、主な加工具を見てみたい。多数出土したものに石錐と楔形石器がある。石錐は磨製石鏃、磨製石庖丁の製作における最終段階の穿孔作業を裏付け、その形態・加工にみられる多様性は、対象の違いのみならず、穴の穿孔・拡大・貫通という細かな用法を反映していると考えられる(矢島・前山1983、町田1990)。楔形石器は、中期前半の大明市来見原遺跡(島田・清水1988)でも安定して組成されており、その用途・役割の重要性を石器群全体から評価していく必要がある。

木材伐採・加工用の大陸系磨製石斧では、伐採用の大型蛤刃石斧は僅かで、加工用の扁平片刃石斧(楔・鏝としての小型品含む)が多い。植物加工・石器製作に関わるものとして敲石、石皿があるが出度量はごく僅かで、研磨作業に用いる砥石(置砥石・持砥石)も少量である。

農具(収穫具・耕作具)では、磨製石庖丁の他、部分磨製石器、珪酸付着の使用痕有剥片に代表される黒色粘板岩製の大型剥片がある。磨製石庖丁の製作は、製品・未製品の石質や数からいって、組織的・集中的に行われたとは思われず、搬入品と在地品が混在した状況を呈していると考えられる。部分磨製石器は、既述したように一定の大きさを持ち、形態的に整ったものが多く、この点において二次加工痕有剥片や使用痕有剥片と分類した中で共通するものが存在しており(写真図版参照)、珪酸の付着する石器はこれらにほぼ限定される。よって、作業対象に有効な剥片を得るため打面縁調整を施して剥離し(86・88)、そのまま使用する(86)、使用によるダメージの修繕や剥離した剥片が条件を満たさなければ、研磨する(87・88)か加工を行う工程を追認できよう。一方、耕作具は打製石斧1点のみである。

この時期の出土としては珍しい釣針形石製品がある。桐原健氏によれば、長野県ではその出土は縄文時代中期後半に限定され、実用として加工の易い鹿角製を模したもので、小型精巧品は身体へ装着し、大型品は住居出入口部に掛けられ、埋められると推察されている(桐原1984)。しかし、石鈎とされた21点は大きさ(3~8cm)・形態にかなり変異をもち、スクレイパーを含む可能性がある。加工の困難さは、小型になるほど、軸部と鈎部の角度(屈曲度)が鋭利になるほど増すと思われ、83はこうした点と形態から小型精巧の装飾品に属すると考えた。ちなみに、紅村弘氏は岐阜県中津川市落合五郎遺跡出土の石製釣針(2cm程)に関して、実用品としての可

能性を述べ(紅村1963)、直良信夫氏は岐阜県上室出土の、軸頂部に糸掛け用の袂りをもつ石製釣針を、出土地の特徴を勘案し、溪流釣用としての実用を示唆している(直良1976)。

以上、大雑把で冗長となったが、狩猟具(武器を含む)、各種加工具を主体とする本遺跡の性格・評価については、慎重にならざるを得ないものの、背後に急峻な山を控える自然堤防上に立地し、武器形石製品の石戈や大型石鏃の安定した保持に表象される状況は、既に県町遺跡の報文で記されているように、社会的緊張状態下にある遺跡の様相を示しているのかもしれない。その具体像把握のためには、今回触れることのできなかった遺跡の立地と住居の配置関係、住居などの遺構単位での遺物(土器、石器、石製品)のあり方などを検討し、他の周辺遺跡と比較していかねばならず、今後の課題としたい。また実測が全ての器種に及ばず、資料提示という基本的義務を果たせなかった点についてはお詫びしたい。

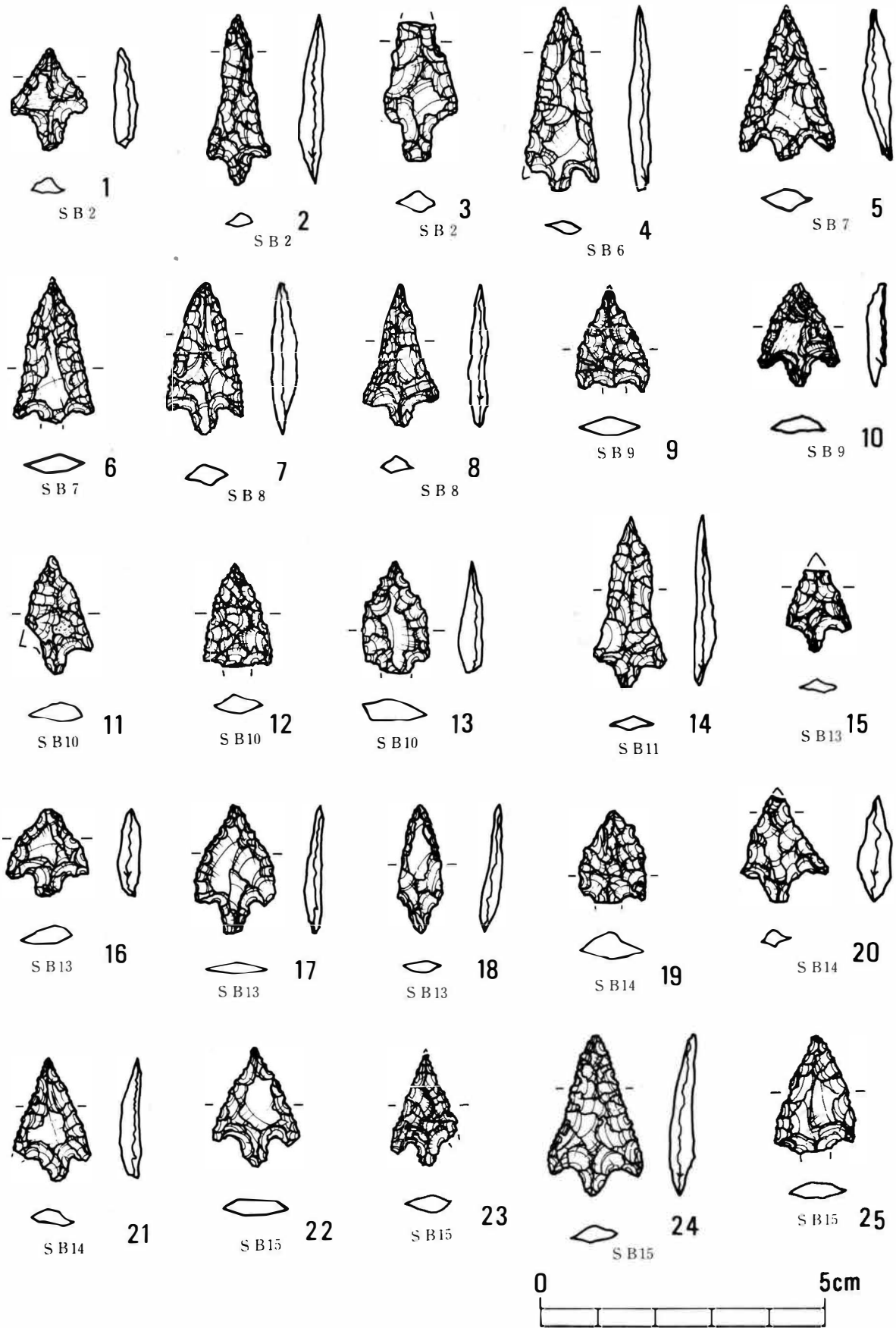
注1 佐原氏は凹・平基式群が長さ3cm、重さ2g未満に、凸基式群が長さ3cm、重さ2g以上に分布の中心があることを凸基式群=武器の一つの根拠としている(佐原1964)。ここでは形態にかかわらず長さ3cm以上のものを大型石鏃、以下のものを小型石鏃として扱う。そして、前者が実用・威嚇用としての武器、後者が狩猟具の役割を中心的に担っていると仮定する。

参考文献

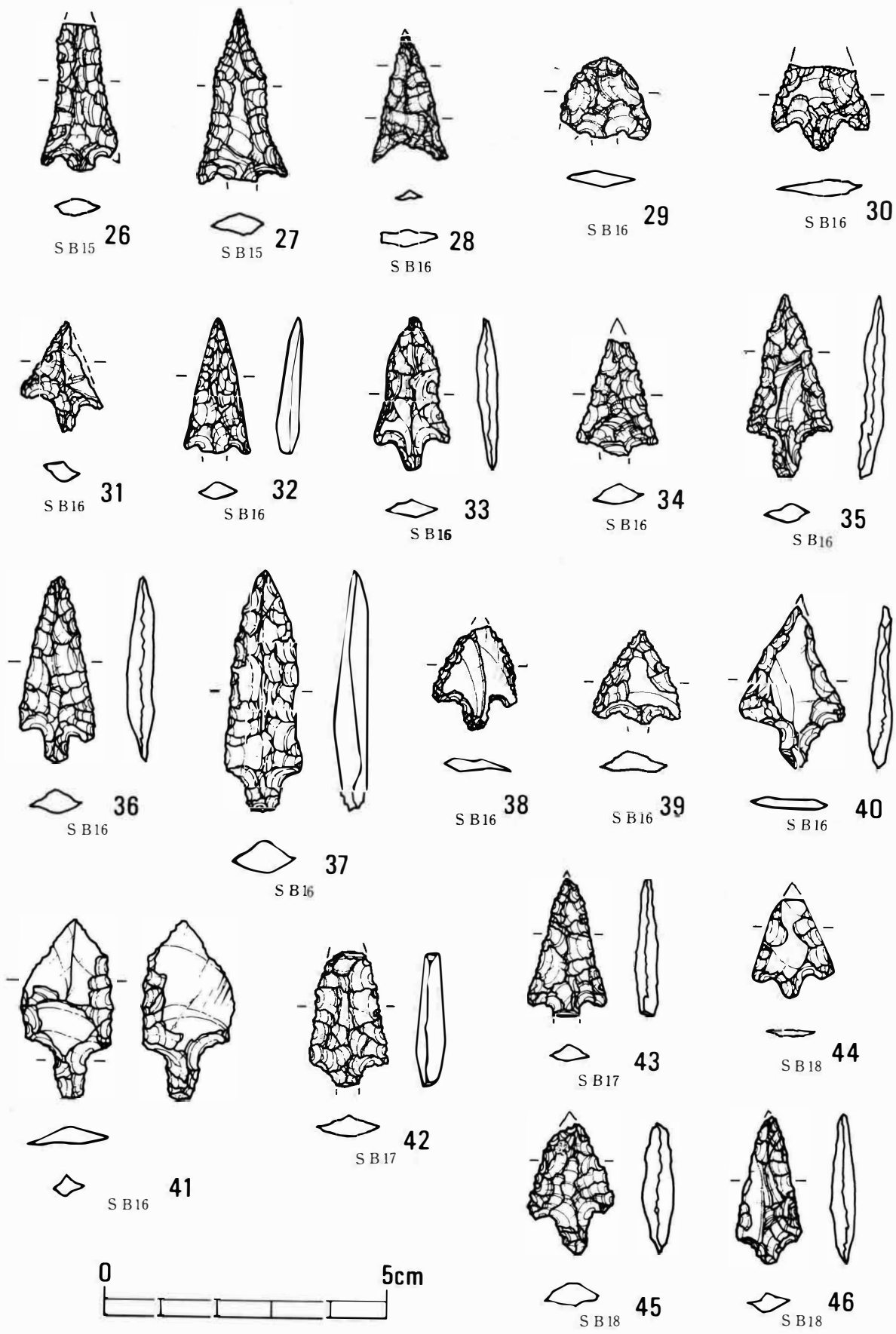
- 赤塚次郎・石黒立人他『勝川』愛知県教育サービスセンター 1984
- 石黒立人編『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 岡村道雄「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要』5 1979
- 加藤安信・七原恵史他『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982
- 神村 透『北原遺跡』長野県高森町教育委員会 1972
- 神村 透「中部の弥生石器」『考古学ジャーナル』290 1988a
- 神村 透「III-3 弥生時代の道具」『長野県史 考古資料編』全1巻(4)遺構・遺物 1988b
- 桐原 健「縄文の石鈎」『中部高地の考古学III』1984
- 紅村 弘『東海の先史遺跡 総括編』1963
- 紅村 弘・増子康真他『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会 1973
- 小山岳夫・羽毛田伸博他『北西の久保遺跡』佐久市教育委員会 1987
- 桜井弘人・小林正春他『恒川遺跡群』飯田市教育委員会 1986
- 佐藤則之・斎藤基生・高橋保他『下谷地遺跡』新潟県教育委員会 1979
- 佐原 真「石製武器の発達」『紫雲出』託問町文化財保護委員会 1964
- 島田哲男・清水隆寿『来見原遺跡II』大町市教育委員会 1988
- 直井雅尚・関沢聡他『松本市県町遺跡』松本市教育委員会 1990
- 直良信夫『釣針』1976
- 町田勝則「石鏃について思うこと」『信濃』42-10 1990
- 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』140 1989
- 松島 透・戸沢充則「信濃北原遺跡調査概報」『諏訪考古学』6 1951
- 矢口忠良他『塩崎遺跡群(2)』長野市教育委員会 1979
- 矢島國雄・前山精明「石鏃」『縄文文化の研究』7 1983

第2表 3次面出土石器・石製品器種構成表

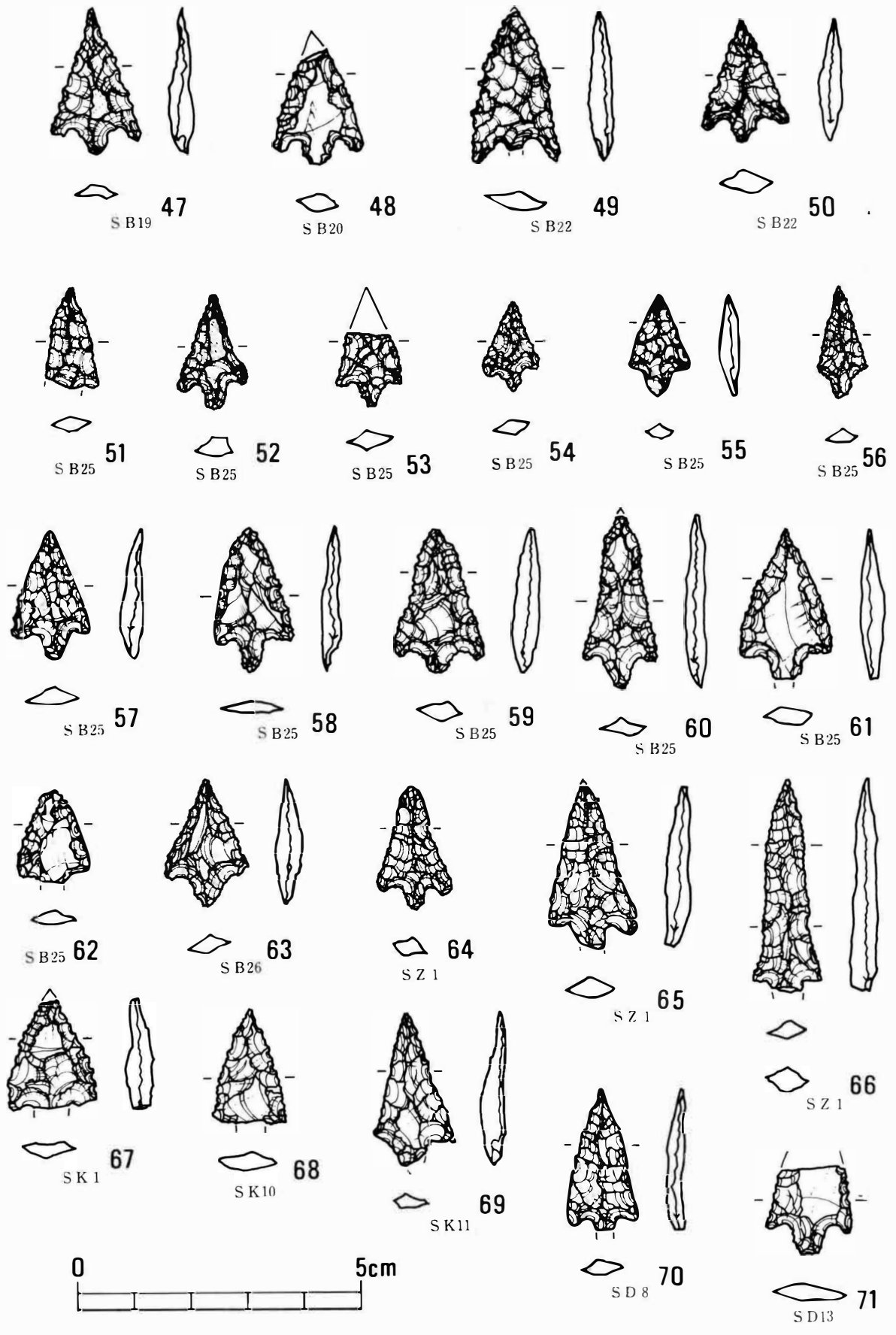
住居 器種	1	2	3	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	不明器種 一括併合	その他	計		
打製 石鏃	1	3			1	2	7	2	3			6	3	7	15	2	3	1	1		2				14	1	3	12	89	
同 未製品				1								2			1		1								2			2	9	
楔形 石器	2			6			7		1			2	4	4	6		6		3		1				24				66	
石錐			2	3	1		4		4			1	2	2	1		3	1	1						14	1			40	
イパ スケレ	1			2			2	2				6	1		1					1						7			23	
深加工 使用痕			2	8	2	1	23	4	3	1		1	4	7	20		5	3	13	2	2			2	36	2			141	
有剥片 使用痕				5	3	1	14	6	6		1	6	11	2	16	3		1	3	2	2		1	31	1		1	116		
石器															1														1	
打製 石斧																	1												1	
石核				2	1		9	7				5		3	6	1				3					11	1	1		50	
剥片 碎片	5		4	27	49	11	200	112	93	2	8	183	73	121	365	38	52	144	109	10	15			8	399	47			2075	
敲石				1			2																			1			4	
石皿														1															1	
磨製 石鏃				2			2		1			1	1	1	4										1		1		14	
同 未製品	1			1			1	2	1						5												2		13	
大型 扁平									1					1													1			3
扁平 同 未製品					1				2	1				3		3	1	2	2						1			2	20	
同 未製品				1					2					1	1										1				6	
磨製 石包丁									1					1		1									3		1		7	
同 未製品				1										1						1		1					1		5	
部分 磨製				1	1			2	3					2	3							1			3	1			17	
磨製 三方							2	2	1					2	5			1	2		1				3		1		20	
砥石				3			1		1		1						1								1				3	
浮子														1															1	
具形 釣針												1											2						1	
磨製 異形			1																						1				2	
磨製 異形																									1				1	
石支																									1				1	
管玉		1					1	1					1		2						1				1		5		13	
水晶			1																										1	
不明																									1				1	
計	10	4	10	64	59	15	276	146	118	3	10	217	102	160	454	47	74	151	137	16	25	1	11	557	56	3	29	2755		



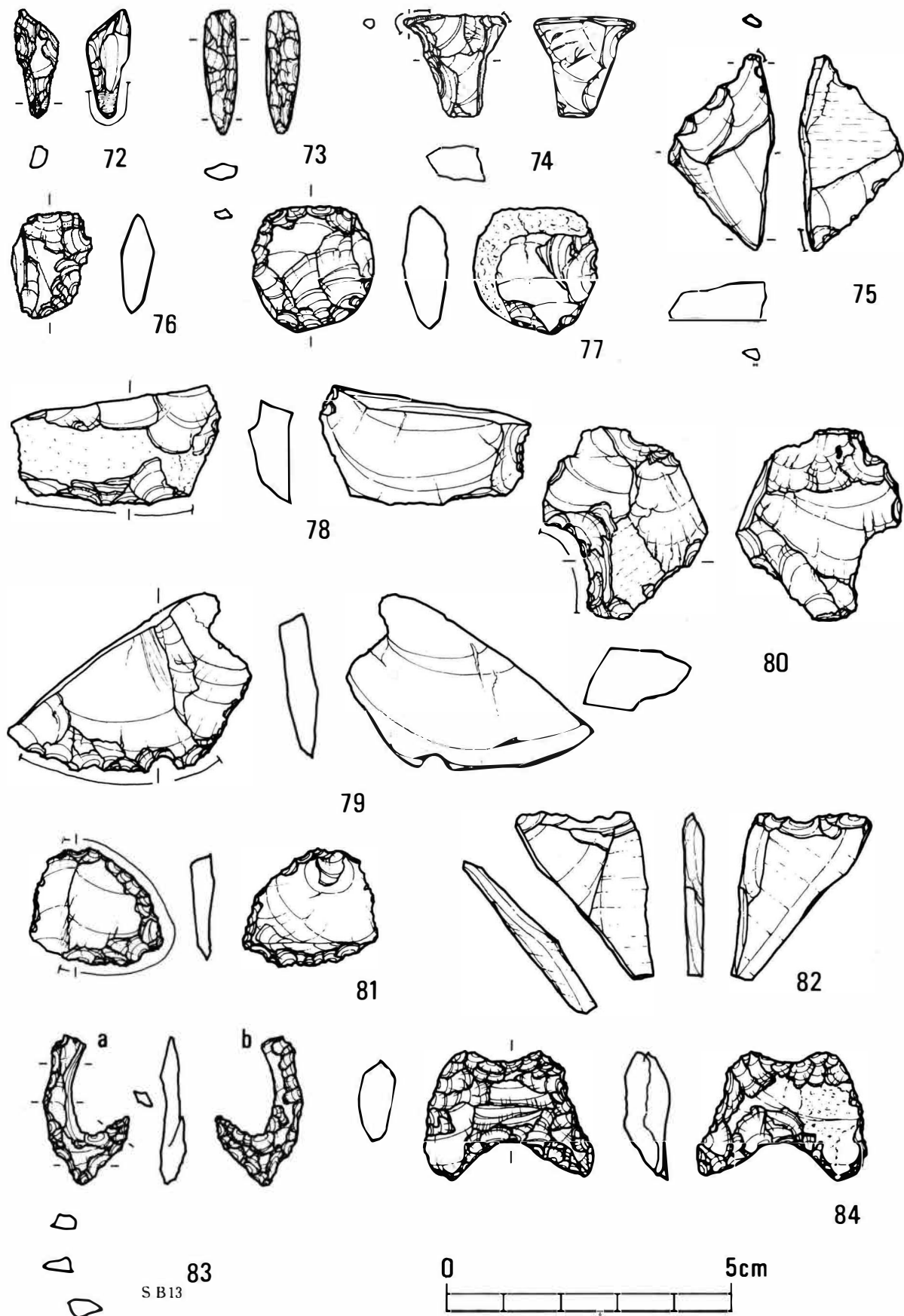
第107图 3次面出土石器实测图(1)



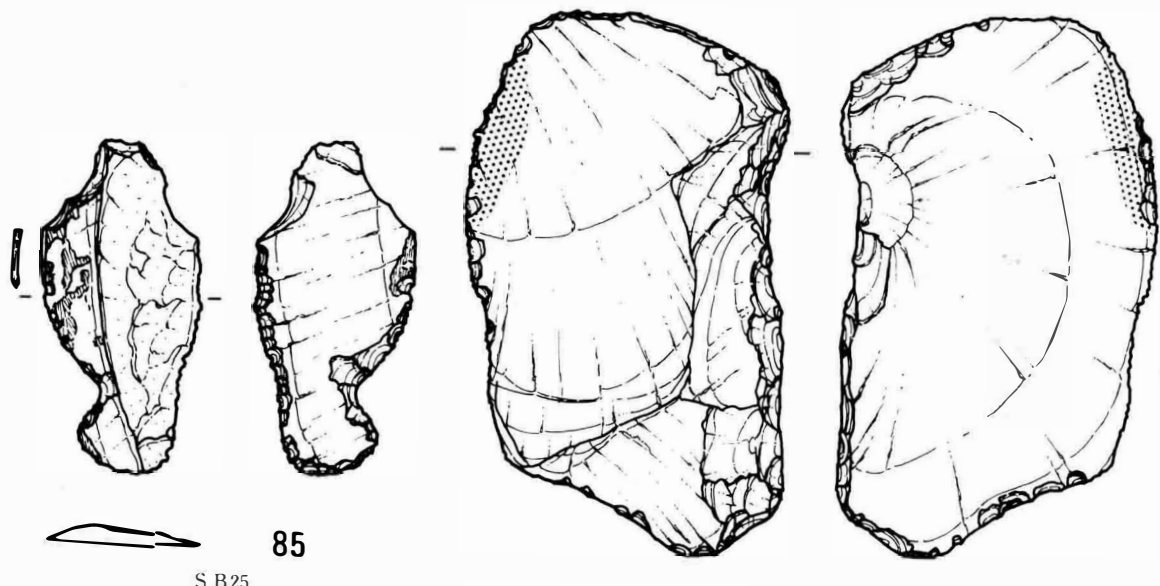
第108图 3次面出土石器实测图(2)



第109図 3次面出土石器実測図(3)

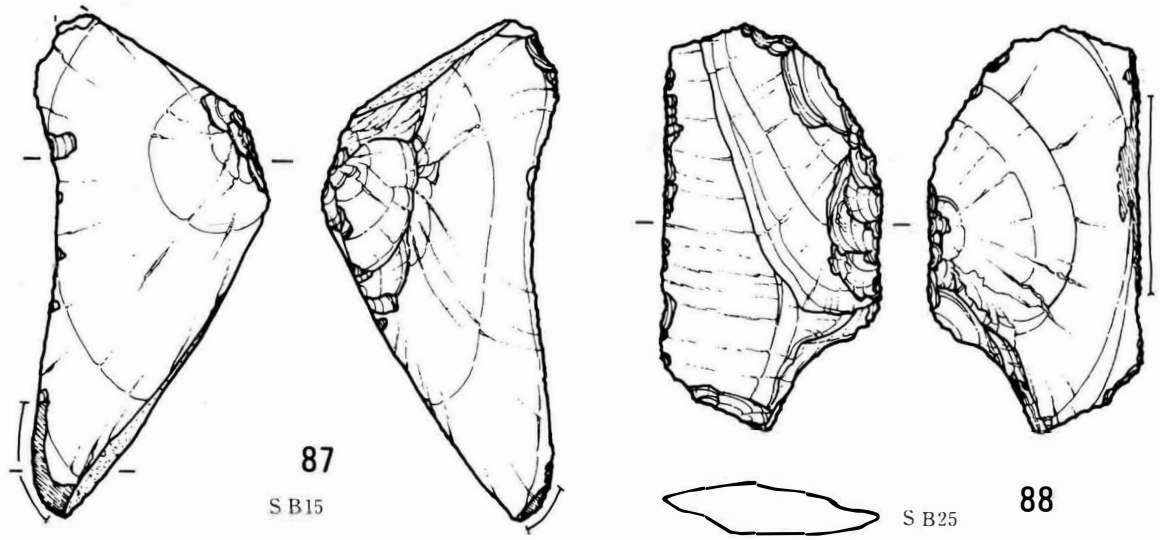


第110图 3次面出土石器・石製品実測図(4)(83以外全てS B 25)



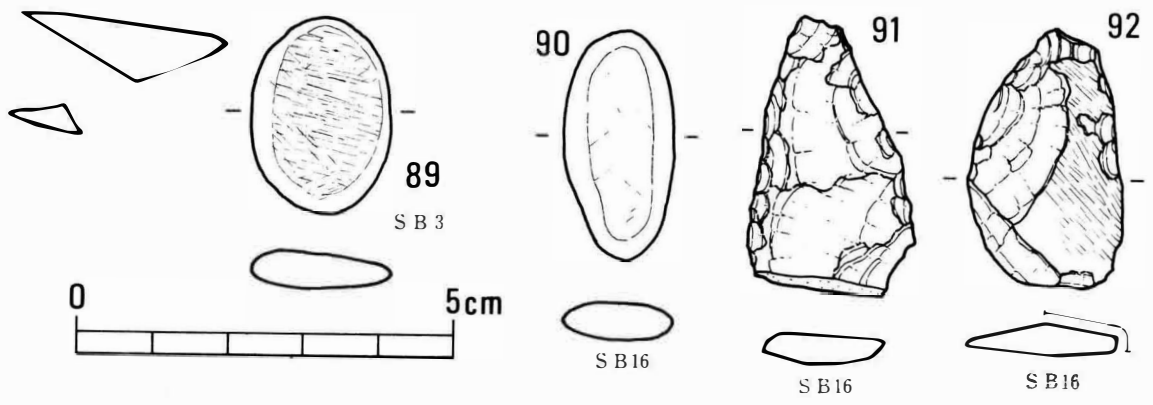
85
S B 25

86
検出面



87
S B 15

88
S B 25

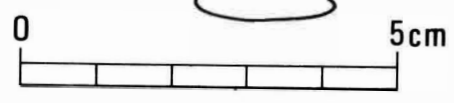


89
S B 3

90
S B 16

91
S B 16

92
S B 16



第111図 3次面出土石器・石製品実測図(5)